面白倶楽部

昭和二年五月二日郵便物認可
第五卷第五號（毎月一回一日發行）
大正十五年五月號

飾間宮兵衛

香蝶楼豊國画

大正五年
五月号

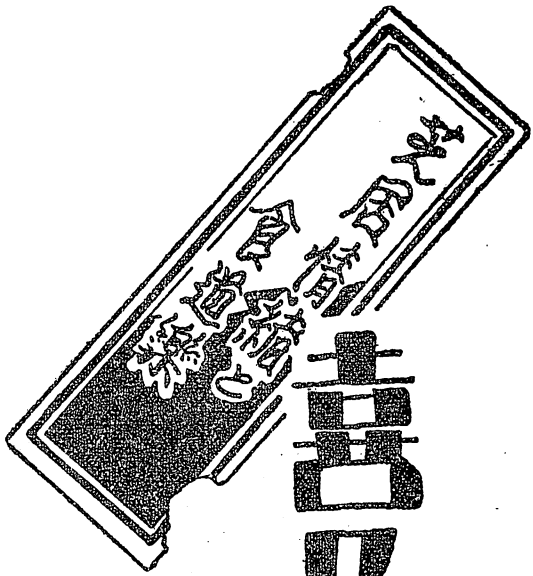
活動の朝と樂しい食後に

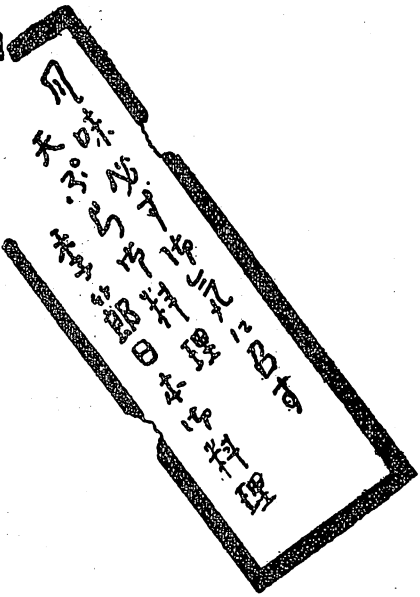
クラブ煉齒磨

親切な石鹸

カテイ石鹸

御芝居歸りには打揃ふて
お坐席で是非御會食を





支店
大阪支店　北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋

道頓堀　昭和五年五月號

第五年
第四十四輯

◇表紙（飾間宅兵衛）……

口繪

◆中座五月興行◇實川延若の飾間宅兵衛◇「夕だち」吉三郎の工藤、嘉久子の千代香、蝶子のお峰「道行初音の旅路」長三郎の狐忠信、浪子の靜御前「心中かつら川」延若の宗兵衛◇「天國地獄」嘉久子の秘書セツ、美禰子の女工トキ、日出子のチヨ、本郷の運轉手、龍子の友人、菊江の令嬢、久子の腰元、梅田の工場長◇「飾間宅兵衛」浪子の顏世御前、延若の宅兵衛、嘉久子の腰元おかる、菊江の大星妻お石◆浪花座の淡海劇◇淡海の馬子實は松永傳九郎（馬子唄）と濱田文吉（航海日記）◇「車夫から運轉手へ」辨慶の財產家、樂太の人力車夫、淡海の運轉手、かもめのその妹、「航海日記」の舞臺面「娘の行衞」の舞臺面◆角座の新國劇「シラノ」久松のロクサーヌ、島田のシラノ「異變白龍組」金井の青柳勇美太郎、久松のお澄、秋月の生駒、辰巳の尾形◇「掃部と新兵衛」南の狛伊勢、金井の掃部、中井の新兵衛「早慶決勝の日」野村の西岡、山路の妻、畑中の父、板田、小川、鈴木の校友◆文樂五月の人形淨瑠璃「近頃河原の達引」「嬢景清八島日記」「ひらかな盛衰記」の舞臺面◆南座の大歌舞伎◇中村吉右衛門の一條大藏卿◇「一條大藏譚」時藏のお京、三津五郎の鬼次郎、吉右衛門の大藏卿◇「所作事四種」田之助の業平、三津五郎の下男、三津之丞の鼠、裝助の吉三、もしほのお七、三津五郎のおやま、◇「赤垣源藏」又五郎の與之助、辰之丞の下女、吉右衛門の、赤垣源藏、時藏のおさみ、蝶太郎の下女、紅若の半助◇「八幡祭小望月賑」時藏の藝者おみよ、田之助の穗積新三郎、三津五郎の荷持作助……田中滿彥畫

◇扉（一條大藏卿）……福井福三郎（六〇）

◇劇界にも「合理化」を……

◆女優夏の花……高原慶三（二）

◆吉右衛門素描……堂本塞星（四）

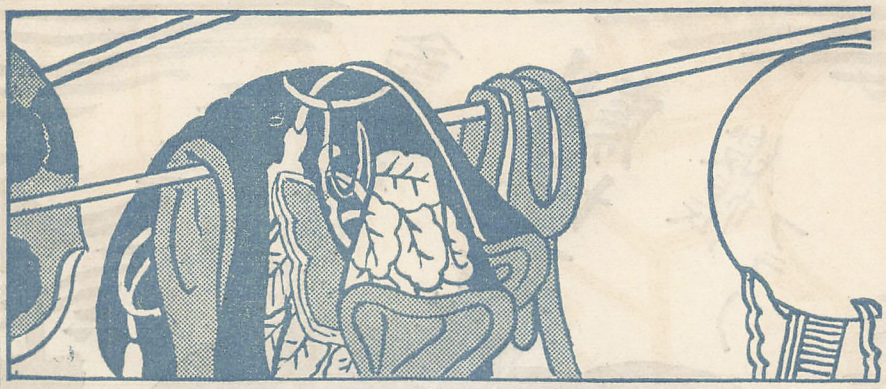
◆中座と南座……倉田啓明（六）

中座

◇飾間宅兵衛◇……（八）

◇天國地獄◇……（一四）

◇心中かつら川◇……（一六）



◆澤田を語る……久松喜世子（二八）
◆その後の新國劇……中井哲（二八）
◇眞紅の旗を掲げて……俵藤丈夫（二四）
◇「早慶決勝の日」作意……竹田敏彦（二六）
◆久々の京都へ……中村吉右衛門（三二）
◇巳之吉殺しの實説……西尾福三郎（五六）
◇文樂五月の襲名三つ……（五八）
□青木新兵衛に就て……長谷川伸（二二）
□宅兵衛の歌舞伎味……高谷伸（二〇）

南座

◇一條大藏譚◇……（三四）
◇赤垣源藏◇……（四二）
◇八幡祭小望月賑◇……（四八）
◇お七と吉三◇……（五七）
◆「大藏卿」の愚味……中井浩水（四〇）
◆吉右衛門禮讃……森ほのほ（四六）

◆歌舞伎番附……（別冊附錄）

□劇壇時事……（六二）
□劇壇往來……（六四）
△挿繪カット……田中滿彦
△編輯後記……松本泰三（六八）

留袖優勝旗
制帽制服
幕帽
緞帳
カフス
梅原商店
神戸市
楠町西門
電話
元町一六一五番

＝近日封切＝

江戸城総攻

帝國キネマ十周年記念映畫完成

總指揮　立花良介

原作　眞山青果

監督　志波西果

脚色　武内頼彬

撮影　立花幹也

新舊オールスター總動員

帝國キネマ演藝株式會社

お芝居の
あいまには
高尚で趣味深い
寫眞のお道樂が
いッちよろしい！

寫眞機は

リリーカメラ
パールカメラ
アイデアカメラ
パーレットカメラ

（カタログ進呈）

大阪市南區長堀橋筋一丁目

小西六大阪支店

電話南（三二九六九三二番）

本店　東京　本町二丁目

實川延若の飾間宅兵衛實は寺岡平右衛門

中座五月興行

「タだちし」

子久嘉・藤工の郎三吉
蜂おの子蝶・香代子の
箱内の子蝶田飯（丸）
……ねみお

の郎三長「路旅の音初行道」（左下）
前御静の子浪・信忠狐

衞兵宗の若延「川らつか中心」（右下）

確實

本邦最優最大の生命保險會社として基礎最も確實なり

有利

低廉の保險料を以て最も豐富なる加入者配當を實行す

親切

營業機關奉仕設備共に完備し加入者各位の賞讃を博す

契約高　八億五千餘萬圓

總資產　二億餘萬圓

日本生命

大阪市東區今橋四丁目

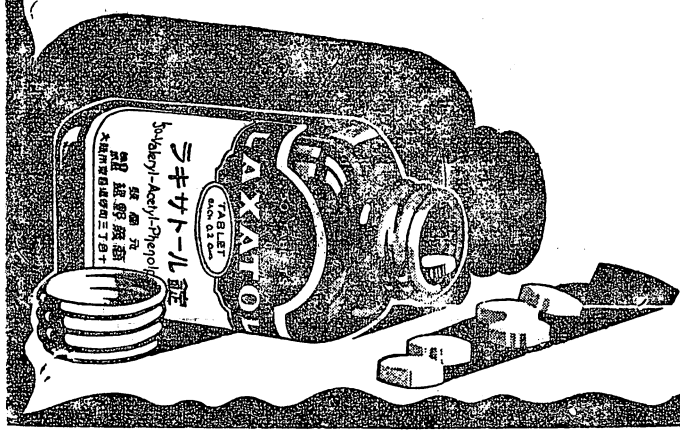
婦人の便秘に

婦人は種々な原因の爲に便秘を起し易く便秘者は絶えず頭痛、眩暈、嘔心、腹部緊張鼓腸等を起し不愉快なるは勿論身体に悪影響を與へるものなり、故に便秘ある婦人はラキサトールを用ひて便通を調節すべし。

下剤

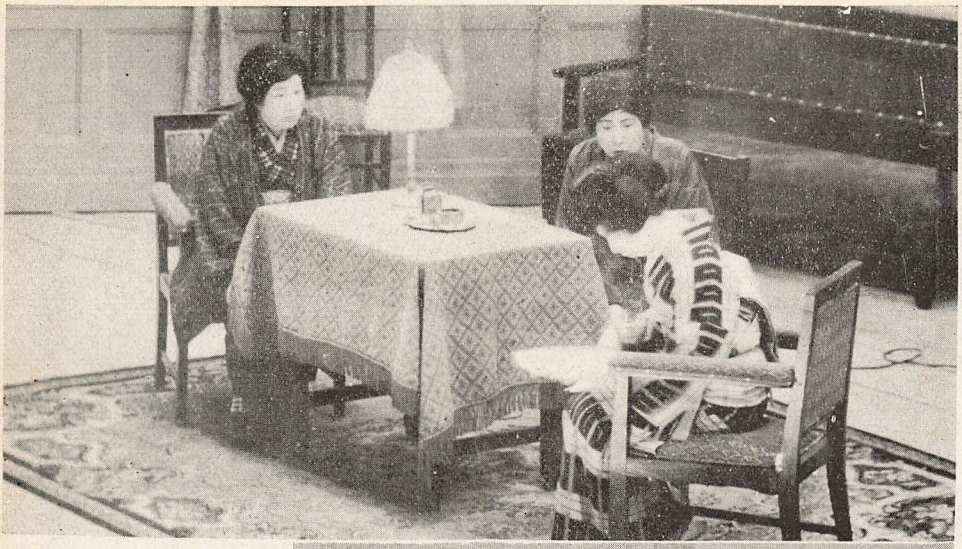
ラキサトール

粉末錠劑、全國藥店にあり



大阪市東區道修町
發賣元 株式會社 塩野義商店
東京市日本橋區岩附町

L.O.11A



中座五月興行

「天國地獄」

（上）社長邸應接室の場

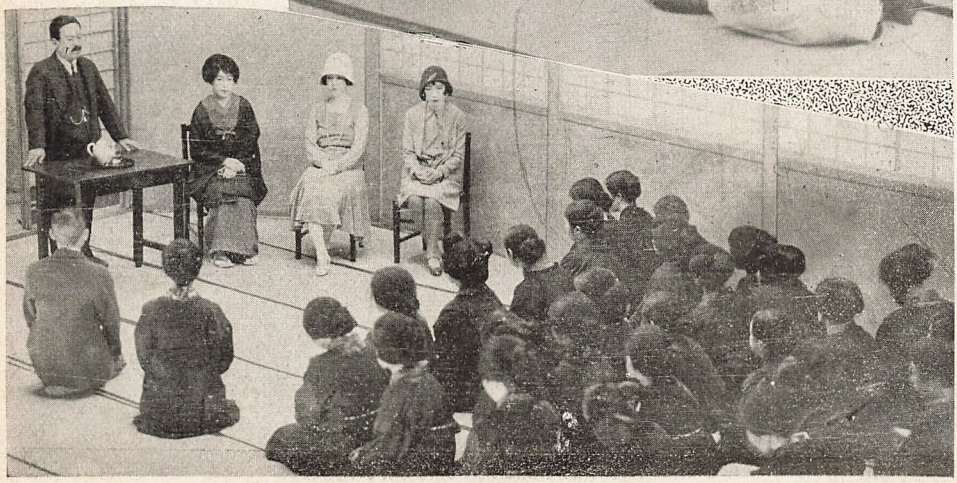
嘉久子の秘書櫻井セツ・美禰子の女工糸山トキ・日出子の佐川チヨ

（中）女中部屋の場

嘉久子の小間使セツ・本郷の運轉手

（下）寄宿舎の廣間

龍子の友人・河村の令孃・久子の腰元梅田の工場長富永



中座五月興行上演

「飾間宅兵衛」

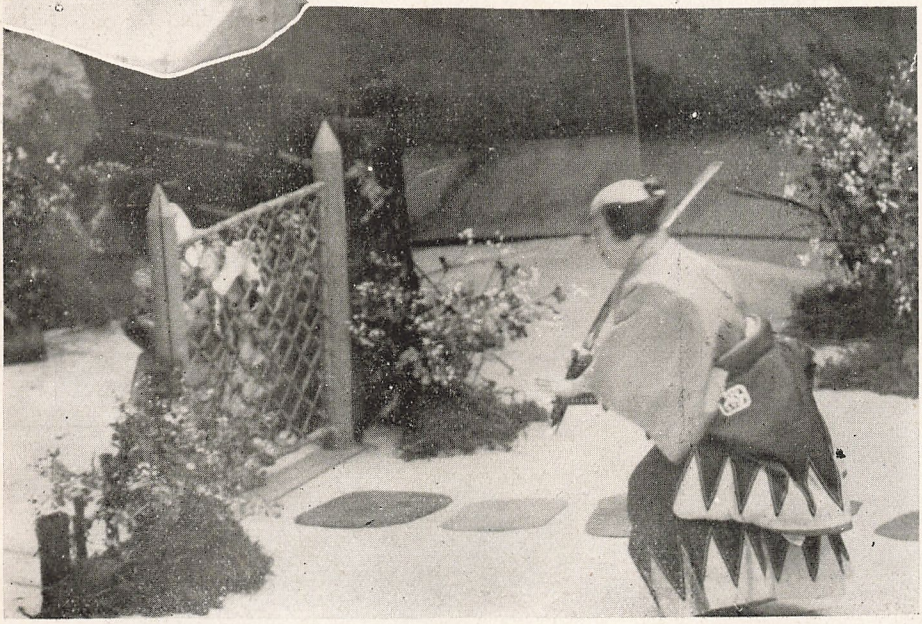
（上）左は初瀬浪子の額世御前・右は實川延若の飾間宅兵衛

（下）眞葛奥庭の場

左は村田嘉久子の腰元おかる・延若の宅兵衛

中座
五月「飾間宅兵衛」眞葛奥庭の場

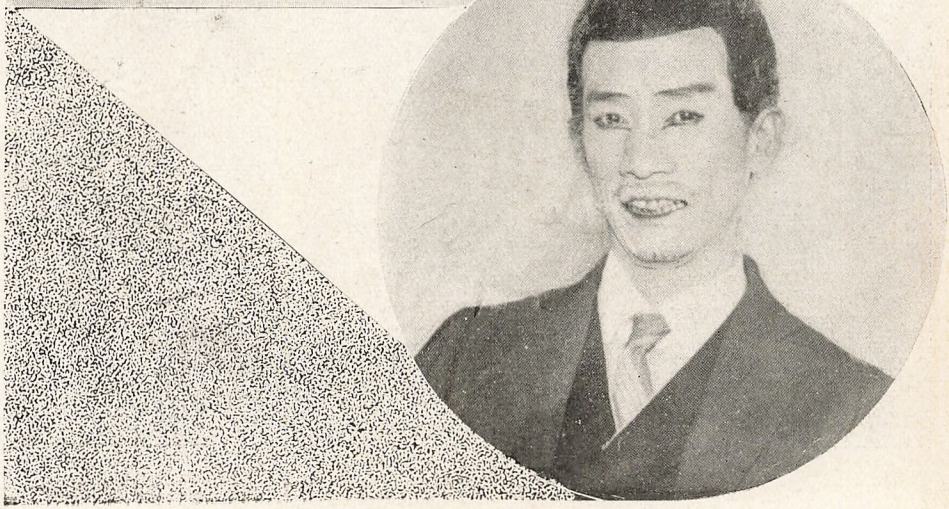
（上右）河村菊江の大星妻お石
（上左）延若の宅兵衛・村田嘉久子の腰元おかる
（下）延若の宅兵衛實は平右衛門・村田嘉久子の腰元おかる



◇一年ぶりで大阪に歸つて來た

浪花座五月の淡海劇——◇

（上）は淡海の唄はぬ舊喜劇「馬子唄」の馬子實は松永傳九郎（下）は「航海日記」に活躍する淡海の濱田文吉



ルービヒサア
清涼飲料
ソロトンボリ
ASAHI BEER
ASAHI
LAGER BEER
SPECIALLY BREWED FOR EXPORT
DAINIPPON BREWERY COMPANY LIMITED TOKYO JAPAN
大日本麦酒株式会社

好評 御化粧用 好評

たし出れ賣てっ立日

散歩にいやなあぶらぢ
お忘れあるな

スキナ
あぶら取紙

各地の化粧品店石鹸店に於て販賣いたして居ります。
尚道頓堀の各座の賣店にても常備いたして居ります。

お買求めの際はスキナと御指定を乞ふ。

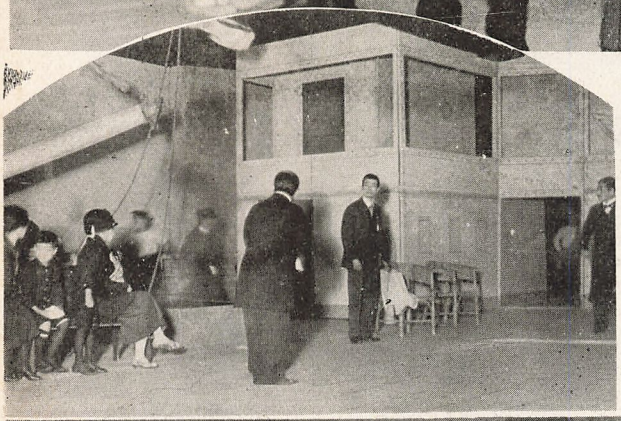
大阪 スキナ屋 謹製

淡海劇五月の舞臺から

（上）「車夫から運轉手へ」
右から辨慶の財産家・樂太の人力車夫
淡海の運轉手・かもめ、その妹

（中）「航海日記」の舞臺

（下）「娘の行衛」
正直でも鈍感は駄目ですと一座の中堅が競演……



【角座五月の新國劇】

丁度一年ぶり——苦難の一旅を突破して、若葉輝く希望の五月に新鋭復興の氣を漲らして新人の更生的熱演——。

（上）「シラノ」
久松喜世子のロクサーヌ
島田正吾のシラノ

（下）「異變白龍組」
金井謹之助の青柳勇美太郎
久松喜世子の松菊のお澄

角座の新國劇——

（上）「早慶決勝の日」

（右から）野村の西岡監督・山路の妻・畑中の父・坂田・小川・鈴木の校友等

（中）「異變白龍組」

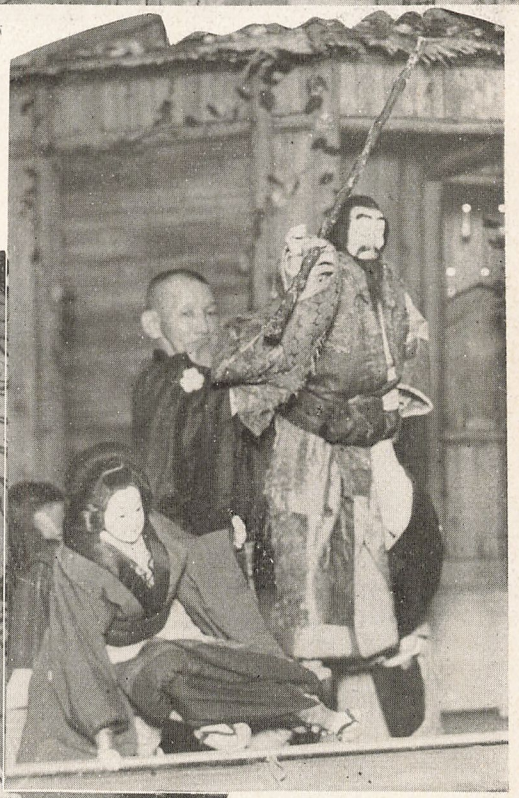
（左）秋月の庄駒繊之助　（右）辰巳の尾形宗憲

（下）「掃部と新兵衛」

（右から）南の伊勢・金井の岡閑掃部・中井の青木新兵衛

上――『近頃河原の達引』
堀川猿廻しの段
玉七の母・扇太郎の傳兵衛
文五郎のお俊・榮三の與次郎

中――『孃景清八島日記』
日向島の段
榮三の景清・文五郎の娘糸瀧



文樂座 五月の舞臺から

下――「ひらかな盛衰記」
神崎揚屋の段
榮三の侫ケ枝

プッロシシイルマ

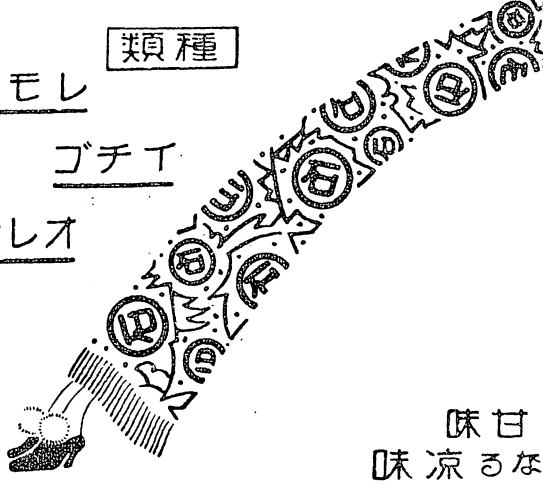
るふと杯十が杯一
素の料飲涼清

類種

ンモレ

ゴチイ

ヂンレオ



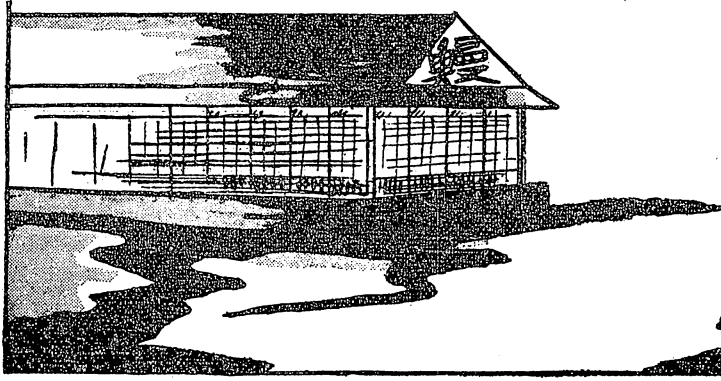
味甘るせ越卓
味涼るな快爽

目ラ二町路淡区東市阪大
株会社合薬製石丸
八一六四　七八三一　局本電

大阪名物

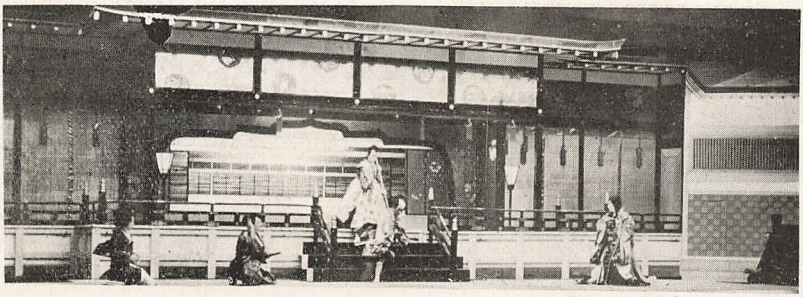
船生州

電話南
四八一〇
九五二
四八四四



京南座へ來た中村吉右衞門等の東京大歌舞伎——

中村吉右衞門の一條大藏卿



京都南座五月興行

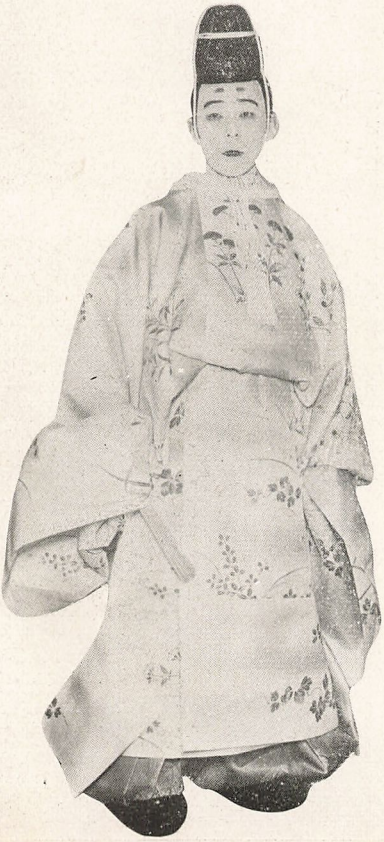
「一條大藏譚」

(上)……奥殿物語りの場

(中)……檜垣茶屋の場

吉右衛門の大藏卿・時藏のお京

(下)……(右)時藏のお京・三津五郎の鬼次郎(左)は吉右衛門の大藏卿



京都南座五月の東京大歌舞伎

◇——種四事作所——◇

（上の右）「業平東下り」田之助の在原業平（下の右）「鳥羽繪」三津五郎の下男檜八・三津之丞の鼠

（上の左）「お七と吉三」簑助の吉三・もしほのお七（下の左）「三ツ面子守」三津五郎の子守おやま

京都南座五月興行

「赤垣源藏」

（上）——鹽山邸奥座敷の場

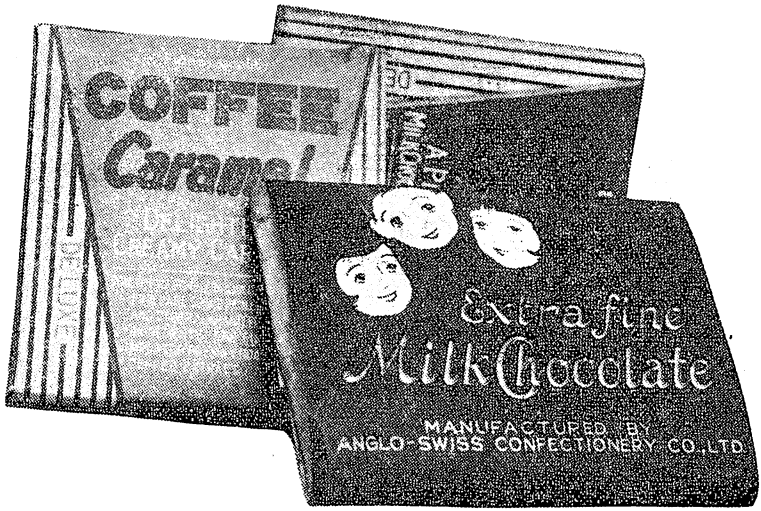
又五郎の奥之助・辰之亟の下女・吉右衛門の赤垣源藏・時藏のおさみ・蝶太郎の下女

（中）——鹽山邸玄關の場

吉右衛門の赤垣源藏　（下）紅若の若徒半助

アングロス井ス
ミルクチヨコレート
コーヒキャラメル
チヨコレート キャラメル

大阪市東區豐後町三番地
發賣元 株式會社 横山商店
電話東(94)一六六一 二〇一三番



あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目
大阪中央局私書函第壹壹八號
電話土佐堀(44)三〇八三番
四九四〇番
四九四一番
振替大阪一九三九〇番

松竹キネマ株式会社

はつらつたる初夏の陣容！

林長二郎主演　額田六福原作

冬木心中

冬島泰三監督

阪東壽之助主演

赤星重三

渡邊哲二監督第一回作品

月形龍之介主演

荒木又右衛門

惡麗之助監督

阪東妻三郎主演　大佛次郎原作

からす組

犬塚稔監督

市川右太衛門主演　金子洋文原作

飛ぶ唄

白井戰太郎監督

見られよ！華々しき我社の飛躍を！……。

盡きせぬ我等が初夏の寶庫を。

絶好の機會!!

特別奉仕

びわ湖島めぐり

御招待

お買求めは今!!

二重景品
空籤なし

ラヂウム温泉の大奉仕

初夏の琵琶湖遊覽御招待

本社大增築三周年の記念祝ひと平素の御愛顧にお酬ひ致したいと今回左記の通り德用入浴回數券御買求めのお方樣を抽籤により『琵琶湖めぐり』を御招待申上げます

御招待規定

▲德用入浴回數券（廿回券）金參圓
五百册一組に付御招待人員三十名樣
五百册を壹組とし當籤番號各組共通

▲特賣期間
第一回（昭和五年五月五日より同年五月十六日まで）
第二回（昭和五年五月十七日より同年五月三十一日まで）

抽籤期日
第一回　五月十七日
第二回　六月三日

抽籤は新聞社員及警察官の立會を乞ひ公正に行ふ

當籤發表
（大阪時事、夕刊大阪新聞紙上及本社）
發表　第一回　五月十八日
期日　第二回　六月五日

招待券及壹圓券引換は當籤發表の日より
期間　最終昭和五年六月十日限以後無効
場所　新世界　ラヂウム温泉本社内

◉當籤洩れのお方樣全部へ壹圓回數券各壹册宛贈呈

◎御招待遊覽は『六月中旬』特別借切船にて出發、船中にて晝食、御酒副景品をお渡しいたします

◎特賣回數券は本社及市内最寄の販賣店にてお買求め下さい
（詳細は本社又は通天閣下温泉案内所で御聞合せ下さい）

新世界　大阪名所　ラヂウム温泉

電話戎自一三三四至一三三七

京都南座の東京大歌舞伎

「八幡祭小望月賑」

（上の左）時藏の藝者おみよ　（中）田之助の穗積新三郎

（下）洲崎土手仕返しの場

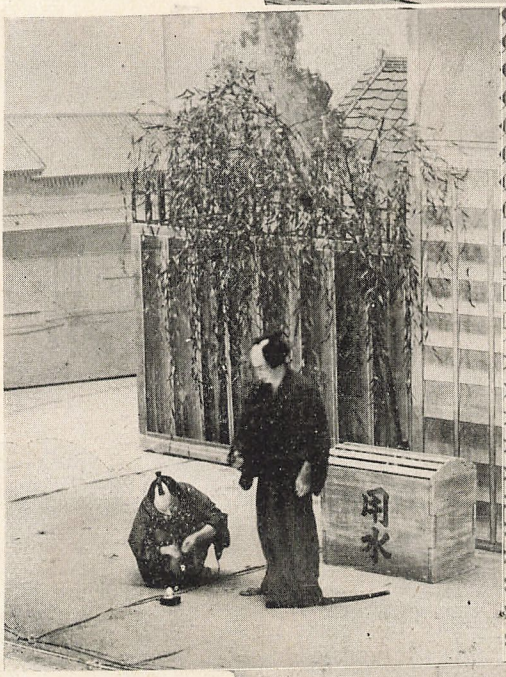
時藏のおみよ・吉右衛門の縞屋新助・三津五郎の荷持作助

京南座五月興行

東京大歌舞伎

二番目「八幡祭小望月賑」

舞臺の面いろ〳〵



（上）二幕目尾花屋座敷の場（中の右）仲町尾花屋の場（中の左）三幕目石町縮宿の場（下）二幕目返し佃沖猪牙船の場

專賣特許・合理的の蚊取藥（人畜無害）

イマヅ蚊取香

◇蚊取りには、線香よりよく効いて安くつくイマヅ蚊取香に限る。

◎新案の蚊取香燻燒器

◇昨年の燻燒器の欠點を補ひ、即座に渦卷線香にして、燻べるステキな燻燒器が發明されました。是非御使用を！

◇渦卷線香三本の効あつて安くつきます。

專賣特許

最新式芳香性（人畜無害）

イマヅ芳香油

▲便所くさみ止

効力＝カンプラ油の二倍 片腦油

◎芳香を發し

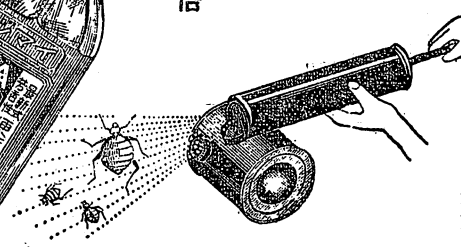
◎臭氣を止め

◎ウジを殺す

◎大掃除には衛生上便所其他不潔の場所へ是非本品をマカれよ！

▲南京虫退治には圖の如く噴霧器又は霧吹でカケると即死す！

◎本品を撒布すれば、人好きのする芳香を發たし、同時に驅虫消毒の力強大にして、傳染病の豫防となる。尙蓐虫に刺された時に、ツケると痛痒はすぐ治る。



大阪市西區京町堀通二丁目

今津化學研究所

振替大阪六八〇八九番

上演脚本の發表と新進の紹介

毎月一般より脚本を募集す

舞台戯曲

二百餘頁の脚本專門雜誌

歌舞伎劇の新作に新譯飜劇に力作大作を

發表し人新の作品を毎號二篇乃至四篇紹介す

毎號前月二十日出來

一部　金五拾錢（送料一錢五厘）

半年二圓八十錢・一年五圓五十錢

發行所

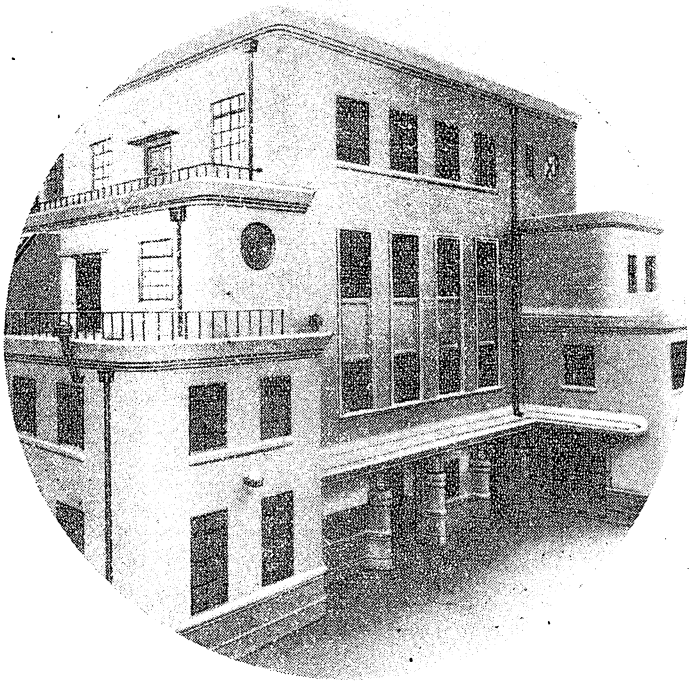
舞台戯曲社

東京・赤坂・氷川町二四

振替口座東京七三二八六番

松竹ビルディング竣成

庫倉課度用・庫倉品備の座各	地階
部作製具道大・口入ルビ	一階
部氣電・庫倉の樂文	二階
部裂小・部裳衣	三階
所習練部キゲクガ	四階



當ビル内へ

松竹衣裳部移轉

電話弐五六三四番

大阪市東區農人橋二丁目十二番地

合名會社

大阪橋本組

電話 東 特長一五八〇番 特長一一五八一番 二六五五番

支店 東京市麹町區丸ノ内二丁目六番地
電話丸ノ内特長四七八〇・四七八一番

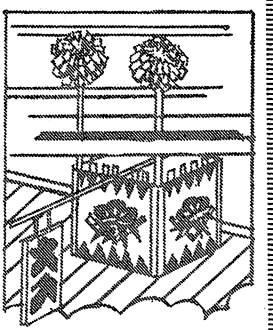
支店 小倉市大阪町十丁目（電話四三〇）

月刊・演劇研究・雜誌

第五年　五月號

演藝畫報

第四十四輯



皐月の櫓評判記

女優夏の花

高原慶三

今日は帝劇、明日は三越へ、これが大正時代に於ける社交的通語なのでした。帝劇といふ言葉が、一九三〇年の人間にどれ程アッピールするだらうか？

これは皆樣のお考へに一任しておきませう。

とにかく、それだけ帝劇といふ言葉が一トむかしの回顧的話材になつたことは間違ひなさそうです。

從つて、帝劇女優なるものが、今では大正時代史の一のモチーフたる狀態にあつたとすれば株式會社帝國劇場が二Pトラスト（二Pとは二人のパイン、卽ち白井大谷、松竹の二氏に、合流されたことは、とりも直さず、帝劇女優が歷史的モチーフから更生して新しい時代のスタートラインに立たものといはねばなりません。

それだけに、これまでの帝劇以外一歩も踏み出さないといふ溫室の花卉が懸値や飾氣なしに正味のまゝ緣日に出されたのです。たとひ、時世時節の餘義ない事情にもせよ、他所の女優と同列にハンデキャップなしに競爭する勇敢さは讃えたいと思ひます。

フレエ〳〵帝劇……ではない、もと帝劇女優!!

昔馴染、多少聲援の氣持で、所謂大正初期時代の歷史的

印象記を書いてホンの責ふさぎといたしませう。

村田嘉久子

中高の顔といふだけで、さして印象にのこる顔でもありませんでしたが、その頃から歌舞伎畑で、藝で賣てた人でした。そうして若い時分から娘形より花車形が出來た人だけに、やつぱり花より實の人といふのでせう、調子に梅幸を眞似る癖はありました。「心中萬年草」の姉で、眞暗の女人堂の椽に腰かけて弟の身の上を喞つ獨白の巧さなど未だに耳にのこつてゐます、とりわけ幸四郎の辨慶で上使のおわさなど、今でも眼にのこつてゐます。

來て見れば夕の櫻實となりぬ　蕪村

初瀬浪子

嫋々しい容、いつまでも若々しい哀調のある聲、あの玲智の眼、故宗之助夫人鈴木德子が去てから、帝劇女優の娘形の唯一人でした、けれどもこの人には戀するには餘りに情熱のない、人形のやうな冷たさは眼が禍ひしたのではありますまいか。久しく見せませんが、今もやはりあの冷たい可憐さを持ち續けてゐるのでせうか？。

この人に對して最もハツキリした印象は、それらの娘役よりその頃の所謂新劇畑にチヨイ〳〵足をふみ入れて成功してたことです。そのうちでもビヨルンソンの「新夫婦」の花嫁、自由劇場の「タンタヂールの死」でヴエランジエール？をやりましたが、今でもあの美しい聲は耳の底にのこつてゐるのです。清純!!そうした言葉が、その頃のこの人に最も適當してゐたやうです。花ならば卯の花。

卯の花のこぼるゝ蕗の廣葉哉　蕪村

河村菊江

やゝ反齒ではあるが、何となくあの口もとに特長のある人でした。帝劇女優中でも一ばん體格の立派な事と、大阪言葉でいふ少しイケズ顔ですが、あの眼尻の强さから、この人が舞臺に出ると、群星を威壓するかに見えました從つて淀君や千姫型の役、また八汐の樣な押のきく、帝劇女優中特に見る强さのあつた人でした。花ならば牡丹です。

廣庭の牡丹や天の一角に　蕪村

藤間房子

久しく、拜顏しませぬ、約十七八年も見ないでせう、が

昔も今も老け役をやつてゐるのでせうね、題は忘れましたが太郎冠者の喜劇の婆さんなど未だ記憶に殘つてゐます。

青梅に眉あつめたる美人哉　蕪村

埒もないことを申上げて恐縮、何しろ藤間、初瀨兩女史など十四五年ぶりに會ふ人です、材料の古いことは御辛抱願ひませう。

吉右衛門素描

堂本寒星

◇

大正の末期から、ほゞ一年に一度は入京して、京洛劇壇の人氣を義事にさらつて行く、二つの東京歌舞伎劇團がある。

一つは市川左團次一派で、他は中村吉右衛門一派である總てに鈍重である市川左團次、神經そのものゝやうな中村吉右衛門――そうした藝風の兩極端を示してゐる、二つの東京歌舞伎を迎へて、殆んど同樣の喝采と支持を惜しまぬ京都の觀衆の態度は、一見矛盾をしてゐるやうにも思はれるが、吉右衛門も左團次も、飽くまで熱烈な藝術的良心を以て、舞臺に臨む處に一致があり、この點觀衆の心をキヤッチする所以であらう。

左團次に就ては、何れ他日の機會を俟つとして、こゝでは吉右衛門について、少しく語りたい。

◇

吉右衛門は見た處、どうも極端な神經質の人らしく思はれる、隨つて健康の點にはいつも不滿がある、或は逆に餘り健康でないから、神經質に過ぎるといふ方が妥當かも知れない。

最近吉右衛門の入京する期節は、ほゞ五月と決つたやうであるが、これまでのやうに一二月の頃に來京すると、京の底冷へに可なり弱つたものである、そして病氣といふものに極めて臆病になつて了ふのが例である。

◇

處が、私の知つてゐる醫師に、下河原の辻さんといふ先生がある、吉右衛門が京都へ來る毎に、この辻さんが南座の樂屋へ現はれて、吉右衛門を安心させる、彼は兎角病氣をこさへる人だから、病氣をこさへさせないといふのであ

る、病氣らしく云ふ吉右衛門の手を、辻さんが握るとすぐ療るのだから誠に不思議である。

これは吉右衛門の、餘りに神經質な一例に過ぎないのであるが、この過敏な神經の躍動こそ、實に彼の尊い藝術を生む活力であつて、舞臺に臨む極めて嚴肅な態度、鋭い巧緻な心理描寫――總ては吉右衛門の神經質の賜物に他ならない。

◇

吉右衛門が一座を統率しての京都來演は、大正十三年以來のことで、彼が從來京都で上演した得意の人物は「一谷嫩軍記」の熊谷、「極附幡隨院長兵衛」の長兵衛、「鳩の平右衛門」の平右衛門、「戀港博多諷」の毛剃、「近江源氏先陣舘」の盛綱、「籠釣瓶花街醉醒」の治郎左衛門、「伊賀越道中双六」の政右衛門、「河内山宗俊」の河内山、「梶原平三譽石切」の梶原、「隅田川續俤」の法界坊など、殆んど十指に達してゐるのであるが、その一つ〳〵を悉細に觀察すると、彼の心理描寫が如何にも卓拔であることを否むことは出來ない。

◇

然かも、これらは悉く型による古劇であるが、彼の態度は飽くまで古い型を尊重しつゝ、其處で新しい魂を吹き込むことを忘れない、特に「陣屋」の熊谷、「隅田川」の法界坊、「石切」の梶原、「籠釣瓶」の治良左衛門などは、傳統美のなかに、まざ〳〵と生々しい人間を描出してゐるではないか。

深さ、鋭さ、強さ……それは吉右衛門の有つ藝術の全面容であるが、それにしても何故吉右衛門には、健康上にも強さ、鋭さ、深さが添はないのであらう、やがては歌舞伎劇界の牛耳を把握すべき吉右衛門の、こうした神經質の二つの方面を眺めて、私は常も淋しい氣がしてならないのである。

◇

さて、五月興行に於ける京都南座の演しものは、吉右衛門得意の「大藏卿」や「八幡祭」などが選定されたが「逆櫓」や「梅由」も京都の舞臺で見たいやうな氣がする。

だが、これらは何れも古い歌舞伎の世界である、今は中絶の形にあるが、吉右衛門にもグン〳〵新しい世界が開けて行かんことを切望する。

そして左團次に岡本綺堂氏の新脚本がある如く、吉右衛門にも誰れか適當な新脚本を提供する、才氣ある脚本家が

欲しいものであると、私はいつも思つてゐる。

（一九三〇、四、二四）

中座と南座

倉田啓明

深窓に育つて浮世の風波を知らなかつた帝劇の女優さんも、たうとう松竹の大傘下に併呑されて、四月は京の南座五月は中座と、他流仕合の首途にのぼつた。今まで他人の家の飯を食つたことのない、世間知らずのお嬢さんの一生も、時世時節でこれからは盤根錯節の浮世の荒波にもまれることだらう。嘗てはわたしの最負役者のひとりだつた初瀬浪子もゐる。デン物も器用にこなしてのける村田嘉久子もゐる。河村菊江もゐる。益田太郎冠者の喜劇で賣出した森律子のゐないのは少々寂しいけれど、とにかく紅紫とりぐ〳〵いづれあやめと引きぞわづらふ綺麗どころにちがひない。俳優に年齢なし、たとへ姥櫻になつても女優は舞臺が生命、舞臺でさへお客を艶殺して藝道精進すれば本地の風光をのづから開かれるといふものだ。さればにや寶塚の歌劇の生徒さんなんかは、齢三十に垂んとして子供の三人もある身になつても、まだ少女歌劇で通用する。そのむかし帝劇の女優さんは女役者と呼ばれた時代の尖端に立つて、斷然「女優」といふ舞臺藝術家の名乘を揚げた、日本演劇史に於ける光輝ある殊勲者である。しかも梅幸、幸四郎、宗十郎、松助、宗之助、勘彌などの名優を補導として錬磨の功を積み、帝國劇場の金光さんらんたる舞臺を唯一の戰場として、藝道合戰をつゞけて來たゞけあつて、その藝風も他の小芝居に育つたものとは自ら徑庭あり、コセ〳〵せず頗る應揚に、如何にも大家深窓の令嬢にふさはしい趣があつて、貴顯縉紳の鑑賞する處となつた。この悠揚迫らずノンビリとした點が、彼女等の貴い生命であるのだ。だから、それだからだ。今後とも雨後の筍よろしく簇生して瞬間的の人氣を博し、忽焉としてかげらふの如く消え去る當代の映畫女優を羨望せず、一路已れの貴い生命を大切に、藝道のために精進努力してもらひたい、わたしは他人事ながら望みたいのだ。

それにしても最近この女優さん達の出し物は、あまりに

安價過ぎる。「夕立」も「天國地獄」も「結婚反對倶樂部」も結構であらう。しかし他にもつとアンビシアスなものを選び、男優を對手に大いに腕を揮つて欲しいものだ。忌憚なく言へば以前の帝劇の女優劇といへばいつも大甘物揃でウンザリさせられた。今後は切角松竹の大世帶の仲間入をしたのを機緣に、一つ世間をアッと言はせる程の野望に燃えたものをやつて、どうだ帝劇の女優はこんなものだと、新しい機鋒をあらはしてもらひたい。

◇

吉右衛門が南座へ出演する。もう一足延ばして大阪へやつて來るのなら祝着の至りだが、近くの京都や神戸へ來ても、容易に大阪へ顔を見せない。――とにかく一度は大阪へも來るものだ。

今度の出し物は「大藏卿」や「逆櫓」などださうな大事をとつていづれも子供芝居時代からの極附の献立とある。いつ見てもこれなら惡からう筈がない。然しいくら旅だからと言つて、もう少し冒險味のある芝居もあつて欲しい。これがわれ〳〵には物足りないのだ。先般の左團次にもこの憾があつた。然しこれは吉右衛門のあづかり知らない事で松竹當事者の方へいふ臺詞かも知れない。

「一條大藏卿」はわたしもいろ〳〵の人のを見た。大阪では勿論成駒屋の逸品があり、わたしが最初この芝居を見たのも、今から三十年も前に鴈治郎が中座で演じたのだつたしかもわたしが最初鴈治郎を見たのはこの大藏卿だつたかともおもはれる。或は「新薄雪物語」だつたかも知れないが、この點少々記憶が怪しいのでいづれとも言ひ兼ねるが爾來、吉右衛門のも二三度見たし、中車、勘彌のも見てゐる。成駒屋のよさはあの堂々と立派な風格にある。吉右衛門のよさは巧緻微妙な表現にある。殊にわたしは曲舞になつてからがいゝやうに思ふ。いつぞや曲舞を食つた大藏卿を見たがこの芝居に曲舞がないのは「勸進帳」に延年の舞がないのと同じで味もソッケもないことになる。もう一つこの芝居で面白いのはあの廣盛といふ男が、「死んでも褒美の金がほしい。」といふ臺詞だ。

◇

中座では珍らしく「宅兵衛上使」が出るさうだ。延若の出し物だらうが、わたしは後にも先にもかつて吉右衛門が市村座でやつたのを一度見た切りだ。一寸面白い芝居で延若のはさぞよからうと期待してゐる。

由良之助の閑居で侘しい生活を送つてゐる顔世御前甲斐なき命ではあるが、師直が存命してゐるのが口惜しくてたまらなかつた。そうして大星を初め義士の面々の努力を思ふとき、仇討つ日まで、師直の無事なることを祈つてゐる。

こうした折、鎌倉の師直上使として飾間宅兵衛——實は寺岡平右衛門——が訪れる、上使の仔細は「さて承はれば大星殿には主人師直に奉公がいたしたいとやら、まだ其上に心をかけし、顔世御前も後家の身の上、主人になびくと云はるゝよし、京存番の藥師寺殿より師直公へ火急の知らせ、如何にしても誠しからず、とくと實否を糺せよとてわざ〳〵參りし飾間宅兵衛御返答承はりたい——」

顔世御前は殿さま一とまわりの佛事終るまで猶豫を乞ふが、では、やはり仇討つ心かと詰問する。

機轉を利かしてお石は黄金をお茶代りに響應する。それに心が動いたのか、上使は入相迄に鎌倉へ下るか否か、若し、嫌ぢやと言へば氣の毒ながら、首討つて歸ると、一先づ、奥の間で休息する。

由良之助別邸奥庭の場

本舞臺平舞臺、上手に二間の茶室、つくばひ石燈籠よろしく、正面紅葉したる庭の書割、いつもの所片開き竹の枝折戸、萩の花盛りにて澤山なる造花、楓の立木よろしく總て大星別莊奥庭の體。

〳〵秋たけて錦織なす庭の面散るさへ惜き
濃き紅葉、草葉にすだく蟲の音に、あたり伺ふ飾間宅兵衛、ぬつと出でたる切戸口。

蟲の音して上手より宅兵衛出で來ると下手より平内出で來り。

平内　宅兵衛どの。

宅兵衛　コリヤ。シテ由良之助めが樣子御見屆けなされしか。

平内　如何にも拙者犬となつて都へ入り込み事の實否を伺ひ見るに、なか〳〵敵討つなどゝさやうな樣子は見得ませぬ。

宅兵衛　成程身共もさやう存ずれば此上は要心の門をぐわら〳〵と開くとも良いと申すもの見聞いたした一部始終を伴内どのゝ旅宿まで通達いたす其間今少し貴殿には。

平内　其御沙汰を伺ふ迄身共はしばらく。
宅兵衛　人目にかゝらば勞してせんなし。
平内　しからば忍んで。
宅兵衛　早く〳〵。
〻眞垣の外へ忍び入る。
宅兵衛　此上は鷺坂氏の旅宿まで何かの樣子をさうだ〳〵。
宅兵衛茶室へ上り、矢立を出し懷紙へ認める。
〻風蕭る梅が匂ひのそれならで、松の綠の細肩におかるが心解けやらぬ、辛苦の綱のむすぼれし、文箱たづさへ歩み來る。
此上るりの内おかる手に文箱を持ち邸の腰元形のりにて出で來り、下女おりん邸の下女の形りにて遲れし體にて出で來り花道にて。
おりん　ヲヽイ〳〵、これおかるさん、お前さんもマアめつさうな早い足でござんすなア、何んぼう祇園に居なさつたとて、外ト珍らしいおやまさんぢやと云ふてめつたむせうにツイ〳〵と走りどくらするやうにお供に參つた私がめいわく、ことにお晝のたべたてなりお腹が痛ふて息が切れてなるものぢやない、ヲヽせつなやのう。
〻腹をかゝへて吐息つく、おかるは笑顏つくろうて。
かる　妾が身は知つての通り由良之助さんに受け出され、苦界はなれて山科から此眞葛ケ原の御別莊へわけは知らねどお使の道ぐさに此やうに秋知り顏の萩すゞき、やさしい蟲の音に聞きとれて走るとものふ走つたが別莊はまだかいのう、ヲヽしんど。
〻おゝしんどやとなまめかすりんは傍からもつけがほ。
りん　何の蟲の音がしほらしかろう、その内にもすぐ蟲と云ふ奴はりん〳〵と人の名を呼びすてにしくさつてさうしてマア此近所に何んぼうもある萩すゞき、其の花よりは燒き團子かお芋が大好きそれはそうとアレそこに見へるが旦那樣の御別莊案内してあげやうわい。
かる　イエ〳〵それには及びませぬ、何か知らぬが此文箱をそつと屆けてくれいと由良之助樣のお頼みゆゑ、行く事は行くけれど、道が知れぬと云ふたれば門口までりんを連れて行けと云はしやんすゆゑ、それでこゝまでつれだつて來たが、モウあそこなら大事ござんせぬ、お前は爰からモウ歸つて下さんせい、太儀でござんしたなア。
りん　そんなら爰からいにますのかへ。
おかるの姿を見て。
ア、美しい者ぢやなア、こちの旦那樣が惚れ込んで受出しなされたも無理ではない、ほんにまア女子の妾でさへ見とれるもの、殿御が見たらぞく〳〵と。おかるさん、ごゆるりと
〻片まへ下り水ばな流しおいどよじらかして走り行く。
かる　ほんに氣なくなお方ではあるわいなア、向ふに見えるが御別莊の枝折門、ドレ案内して見ませうか。
〻しづ〳〵と枝折の外へたゝづみて。
申しチトものがお尋ねしとうござりまする、由良之助さまの御別莊はこゝでござりますかへ。
宅兵衛　エヽ手がふさいでゐる通れ〳〵。
かる　イエ〳〵わたしは左樣な者ではござりませぬ、眞葛ケ原の大星樣の御別莊を尋ねるものでござりまする。
宅兵衛　エヽやかましい通れと申すに。
かる　そんならゆるして下さんせ。
これにて内へ入りて見廻し。
宅兵衛　エヽ通れと云ふとこんな所へ通りやがる、エヽあちらへ行け、エヽそこ所ぢやねへ
これにて宅兵衛手紙をかき乍ら。
アヽこゝな内が由良之助樣の御内かいな。
宅兵衛　エヽ通れと云ふとこんな所へ通りやがる、エヽあちらへ行け、エヽそこ所ぢやねへ

わ。

一寸思案して。

コウツト伴内殿の旅宿はたしか。

かる　エ、そんなら爰ではないさうな、モシどうぞ教へて下されいナア。

云ひ〳〵あちらこちらへ行き。

お前は爰の内の方ではござんせぬかいなア。

宅兵衛　おいらは内の者ではねへ、臺所へ行つて聞くがよいわへ。

此内おかるは宅兵衛をつく〴〵見て。

かる　お前はどふやら見たやうな。

互ひに顔を見合す宅兵衛驚いて。

宅兵衛　やアわれは妹ぢやねへか。

かる　ヲ、矢張り兄さんでござんしたか。

宅兵衛　妹か。

かる　兄さん平右衛門さんか。

宅兵衛　こりやうかつに其名は。

かる　兄さんお前は立派にならしやんしたなア

宅兵衛　其立派なのが心苦しい。

かる　エ。

宅兵衛　母者人に樣子は聞いた、夫トの爲めに祇園町へ勤め奉行に賞られたとの事を聞いたが見ればそれに引かへその邸風のなりは。

かる　サア兄さん喜んで下さんせ、わたしや思ひがけのふ身受けしられたわいなア。

宅兵衛　エ、それは何より重疊〳〵マア〳〵何はともあれ爰へ來い〳〵。

シテ其身受けしられたは誰方のお世話で。

かる　サアお前も知つての大星由良之助樣のお世話で。

宅兵衛　ナニ御家老の大星樣、そんならお屋敷からのかねてのなじみか。

かる　イエ二三度酒のお相手になつたばかり。

宅兵衛　ムゝそんならそちを勘平の女房と御存じあつての事か。

かる　イエ知らずじやぞへ、親夫トの恥になる事、なんのあかしてよいものかいなア。

宅兵衛　ムゝスリヤ勘平の女房とも御存じなく眞實本心放埒者、それぢやアいよ〳〵噂に違はず敵討つ所存はなく見さげはてたる大腰ぬけだなア。

かる　イエそりや違ふたわいなア、高ふは云はれぬ。

宅兵衛　ナニ違ふたとは。

かる　モシ。

宅兵衛　ムゝ。

〳〵かふ〳〵。と騙げば。

宅兵衛　スリヤ一力の二階にて。

かる　風に吹かれてゐるとも知らず、浮きと仇名の由良さんが仔細ありげなこの體は、故殿樣の敵討ち。

宅兵衛　スリヤその文を殘らずよんだか。

かる　殘らず讀んだ其後で互ひに見合す顔と顔。

宅兵衛　ナニ殘らず讀んだその後で互ひに見合す顔と顔、じやら〳〵じやらつき出して身うけの相談。なんだかさつぱり分からねへ。

かる　ヲ、さうぢや忘れてゐた、私しや此文箱を早う届けて來ねばならぬわいなア。

宅兵衛　それは何處へ持つて行くのぢや。

かる　大星樣より顔世樣へ。

宅兵衛　ナニ顔世樣へ。その文箱を一寸よこせ

かる　これは御家老さまが誰にも見せるなとのお言ひつけ。

宅兵衛　エ、よこせと云ふに。

無理に受取り開封する、おかる驚いて。

かる　めつさうな、そんな事をしてよいものかいなア。

宅兵衛　エ、、うつちやつて置けと云ふに。

おかるうろ〳〵心配する。

此内宅兵衛狀を讀み下し、おかるこれを見て。

かる　コレ兄さんお前は何をしてゐやしやんす

ぞいなア。

これにて宅兵衛思ひ付いて。

宅兵衛　コリヤ　妹、われが命を貰ふた。

おかるに切りつけるおかる狀を投げつけて下手の枝折の外へ出る。

かる　コレ兄さん、マア〳〵待つて下さんせ、妾には勘平殿と云ふ夫トもあり、二親もある身體、お前のまゝにもなりますまい、と云ふが悪けりやあやまります、又私にも悪い事があるならあやまります、どうぞゆるして下さんせ、手を合して拜むわいなア。

〳〵手を合すれば宅兵衛は。

宅兵衛　可愛や　妹　わりや何んにも知らねへな成程おれが悪かつた譯も云はづに切りかけたは、此兄が悪かつた、兄が本心いふて聞かす程に、爰へ來い〳〵。

かる　厭じやわいなア、お前其樣なものを持つてゐやしやんして傍によんで又切るつもりでどざんせう。

宅兵衛　ウムこれか。

大小を枝折門の所へやり。

サアこうしてそつちへやるから爰へ來い。

かる　そんなら行くぞへ。

枝折門の中へは入りかける。

宅兵衛　エヽ早く來ねへか。

かる　アイ行くけれどお前其樣に恐い顏して大きな目でにらんでゐては行けぬわいなア。

宅兵衛　兄さんの大きな目は生れつきじや仕方がねへ。

かる　そつちを向いてゐて下さんせ。

宅兵衛　いろ〳〵の事をぬかす奴ぢや、そんならこちらをむいたぞ、早く來い。

おかるは大小を袂にて持ちそろ〳〵と宅兵衛の後へ來り寄り添ふ。

かる　兄さん來たが何じやいなア。

宅兵衛おかるを抱き。

宅兵衛　今此兄がいふ事を吃驚せずとよく聞けよ。われが受出されて國へ歸り逢ふと思ふ親爺さまはなア。

かる　とゝさんがどふさしやんしたぞいなア。

宅兵衛　去年六月二十九日の夜人手にかゝつておはてなされたわい。

かる　エヽヽヽ。

びつくりするを押へて。

宅兵衛　コリヤ〳〵びつくりするな、まだあとにどゑらいのがあるぞ。

かる　ゑらい事とは何じやぞいなア。

宅兵衛　われが受出されて添ふと思ふ勘平はなア。

かる　勘平さんがどうさしやんしたへ、早ふ聞かして下さんせいなア。

宅兵衛　エヽせくな〳〵、今云ふて聞かするわへ。

かる　せきはせねど何じやぞいなア。

宅兵衛　たとひどんな事があらうとも必ずびつくりするなよ。

かる　妾も鹽谷さまへ御奉公した身で侍の女房、なんでびつくりするものかいなア。

宅兵衛つくばいよりひしやく持つて來る。

宅兵衛　必ずびつくりするな、その勘平はなア

かる　その勘平さんわへ。

宅兵衛　その勘平はなア腹を切つて死んだわやい。

かる　エヽヽヽ。

〳〵やア〳〵〳〵それはマアほんとかいなア。

宅兵衛　話せば長いこと作ら、おいたわしや母者人には云ひ出しては泣き、思ひ出しては泣き、娘おかるに聞かしたら、泣き死にをするであらう、必ず云ふてくれるなとの賴み、いぶまいとは思へども、とてものがれぬそちが命、其譯と云ふは忠義一圖にこりかたまつた由良之助樣勘平が女房と知らねば請出す義理もなし、元より女には猶ふけず見られた狀

が一大事、請出してさし殺すと顔世樣への知らせの御書大事を知つた女ゆゑ、妹とて免されず、それを功に連判の數に入つておともにたゝん。

〃輕き身分の悲しさは、人に勝れた心底を見せねば數に入れられず。

勘平殿は此世にて連判に加はれど未來の主人へ云ひわけに、我を手にかけ其首を顔世御前と僞はつて鎌倉へ持歸り油斷をさせるも勘平が犬死にならぬ忠義の大功、聞きわけて死んでくれ、命をくれ、こりや妹。

〃ことをわけたる兄が詞、おかるは始終せき上げ〳〵。

〃たよりのないは身の代を役に立ての旅立か、文のたよりもありそなものと恨んで計り居りました。

かる　もつたいないがとゝ樣は非業な死でもお年の上、勘平さんは元の身に。

〃なるやならずに死ぬるとは。

宅兵衛　あいたかつたであらうなア。

かる　アイ。

〃あいたかつたであらふのに、なぜ會はしては下さんせぬぞいなア。

親や夫トの精進さへ、知らぬわたしの身の因果お役にたてゝ下さんせ。

宅兵衛　ウムよい覺悟だ。

〃お手にかゝればあの世では勘平さんや父さんに、逢ふが此の身の本望ぢや。

かる　早うころして下さんせ。

宅兵衛　おゝ。

〃思ひ切つても切りかぬる、さすが同腹同性の泪〳〵は東山、あぶれ流るゝ計りなり。

〃折から告げる入相の、かねて覺悟の平右衛門、思ひきつたる輪廻のきづな。

宅兵衛はおかるの首を落す。

〃樣子聞いたる平内が小柴かげよりあらはれ出で。

平内下手より出で。

聞いた〳〵御間宅兵衛とは眞赤ないつはり、又僞首をもつてことを計らんとは、此通り注進するまつておれ。

〃こは一大事と平右衛門たゞ一刀に切りすてたり。

〃平内はいぜんの狀をとりかゝるを宅兵衛一刀をあびせる。

〃直に袂を押しきつてつゝむにあまる憂き思ひ、重き御恩に報ひんと首たづさへて立出る。

宅兵衛はおかるの襦袢の袂をきりおかるの首をそれへ包む。

〃折から一間に聲あつて。

忠臣寺岡平右衛門。

顔世　なんと。

宅兵衛　心底見えた、マア〳〵まちや。

顔世　〃と聲をかけ一間のうちより御臺所お石もともに立出で。

宅兵衛　師直の使者宅兵衛を平右衛門とは何を證據に。

顔世　知らいで何とせうぞいのう。由良之助と心を合せ此所に引籠り忠義の武士を集むる折柄、鎌倉よりの不時の御上使、合點行かずと思ふに違はず、最前殿の御最期を物がたりし詞の内に表に怒りの色を顯はし心に愁ひをふくみしは全く敵の使に非ず、味方のものと見抜きしぞや。

お石　ことに夫トがみさををかんじ、それとは明かさず受出せし腰元おかると妹と互ひに名のりも委しい樣子。

顔世　これなる一間に伺ふてさてこそ寺岡平右衛門と知つたるゆゑに呼びかけしぞ。

〃聞くより寺岡恐れ入り。

宅兵衛　ハ、アさすがは御臺の御眼力、かくお目立まする上からはいかにも足輕平右衛門めでござりまする、先刻よりの無禮のだん眞平

どめん下さりませ。

〽はるか下つて手をつかへ。

御殿樣御切腹の樣子、北國にて承はり、宙を飛んで歸る途中御屋敷は召上げられ、一家中もちり〳〵と聞いて驚き南無三寶。

〽己れやれ師直め、主人のうつぷんお家の仇、折を見合せて一ト打ちと。

非人となつてねらへど、敵は用心嚴しくして近よることもならざれば。

〽時節を待ちしかひあつて、新に建てし邸の結構、此案内だに知るならばと傳手を求めてやう〳〵と高野が屋敷へ住み込みしが。

新參ゆゑに心ゆるさず、しかるに此度上使の役目顏世御前を取りもつか。

〽違背いたさば首にして持ち歸れとある無法の使。

此身の幸ひ當着なし、大星樣のていたらく、若し亂行とわきまらば。

〽討つてすてんと思ひしに。

かるが持參の御文箱を開封なして勿體なやと初めて知つた我淺はか。此おわびには妹を首にいたして師直に顏世御前を討取つたと油斷をさせて要心の門を開かす我心底かやう申せば恐れあれど、御大身でも足輕でも、つなぎましたる命は一つ、御恩に高下はござりませぬ。

〽忠義にこつたる寺岡が誠を爰に顯はせり。

顏世もお石も此内感心のこなしあつて。

石　僅かに輕き足輕でも忠義は重き誠の武士。

顏世　今改めて自らが、侍分にとりたてゝ、敵討の供を免し遣はす。

宅兵衞　エヽスリヤ私を侍分におとりたて下さりまする其上に、敵討の御供にお加へなされて下さりまするか。

おかるの首を見て。

コリヤ妹喜べ、兄は侍分になりお供が叶ふた〳〵。チエヽ、忝なふござりまする。

〽天へも昇る心地して勇み立つたる門出の喜び。

顏世一通の書面を出して。

顏世　委細はこれに認めあれば、由良之助に對面して一味徒黨の血判しや。

宅兵衞　コハ有りがたきその仰せ、それにつけても平右衞門が寸志の御みやげ。

〽懷中よりとり出したる敵の繪圖面さし上ぐれば、御臺はそのまゝをしひらき御臺はお石と共にこれを見て。

顏世　こりや師直が新に建てし屋敷の繪圖面、如何して手に入りしぞ。

〽仰せに平右衞門いさみたち。

宅兵衞　心を碎きしかひあつて、寫し取つたるその繪圖面、まだ此上に拙者が案内。かねて一味のかた〳〵へ大星さまの下知あらば。

〽我眞先に進み出で、かねて覺へし館の案内、廣間につゞく侍部屋、敵にもそれと出で合はゞ。

此時いぜんの手負ひの平内起き上り。

平内　寺岡覺悟。

〽あたるを得もの入身になり、うけつ拂ひつ千變萬化、向ふやつばら切りまくり。

平内を相手によろしくある。

お知らせ申上げん、御心安かれ御臺さま。

〽詞はさきに違ひなく、あとへ本意の早打は、足輕寺岡平右衞門と末世の記錄に殘りけり。

顏世　いさましい其門出、目出たう本望。

石　片時も早う。

宅兵衞　おさらば。

〽花の都をあとになし、鎌倉さして急ぎ行く。

——幕——

過去數十年間大家族主義！溫情主義！を唯一のモットーとして、その堅實なる營業政策に着々として奏効し、今や勿驚！資本金數千萬圓を擁して斷然！業界の一角に覇を唱へつゝある×紡績株式會社も、時ならぬ財界不況の大渦に巻込まれ、遂に經濟的難關に直面しなければならなかつた。

資本家の苦しみとでも云はうか。三百萬圓の融通資金に關する協議は、期せずして、○○ビルディングの社長室に會する最高幹部連の間に重苦しい雰圍氣を醸し出した。

——そこで、三百萬圓ですが、一つ社債を募つて見やうと思ふのですが。

——借金ですか？

——さうです。理由はいくらでもありますそれ以外仕方がないと私は考へますが。

——さあ、そりや問題ですなあ、諸君は如何です！

——さうだね……我々が安全で、同時に會社も安全な方法が一番いゝがね。

——無論！我々自分の事だけを考へちやいかん。今回のやうな場合は、我々工場……勞働者……國家……それ等全體に係はる事ですからなあ、——とにかく三百萬圓あれば我々の事業は、この困難な場合を切拔けて、我々にも、工場にも、國家にも光明を與へるのですからなあ……

そこで、この重苦しい長時間の最高幹部會も漸く社長の提案に對する同意の色が見へてくる

——私達は、社長の確信を信頼したいと思ふのですが……

先づ、重役がイの一番に社長案讃成の意を表明する。

——では、社債の件は可決して宜いですな。他の重役のAもBも共に重たく肯づくより他はない。

夜——

ガランとした日本間の中央に、すゝけたちつぽけな十燭光の電燈が、たつた一つぶら下つてゐる。

不平と、反感と、呪詛と、そして半去勢された性感を胚んだ世にも不可思議な紡績女工の寄宿舍。

「女工〳〵と見下げてくれな、國へ歸れば箱入娘……」荒みきつただみ聲で、自棄的に怒鳴るやうに唄ふあの歌の中に彼女達のせめてもの自慰がある。

たつた一人の肉身の兄がビルディング建築の鐵骨から落ちて瀕死の狀態にあつても、その看護に駈けつけることすら出來ない彼女等。不幸

な家庭の犠牲となり、一度は健氣な決心を以て青春の希望と空想に燃へて紡績女工を志した彼女等の大部分が、さて一歩工場内の人となるや、もう其處には忽ち對束縛！脱對外出禁止！の殺然たる掟がある。僅の前借の前に所詮は生ける人形にしか過ぎない彼女達である。加之あの女工勧誘員の出目は、ボロ〳〵のセンベイ蒲團と、南京蟲と、クソ男工とによつて、唖然！彼女等に幻滅の悲哀を齎しめづには居られない。

「會社づとめは監獄づとめ、金の鎖がないばかり……」日本幾萬の紡績女工よ――そして彼女等の青春は空しく文明資本主義の鐵槌下に粉微塵に砕かれてゆくのである。

機械は運轉してゐる否資本が運轉してゐるのだ！

社長の令嬢ミネ子とその親しき友ユリ子とは工場長と技師に案内されて、遂に工場内の視察を敢行してゐた。そして、空氣一立方呎に就て三百萬乃至四百萬の綿センイの微塵の中にアラスカの吹雪を濛々たる織布部の噴霧機の中に霧のロンドンを想像しながら、それでも不合格品の赤旗や、非常口の錠前が下ろしてあることに就て、案内役の工場長や技師の内心を冷り！とさすやうな注意を怠らず、その危険なることその非衛生的なることに就て、大いに女工達の生活に同情を寄せたのであつた。

ミネ子は、工場を視察し終ると、そのまゝ寄宿舎内にしつらへられた演壇の上に立つた。

――私、今日始めて此方の工場を見せて頂いて、本當に嬉しうございました。私本當に私の知らなかつた人生の半面にふれた樣な氣が致しました。私は皆さんを本當に偉いと思ひます。あんな危い機械の間で平氣で働いてゐるのですもの――、あんな吹雪のやうな埃の、あんなロンドンのやうな霧の中で、勇ましく働いてゐるのですもの、私、本當に偉いと思ります。私はだから、これからも色々と皆さんの事を知り、皆さんの力にもなり皆さんにも力になつて頂き度いと思ひます。あたくしは家へ歸つたらお父樣に皆さんの眞面目な事をお話したいと思ひます。それかう皆さんの御意見も聞いて改良すべき處は改良するやうにお話したいと思ひます。

力強く語を結んで降壇するミネ子の、心持上氣した面に、密集した女工達は感激の拍手を浴びせかけ、遂に女工セツを壇上に起たしめた。

食事の改善！待遇の改善！ETC・ETC。セツの訴へるその勇敢な行動は、ミネ子の心を捉へずにはおかなかつた。其處で、即ち彼女は社長邸の小間使ひに抜擢される――。

女工から、社長邸の小間使ひへ、それはセツにとつてまるで、地獄から天國へ上つた程の急激な遷境の變化であつた。だが、工場に働く幾千の仲間を思ふ時、社長邸に於ける安逸な生活は到底許されないことであつた。でセツは少しでも働くために此度は、ミネ子の推薦で社長祕書にまで抜擢されるのであつた。

三百萬圓の融通資金は調達され、會社は無事に難關を突破して小康を得た。

だが、一方工場内の曾てセツの提案した食事改善は、依然として實行されず。その改善を迫る女工達の挑戰の火蓋は遂に切られた。

社長祕書のセツを介して社長に全女工の意志を傳へんとする二人の代表者は、一度はセツを裏切者として恨み罵つたが、青白い街燈の夜途の歸途を擁した、切崩しのいぬの口から、却てセツの誠意を知ることが出來て感泣する。

俄然！社長の心は動いた。セツの苦心が報ひられる日が來た。

食事改善！待遇改善！清濁合せ飲む社長の果断は、工場内に時ならぬ歓聲を上げさせ、社長讃美の渦を、凱歌を巻起さしめた。

萬歳！萬歳！

おゝ何と感激的な、勞資協調の一情景であることよ。

中座五月の舞臺から

心中かつら川

——あふむ石——

夢の桂川

〽久方のかつらの里の小夜衣我つまならぬ因縁も、まはり地藏のまつわる袖。

幸次　（短刀をさしつけて）オッ、かつら川には珍らしい美しいねへさん、そんなにビク〳〵しなはんな、マアいゝから俺にまかして置くがいゝや（帶をとりに行く）

お半　アレー。

幸次　オッ、野暮に大きな聲を出しなさんな、まだ年端もゆかねえやうだが、ナアに心ベイするには當らねえ、まちねえ、逃がす事ぢやアねえ。

お半　アレー。

〽ほぐれて帶のむすびめも、駕に連理のしがらみに。

駕にのつた長右衛門出る、

幸次　ヤッ。

駕屋に短刀をつきつける、駕屋もこれにびつくりして。

駕屋　人殺し。

〽チリ〳〵パット立つ鳥の

長右衛門　（垂れを上げて）てもぶつさうな世の中ぢやなア、もしお女中、どうさつしやつた〳〵。

お半　有難うござります、何處も怪我はいたしませぬ。

お半　ア、おぢさんか。

長右　ヤッ、お半ぢやないか。

〽わけも涙にぬるゝ露。

お半　マア今時分に何處へ行くのぢや。

お半　アイ。

おぢさんに逢ひたさに大阪と聞いた故、たづねて行かふと、ひとりうちを拔け出して、たづね〳〵てやう〳〵と。

長右　エッそれでひとりで來たといふのか。

お半　アイ。

長右　マア何といふ大それた事、アヽわかつた　それでは又いつものやうに母御さんがそなたを邪見にしたのであらうな。

お半　ハイ、何ぢやしらぬが私をせめせつかん、早う帶屋へいて長右衛門さんに詫言して貰ふがよいと、そればかりおつしやつてな。

長右　ハハヽヽ、年に似氣ないお石どの、そなたさへいじめれば、ツイわしが挨拶に來ると思ふて、アタ阿呆らしい、れつきとした女房のある長右衛門、誰がそなたの繼母づれに。

お半　エッ。

長右　イヤ、これはいひすぎた堪忍しや、それで又何でこんな處へ來たのぢや。

お半　ハイ、けふは幾度もおぢさんの處へいたけれどな、大坂へとやらで逢ふ事ならず、詫言をして下さんす人ものう。

〽とほうに暮の柳の馬場、やう〳〵ぬけ

て行衛さへ、白齒娘のあと先きも。

ツイ何氣のう來ましたわいなア。

長右　マア大膽なそんなことをするによつて、今のやうにこわいおぢさんが脅すのぢや、サアちやつとこの駕で歸つたがよい、と云ふた處で駕屋め應病風がふいたか、一體どこへ行たのであろう。

お半　イエ〳〵私はもう歸りたうはござりませぬ、どうぞ此儘何處へでもつれて行つて下さりませ。

長右　エッ。

お半　モシ、おぢさん。

〳〵たとへ野の末山の奥、何と噂が立たふとまゝよ、鬼すむ里はわしやいやと、

とりつきなげくおぼこさに、こなたはとんともてあまし、

この内長右衛門旅そろばんを出して見てかんごうをしてゐたが。

長右　コレ何をいふのぢや、よう聞きや、世の中には隨分よい年をして、光つたあたまをしながら孫のやうなものを相手に兎や角いふ者もたんと數あれど、長右衛門にはれつきとした女房の有るからだ、ましてソレそなたは十と四ツ、わしは四十と二、ハヽヽヽ、第一そろばんのけたが違ふ、ハヽヽヽなんぞそなたとわしが前々からわけでもあるやうに内外の者が噂して駈落ぢやなど云はれては第一わしが見つともない、それに今日は大坂へかけを集めに行つて爰に金を二百四十兩ばかりもつてゐる、此儘よそへでも行つては長右衛門はとしに似氣のう若い娘を連れ大坂のかけ金をもつて高飛したアリヤ色惡黨ぢや、くわせ者ぢやと戸が立てられぬ世間の口、ナアそこを聞きわけてサア早う歸りや。

お半　ハイ。

長右　聞きわけて歸つてくれ、お石どのにはわしがよいやうに詫言してやらう程に、聞きわけて歸るのぢや。

お半　ハイ。

長右　よいか。

お半　ハイ。

長右　聞きわけてくれるか。

お半　ハイ。

長右　かしこい、ヤレ、忝けない、それでわしもヤツと安心した。

お半　それでも。

長右　どうした、エ、お半、どうしやつた。

お半　おぢさんに逢はう〳〵といふ一心で、こゝまで歩行いて來ましたが、京へ歸ると聞いて急に一足もあるけぬやうになつたわいなア

長右　よう無理をいふなア、それは困つた事ぢや、よし〳〵駕屋〳〵と云つた處が駕ばつかりではどうする事もならず、ふところの金を落しては大變ぢや、サアお半わしが負ふてやらう。

お半　エ、。

長右　遠慮せずと肩をしつかりとつかまへたがよい。

お半　アイ〳〵。

〳〵かゝる重荷はいにしえの、芥の川のそれならで、赤繩も伊勢の物がたり。

長右衛門、肩にお半を背負ふ、この時小屋のうちより短刀にて針の宗兵衛、長右衛門をつく。

長右　ウン(倒れる)

お半　もしおぢさん、おぢさん〳〵コリヤおぢさんが、あゝゝ(よりそふ)

〳〵惡因緣とつき出すかね。

針の宗兵衛出て頬冠りをとる。

お半　アレー。

逃かける、帶際をとつて引戻し、短刀をふりあげる。

その手を長右衛門うしろから摑む

宗兵衛　堪辨してくれ、實を云へば大それた、人の命を二つまでこの手にかける樣な殺生を

する量見はなかつたが、たつた一人の可愛い娘を、明日は島原へ賣らなければならない、切迫詰まつたこの宗兵衛、途方にくれてゐる處へ、小耳にはさんだこの大金、悪い事とは知りながらそれさへあればと、つい手荒な眞似をいたしました、通り合したが、二人の因果、――おゝそうだ、その代りには二人の身體、二つならべて水葬禮、世間の人は心中と浮名を立てゝくれようから、迷はず成佛してくれろ。

〽近きかつらの淨正寺、南無阿彌陀佛、
阿彌陀佛と唱ふ唱名一つがね。
二人のからだをくゝり水へはめる
〽南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛〳〵。

柳へよつてゾッとしてあッ（とびのいて）何だ、誰だ、何をするのだ、（拂ひのける）

針の宗兵衛の住居

お辰は宗兵衛の後添へ、お雪といふのは宗兵衛が先妻の遺子、宗兵衛にとつては眼にいれても痛くないと、それだけお辰の繼子窘めもきついこの仲裁をするのは近所の住職十念だが彼はこれだけでもなか〳〵多忙だ。それにこの頃は宗兵衛が夜ごとに魔されてならない。

お辰がお雪に妥協する時はかならず、お雪を島原に身賣さす條件を宗兵衛に持ち出すのが常習である。その度に宗兵衛は何處で整へて來たか素性の知れぬ大金をお辰に與へてその場をすどすのである。

お雪の島原へ身賣り――。

これで宗兵衛とお辰がみにくい喧嘩口論をつばじめたお辰にとつての强み、宗兵衛には弱みを摑まれてゐる幸次。彼は桂川での一件を一部殘らず承知してゐる。

不思議な因緣とでも云ふべき廻り合せ。それはお雪に思ひをかけてゐる才次郎に就てゞあるお雪と才次郎を添はしてやりたいと願ふ才次郎の姉きぬこそは、いつぞや桂川で心中したと傳へられた長右衛門の妻だと宗兵衛は聞いて吃驚……。

桂川の堤

唄〽しのぶ夜に月さへわたり人かげをも、更けて一しほあざやかに。

才次郎、ふところ手、ブラ〳〵出る。

お雪あとより出てとんとより添ひ

お雪　才さん、どこまで行くのでござんすえ。

才次郎　何處へ行かうぞ、もう二人の行先は極まつてゐる。

お雪　そふにそはれぬ二人の因果。

才次郎　悲しい羽目になつたなあ。

〽晴れて逢ふ身の八景はうゐ三井寺のかねのこえ。

才次郎　どうで添はれぬ二人ならと、覺悟はとうから定めてゐた。

お雪　人の噂も取沙汰も、二人に取つては枕念佛。

才次郎　さりとはむごい宗兵衛どの。

お雪　もし。

もう〳〵何も云ふて下さりまするな、どうでまゝしい母樣に、責めころされる私のからだ二人手に手を取りあふて、蓮のうてなへのれる身は、何より嬉しう思ひます。

才次郎　たとへ地獄へ落ちやうとも、この手はめつたにはなすまい。

お雪　嬉しう御座んす。

〽命も瀨田の長橋に、手に手を鳥の東路に。

才次郎（双方顏見合せ）恐ろしいのは二人の緣義理の兄長右衛門殿も亦、信濃屋のまゝしい中、そなたも同じ繼母の流れも同じ（思ひ入れ）

お雪　めぐりめぐつて。

二人　かつら川。

才次郎　〳〵何から崎の一つ松。（見入る）誰やら人が。

お雪　もし。

才次郎　見とがめられては恥の恥、おゆき。

お雪　ハイ。

〳〵又袖ぬらす夜の雨、いつか粟津の青あらし。

二人上手へ去る。水音。

花道より宗兵衛は幸次をつれて出る。

幸次　オイ宗兵衛、どこまでおれをつれだす氣だ、本當に金はどめこんであるのか。

宗兵衛　ウン。

幸次　おゝ、これや、かつら川の堤だな。

宗兵衛　えッ桂川。

幸次　おい宗兵衛、おなじみ深い桂川だね。

オッ、宗兵衛この邊か。

宗兵衛　ソ、ソ、そつちの方だ。

幸次　こつちか。

宗兵衛　まちねえ、こゝいらだつたかな。

幸次　フ、ン、そろ〳〵とはじめやあがつたな

宗兵衛　何だと。

幸次　オイ宗兵衛、猫を冠つて一仕事、子に子を產ます鼠算、引ずり込んだ猫に小判。

宗兵衛　そのどら猫につきまとはれ、のつぴきならねえ今となつちや……。

幸次　えッ。

宗兵衛　惡事がばれりやこの身の破滅、娘の不憫。

幸次　宗兵衛、金は此處にやアねえのだらう。

宗兵衛　さうよ、お察しの通りだ。

幸次　うぬ。

引倒してふみつけ。

つり出しやアがつたな、何うするか見やアがれ。

短刀を出して切つて行く。

唄〳〵花のお半は十日のつぼみ。

宗兵衛切られる短刀を取つて下から突上げる。

〳〵柳の馬場の押小路……。

よろしくはづみで幸次を川へ落して柳へよる。お辰がかけつける。

お辰　あれ、――お前さん、宗兵衛さんぢやないか。

宗兵衛　（あえいでゐる）

お辰　どうしたんだね、こんな處でお前さん、大變だよ、大へんなことになつたよ。

宗兵衛　（心うつろでゐる）

お辰　私がお熊さんと話をつけて、うちへ歸ると、お前さんもお雪もゐないぢやないか、そしてこんなものがあつたんだよ、これ御覽なお雪は書置をかいて家出をしたんだよ。

宗兵衛　エッ。

お辰　馬鹿〳〵しいつたらありやしない、折角の玉を、それこそ玉なしにしたぢやないか、――（讀む）一筆書のこし參らせ候、所詮才樣と添はれぬ身は因果とあきらめ、覺悟いたし候、不孝の罪はくれ〳〵も……それこれを御覽よ、（書置を渡す）本統に不孝な娘だよ、さお前さん、かうしては居られないんだよ、二人で後を追つかけてつれ戻さなくちや、お熊さんへの話がふいになるぢやないか、お前さん、お前さん、えゝ、じれつたいお前さんが行つてくれなきや、妾一人で連れ戻して見せるから（去る）

才次郎とお雪の死骸が流れて來る

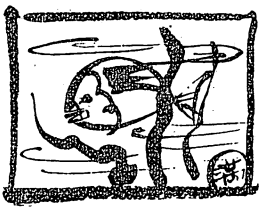
宗兵衛　あッ。

遠くで讀賣の聲。

宗兵衛　そうだ、心中だ、心中だ、おれが殺したんぢやねえぞ、心中だ、心中だ。

つゞいて聞える讀賣の聲に身をふるわせて柳の木にとりすがり、流れ行く死骸を見つめて、狂ほしく笑ふ。

――幕――



宅兵衛の歌舞伎味

高谷伸

忠臣藏四十七士には、それぐの境遇性格に面白さがある。中にも、特殊な劇的興味を惹くものは、足輕だつた寺岡平右衛門である。

小身者のかなしさが、やけに反抗的でなく、涙ぐましい努力によつて連判の中に加へられやうとする所に、深い同情が寄せられる。

それをうまく書いてゐるのは、流石に竹田出雲の忠臣藏、七段目の平右衛門である。また、觀方をかへて面白くしたのは、近松半二らの太平記忠臣講釋の八つ目、山科閑居に出る飾間宅兵衛實は寺岡平右衛門であり、この二つを折衷したものが、三升屋二三治の眞葛ケ原顏世御前閑居の場で、現今行はれる宅兵衛上使は多くこれである。

小身者のかなしさで知られてゐる平右衛門が、宅兵衛といふ變名で、堂々と帥直公の上使と威張つてくる所に、反對の面白味が多分にある。

忠臣講釋は明和三年十月竹本座で操りにかけられたもので、茶屋場では大盡をきめこむ由良之助が至つて吝かつたり、首桶から百兩とびだしたり、すべて逆手を狙つてゐる。宅兵衛は判官の一子爲若の首を所望にくるが、實は由良之助の本心を試すために、自分の子平吉が小太郎もどきに先きへ來てゐるのである。由良之助はその裏をかいて、首と見せて百兩入れて置く、一たん交渉決裂と見えるが、平右衛門と知つて由良之助の打つた小柄の傷で血判させることになるといふ筋である。

現今行はれる宅兵衛は、上使の入込みを忠臣講釋から取り、後半はすつくり七段目で、顏世御前の身代りに、そちが生命は兄が貰つたといふことになるので子役は使はない。

これは俗にいふ「裏表の忠臣藏」で、渥美氏の考證によると、天保三年三月河原崎座で、七代目團十郎に三代目菊五郎で忠臣

藏を出した時、在來のものでは面白くないと、各段に裏を附け七段目の裏に用ひたのがこの宅兵衛上使だといふことである。

從つて茶屋場では、由良之助がおかるにぢやらつきだして身請の相談を持ちだすと、すぐ話がまとまり、由良之助は仲居等に送られて歸る、あと眞葛ケ原につゞくといふ順である。

赤面の平右衛門、屋敷風のおかるで、七段目を見せるといふのが作者の趣向である。

昭和三年南座所演の延若の飾間宅兵衛の扮裝は、草色に黄で山形を取つた裃に、角に宅の字の紋を附け、着附も草色、襟は柑色で、刀は黑鞘銀鍔、水色の下緒といふ風であつた。おかるの藤紫をこれに配したことは、七段目の平右衛門の藍、おかるの赤の裏を行つた形である。顔世の水色とお石の黑もそれに對し、わるい配合ではない。この宅兵衛の演出には三段の變化があり、その間に一貫した強い線が通じてゐる。

三段の變化といふは、前段の惡、中段の慾、後段の義である。

これを詳しく言へば、惡とは師直の上使飾間宅兵衛としての入込みである。顔世御前が靨かねば首にして受取らうといふ口上を述べ〳〵さも憎體に言ひ放てば――のチョボで、膝の上に扇を立てその上に手を重ねて傲然とするあたりである。

中段は、茶などは要らぬと、茶をこぼすと、一分金が出るので驚いて白扇を開いてその上を覆ふ所から急に態度をかへ、「去年三月鎌倉に由良之助殿がござつたら、かゝる大事もござるまいに」など、いふあたり、師直方めかした慾の見せ場である。二重上手に入るに、紫帛紗をかけた進物を左手に捧げ、右手で扇をひらき、煽ぎながら、糸にのつて行くのも、古風な面白い型である。

後段、平右衛門として宅兵衛の假面をかなぐり棄てゝからは大體七段目だと思つて差支へない。淨瑠璃も詞章は殆んど七段目に據つてゐるし、節調はそのまゝと言つてよい程である。

「兄さん來たが何んぢやいな」と、裏向きに立つてゐる平右衛門に、背後から膝をついてからむおかる、「それはまあ本かいな」で、こんどは座つた平右衛門の肩に袖をのせて正面にきまるおかる、前後照應の面白さを見せる。〳〵小身物が、〳〵輕き身分のかなしさはと、平易になつてゐる位で〳〵事をわけたる兄が言葉からのサワリは、すつくり茶屋場である。

たゞ、平右衛門の斬りつけに、おかるが、のべ紙の代りに、手紙を投げるだけが變つてゐるが、これも、長くのびた手紙が振り上げた刀に絡むので、別趣の畫面になつてゐる。

平右衛門が上手寄りに、刀を突き左手の甲で泣きあげる形できまり、思ひきつて、おかるの首を打ち身替りとし〳〵すぐに袂を押しきつて、で、緋の襦袢の袖に首を包み、師直邸の繪圖面を置く物語になる。

幕切は、顔世が上にお石が中に立ち、平右衛門が下手に平伏する畫面で析が入り、そして、幕外の引込みになる。

青木新兵衞に就いて

長谷川　伸

新國劇で上演する「掃部と新兵衞」は私の命じた題名ではなく、劇團が改竄したもので「阿閉掃部と青木新兵衞」といふのが正しいのである。餘り長過ぎるといふので改題したのだらうが、山本有三氏の物に「掃部と七郎右衞門」といふ味の變つた戯曲があるので、留意を以つて長いのを承知で「阿閉掃部と青木新兵衞」と題した譯である。

◇

「阿閉掃部と青木新兵衞」の話は「駿臺雜話」「山鹿語類」その他にあつて稀有な話ではない、井伊掃部頭と馬場三郎兵衞が出る「大杯」あれは阿閉と青木の話から出てゐるので此方のは申さば「大杯」の素といつてもい、材料から出てゐるのである。

青木新兵衞は市井に傳はつてゐる有名さがないが、德川期には武士道の訓話にはよくつかはれたものらしい、隨つて有名だつたと思はれる節があるが、講談化、演劇化で後の雁が有名になり、先の雁は却つて一部の人にのみ記憶されるやうな事になつてしまつた。

◇

青木新兵衞の武人としての手腕はなか〳〵偉かつたらしい、慶長五年の伊達政宗對上杉景勝の松川の合戰で、拔群の働きをしてゐる事などが「東國太平記」だつたか「福富文書」だつたか、或はその兩方にだつたかにも記されてゐる、何も軍書が確實な記述だといふのではないが記述者の感知の範圍にあつた人物だつたとはどう割引しても考へられるから、同時に知名の浪人だつた事も推定が出來やうといふものである。

◇

私の作では「駿臺雜話」の通りでないのは勿論で假托の人物も出てゐるし、經過も違つてゐる、詰り私の創案が多分にはいつてゐるといふ譯である。一體この戯曲は歌舞伎劇系統の俳優

が演ずべき質のもので、阿閉と青木の賤ケ嶽合戰回想の掛合臺詞は、あきらかにそのやうに書いたものであるが、新國劇の諸君は大いに努力して東京で初演した時にも幸ひに好評であつたものである。

◇

青木が「負けた」と重ねていふ臺詞があるが、そこは作者が書く時には相當に考慮して書いたものであるが、實際はうまく行つてゐない、これは俳優に心的な表現の工夫をもつと要求すべきものか、それ共作者の不熟な點として甲を脱ぐべきものかハッキリした考へをまだ持たずにゐる。

新國劇と作家としての私との關係はさう古くない。澤田正二郎氏存世時代に私の作で上演されたものは二ッだ、「掏摸の家」「沓掛時次郎」上演するといふ話だけで實現をみなかつたのは「九郎の闘」、全部を擧げてこれだけの關係であるが、澤田氏歿後はいさゝかながら力を新國劇に寄與したつもりである、それは氏の最後の上演戯曲の中に「沓掛」があり、しかもこれは歌舞伎座の「忠臣藏」に對抗して急に「沓掛」を再演するに至つて倒れたといふ事情から、氏の遺業を支持する氣持になつたので佛徒のいふ因念を行ふたのである。だから「阿閉掃部と青木新兵衛」は伊井蓉峰氏が非常な熱心で上演の希望を雜誌「騒人」に發表された時以來持つてゐるのを知りつゝ初演を新國劇に許すやうな事にまでなつたのである。

◇

阿閉掃部の阿閉は私だけがあとぢと讀ませてゐるのかも知れない、正しくはあべかも知れないと思つてゐるのは、長門に阿閉島といふのがあり、伊賀の阿山郡の古名は阿閉だといふからである、しかし、私は歴史を書くのではなかつたのだから、たとへあべが正しくても響きが私の好みに近いあとぢを採つて今後も押通すつもりである。

新國劇も大難小難の荒波を越えて更生後一年餘になつたが、その間に中井哲氏がワキ役者からシテ役者に堂々と變化してきた事を最大として幾多の喜ぶべき變化好轉があつた、その一つに若い連中になか〳〵いゝのが人の目につき出してきた事がある、物をよく發見し、成長を助ける大阪の人がその點は必らず見逃さぬだらうと思つて、新國劇の大阪興行の結果を樂みの一つとしてゐる。

演劇雜誌
歌舞伎
毎月一日發行
一部 三十錢
◇本誌と姉妹雜誌 ◇各地書店に發賣
發行所 東京市京橋區木挽町三（歌舞伎座内）
歌舞伎出版部

眞紅の旗を揭げて

――新國劇過去一年と現在――

俵藤丈夫

悲しみの弔旗をかゝげて、座長沒後の新國劇がお目見得したのは、恰度去年の四月でした。其後も私達は、始終懷しい道頓堀を憧れてゐながら、つい機會がなくて今日に至りました。何かしら胸躍る感激を禁じ得ないのであります。

尤もそれからまだ一年です。が、この一年は私共にとつて、只一年ではありませんでした。五年、十年、それにも勝る試練と體驗の尊い一年でした。いや、恐らく世間の眼からも、この一年の新國劇の歩みは、相當濃い不安と、危惧と、同情と、また興味を以つて眺められたに相違ありません。實にそれほど危つかしい一年だつたのです。

だが、幸いに江湖の御後援と、一黨の擣みない精進で、勇ましく此の難關を突破しました今、お目見得に際して私共の揭ぐるものは、もう古い悲哀の弔旗でなく、實に更生の意氣に燃える座員の熱血で染め上げた眞紅の行進旗なのです。

×

さて、あれからの一年ですが――

顧みれば去年四月、狐影悄然、追悼の旗を卷いて大阪を去つた私共は、途中、名古屋、岐阜、靜岡、濱松、其他東海道の二三都市を巡業して東京に歸り、六月新橋演舞場に籠つて座長の追悼公演を營み、更に七月本郷座に八月帝國劇場に續演して惡戰苦闘を續けました。恰も濱口新内閣の緊縮政策、晴天續きの珍らしい酷暑、凡ゆる悲觀材料に、豫期した苦難は其頃から愈々深刻に一座の上に迫つてきました。乃ち、五、六、七、八月四ケ月興行缺損は、遂に夥しい巨額に上り、多大の債務は日に重なつて、さらぬだに無資力の私は、手も足も出ない窮境に陷りました。それまでは、如何に興行不振の際にも、せめて從來の座員と、其の月收だけは減すまいと、種々算段し拔いた苦心も、もうかなつては續かなくなりました。茲に座員の一小部を餘儀なく整理すると同時に、座員の生活にも極度の緊縮を求めることにしました。この激しい財政難のどん底に、更に三四幹部の移動さへあつて、精神的にも物質的にも、昨年八月末は、一座にとつて座長の死に次ぐ一大危機を齎しました。

が、幸いにも座員一同の、初一念は挫けませんでした。折も折、前新劇協會盟主畑中蓼坡君、秋月正夫君を始め、新進氣鋭の若手俳優連が、進んで一座の戦線に參加し、悲壯の覺悟を以つて入座奮闘することゝなり、茲に更生の新陣容を整へて、苦境のドン底を突貫することになりました。

×

九月、天地清澄の初秋となりました。まゝよ饑餓を向ふに廻して、捨身の構へに立ち直つた私共はさて何う戦つたでせう。先づ此の轉身に意氣あらしめるため、私共は從來通りの普通興行を手控へまして、月末四日間を早稲田講堂に出演し、故座長の母校早大演劇博物館の寄附公演を營むことゝしました。と、同時に此の新陣最初の公演を眞に更生のスタートとして意氣十分のものたらしめんため、僅か四日間の興行に廿日の間の稽古日をとり心ゆくばかりの猛練習を重ねて、新劇界の模範たるべき理想的演技を示さうといふ大意氣込の下に、一同大精進の舞臺を見せました。果して、この戦闘は無意義でありませんでした幸いにも、東京の大谷松竹社長が私共のこの精進振を認めて、援助提携してくれることになり、十月は一日から市村座に出演、華々しく蓋を開けて大入を續け、更に十一月は本郷座に轉戦、之又廿日間連日の盛況裡に打揚げて「新國劇盛返す」の聲は次第と世上の話題に上るやうになりました。かうして十二月は新橋演舞場に出演して苦難の第一年を送り本年正月から四月まで、市村座に連演して每興行、復興的の大熱演に見物席を賑はせて、更生の基礎は日に月に堅固を加へてきたのであります。

其間、昨年十月十九日には、座員一同學習院に聘せられ、畏くも澄宮殿下を始め奉り東久邇、賀陽の各若宮殿下の御前に「乃木將軍」と「新國劇殺風陣」を謹演台覽の榮に浴したのを始め、本年三月十五日には日比谷公園新音樂堂に、一座更生滿一年の記念野外劇を公演し、同月廿四日東京市復興記念祭日には特に東京市の依囑によつてこれまた同新音樂堂に、復興記念野外劇を公演し、共に凄まじい大入と好評に惠まれました、但し、この兩度の野外劇は、前者は昨年同月恰も同音樂堂に故座長の盛大な大衆葬が行はれた事實に因み、後者は八年前の大震災直後、故座長が萬難を排して同所に演劇復興の第一聲たる罹災市民慰安野外劇を公開した其の因緣に絡んだもので、これを二つながら無事盛會裡に終了した事は、故座長に對しては勿論、新國劇自身の責任の上にも、又例へやうない欣快を覺えた次第であります。

尚ほ特に報告申上げたい一事は、昨年六月以降今日まで十一ヶ月間に於ける一座の新作戯曲初演數は、實に三十三種、この一事を以つてしても、平常私共が、極度の財政苦と闘ひながら、新境展開の精進に餘念がなかつたかを、諒察されることゝ思ひます。

×

過去の話はこれ位にしておきます。次に新國劇の現在です。

申す迄もなく全座員、元氣横溢、同時に又和氣靄々です。そして舞臺も一生懸命であることは、決して昔日に劣らないことを確信します。わけて認めて貰ひたいのは新人の眼ざましい活躍と、大幹部連の之に對する涙ぐましい指導協力です。そこに新國劇の清新なカラーが、いかに華々しく輝いてゐるか、この

一事でございます。云ふ迄もなく政界にまれ文壇にまれ、凡そ如何なる社會においても、最も隆盛の氣運を示すものは、宿將連の堂々たる風姿と共に、精鋭極まりない新人の活躍です。これは又、今の新國劇の著しい特長であらねばなりません。昨年五月末、當地のお名殘狂言として二日間「新人拔擢公演」なるものを催し、多大の好評と素晴らしい大入を占めたことがありました。その時既に之を見てこれは新國劇の明日の道を暗示するものと、多大の期待と激賞を與へられた方が尠くありませんでした。その時の若芽は、その後いかなる姿に成長してゐるでせう。僅か一年ではありますが、雪にたゝかれ、風に晒され、捨身の辛苦に養つた力は、果して何年分の成長振を見せてゐることでせう。尠からぬ自信を以つて、大方の鑑賞を希ふ次第であります。

老練の圓熟、新鋭の躍進この兩者の和合に生れる、熟演の二重奏その明るい、活氣に充ちた舞臺こそ、更生新國劇の新領分を物語るものとして御覽を願ひたいのであります。

「早慶決勝の日」作意

竹田敏彦

新國劇の苦鬪期、この際何か面白いものを書いて大入を取りたいものだ。――私は私の立場から始終、それを考へてゐた。そして偶〻書いたのが、この「早慶決勝の日」だ。

だから、この芝居は、どこまでも新國劇式に又客に受ける樣に、さう考へて筆を執つた。

事の起りは昨年の十月である、恰度秋のリーグ戰の早慶戰が終つて間もないころだ。金子洋文君と二人で芝居の話をしてゐた。末、「今頃早慶戰の芝居をうまく書いたら當るぜ」と話し合つたのが動機だつた。けれど新國劇ではそれより前に、一度「早慶戰時代」といふ脚本を上演してゐる。いやそればかりでなく、野球全盛の今日野球を芝居にする位のことは、誰だつて考へることに違ひない。だが芝居とスポーツとは違ふ、あのハラ〳〵と手に汗握らせる決戰の場面をそのまゝ舞臺に現せない以上、野球を芝居にして必ずしも効果があるものと思へない。餘程、目先をかへてうまい骨を捕へねばならぬ。

○

そこで私の考へたのはラヂオだ。芝居の舞臺で實物同樣の野球戰を見せることが不可能な以上、これに代つて最もよく觀戰氣分を傳へるものを拵さねばならぬ。ラヂオがそれだ見給へ、春秋のリーグ戰や、中等野球の大會毎に、全國幾十萬の野球ファンは、如何に熱心にラヂオのラッパの前にて、失望し、狂喜し、喝采し、手に汗握つてゐることか。坐して如實に野球を見、その感激を傳ふるもの、ラヂオこそ、それである。さうだ、ラヂオを使へ―そこへ幸ひなことは、あの時の早慶決勝戰が、實にも誂へ向きの劇的チームであつたことだ。積年の恨みを呑んだ早大軍が、一

回戰に勝利、二回戰に敗北、此の一戰こそ多年の雪辱成るか否やの大事の戰ひ、しかも七回八回までは強敵慶應に押され押されて、あはや無念の涙を呑まんづ土俵際に、俄然、森の二塁打、佐藤の本塁打！戰機忽ち逆轉して嬉しや三年目の復仇成るこれが芝居でなくて何だ。

と、まあかういふ段取りになる。

○

だが待てよ、それにしても、此方は芝居。時事映畫とは譯が違ふ。お客は神宮の見物でなく、芝居を見にくるお客なのだ。やはり戲曲として工夫が一番である。では、それをどう仕組むか。私が當時、早大野球部の各員中で最も、氣の毒に堪へなかつたのは監督西岡忠男君であつた。勝てば官軍、負れば賊、いつの世いかなる事にあれ、敗れた者はコキ卸されるが常識だ。以前も私がまだ早稲田にゐた時、一時早稲田の氣勢が揚がらなかつたので、あの名監督飛田忠順氏までが八方から批難されたことがあつた。だから、昨秋の早慶戰にも、私は母校早稲田の勝利より、未知の人ではあるが、不遇の監督市岡君の爲に勝利を祈りたい位の心に驅られてゐたのである。

そこで、主人公にこの市岡君を借用した。そして、これに溫良な慈父と、優しい細君と、愛らしい子供とを配して、スポーツの興味を盛るに、家庭悲喜劇の器を以てすることにした。勿論これは當てスッポで拵へた家族であつたが、後で早大野球部の諸君が總見しての話では、市岡君の家庭がこの劇そのまゝで、父君や夫人の容貌、性格までが、實によく似通つてゐたとのことだ。

從つて、この芝居に現れる事實は、當時の早慶戰の成積以外、殆ど全部が創作である。がしかし、結果に於て、それがほとんど事實に適合してゐた。意外にも、たゞ、第一場市岡君の處へ先輩三名が短刀を持つて激勵に來る處あたりは、事實にないことである。しかし、これも私が早稲田にゐた昔、野球部の不振を慨嘆して、ビール一打に短刀を添へ、諏訪の森の選手合宿へ押かけた多血兒があつたその古い事實をこれへ挿入したのである。尚ほ構想上の技巧や、人物、事件の選擇、配列等、ドラマトロギーの詳細については皆さんの御批評を待つことにして、こゝには言はない。

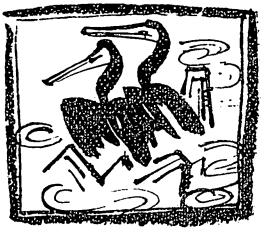
尚ほこの劇を上演するに當つて、東京の中央放送局から、野球放送の名アナウンサーとして有名な松内則義氏がわざ〳〵出張して、アナウンサーになる俳優秋月正夫君に連日野球放送のコツを傳授してくれたことを付加へてをくお陰で芝居を一層面白くしてくれた。

○

尚ほこの偶然の一作が、意外の大入と好評に惠まれ、昨年十一、十二兩月を東京で演續、其他名古屋、松本、小田原でも喜ばれて、今大阪のステージに脚光を浴びることは、作者として喜びに堪へない處である。わけて自分の望み通り、野球のわからない人々にも、之が喜んで迎へられたことは何よりの幸福である。

角座「早慶決勝の日」の配役

野村の西岡監督、辰己の大野總務、伊藤田の伊丹主將、畑中の西岡の父、山路の西岡の妻、小松の長男辰雄、坂田の校友小川の校友、鈴木の鶴見、南の演說する紳士、高木のファン、島田の魚屋



澤田を語る

久松喜世子

「澤田を語る」マア何と、屈托もなくお話の出來る御注文でせう。
「澤田を語る」何と、考へてお話しなければならない、難づかしい御注文なんでせう。

と、私には二樣の意味が感じられるのでございます。ですが此の場合、此の懷かしい大阪に參りましてまでも、周圍を考へひと樣に氣がねをすると云つたやうな、堅苦しい氣重なことは、いまの私には耐へられないとでございます。

十三年前の新國劇發生の地、ほんたうの意味での私達の故郷大阪では、私達は何の氣苦勞もなくほんとに伸び伸びした氣持で皆樣の前に、一生懸命熱と力の芝居を御覽に入れれば、それで皆樣から喜んで頂けるのだと、事實それだけしか考へてゐないのでございます。お判り下さい皆樣。此の私の皆樣に對する自由な安心し切つた喜びの心持を。

では「澤田先生を語りませう」

□

打出して、街々の畫と輝く灯の波を縫つて、自動車は濱町の宅に着きました

その後の新國劇

中井哲

早いもので澤田氏が死んでからもう一年あまりになります、先日谷中の墓前で一年祭の行なはれた時座員が半分程も變つてゐるので、ひどく寂しい氣がしました、退座した座員達と落合つて、手を握つて一寸感傷的な氣持になりました。もう一度一緒に舞臺に立ちたいといふ氣がお互ひに沸いて來ました。

振返つて見ますと、この一年間の仕事は、骨ばかり折つて失敗つゞきでした。澤田氏が死んだ時解散説が傳はる程でしたから、無論多難なことは分つてゐましたが、折角澤田氏がこれほどに築いた城廓を無慘に滅ぼしたくないといふのが私のその時の心持でした。併し然うなつて見ると、今迄の極端なピカ一主義が非常な災ひとなります、唯一枚で賣つてゐたゞけに後はもう芝居になるまいと思はれる向きがあります。御臨下すつた方は相當滿足して下さいますが、てんで客をひくものがありません。それでも六月新橋演舞場に澤田の追善興行をやるまでは、

た。いつもの通り引き剝ぐやうにして先生のお召物をお脱がせしますと、揃へてある着更へをからだに、フウワリと、それから帶を、直ぐ二階のお居間へ。

「ネエ、君、どうしてもやれると信じなければ駄目ですよ。やるんだ。やらなきやならんと覺悟するんです」と先生が。

「でも、私には出來ませんわ、年が若くて、小野の小町か、揚貴妃かと云つたやうな美人で、しかもお公卿樣のお姫樣なんて……。今度の白野辨十郎だけは、私には出來ませんと思ひます」と冠せるやうに私が申しました。

すると先生は默つて私の顏を見ておいでしたが、やがて、

「出來ないことをやるのが、藝の力だらう。君は自分の藝がそれ程信じられないものと思ひながら、今日まで新國劇を熱愛して吳れた人達の前に、すまして立つてゐたのではないんだらう」とおつしやつたのです。

一言もございませんでした。申譯ないとさへ思ひました。

「やります。よく判りました。きつと評判を頂けるやうに一生懸命私……千種をつとめます」とあやまるやうな心持さへ感じながら、申さなければならなくなつた私でございました。

邦樂座の初日は書きおろしの白野辨十郎が人氣を湧かせて、割れ返るやうな大入滿員でございました。

人にすぐれた立派なお顏立をなすつた先生が醜くい大きなつけ鼻をなすつて白野辨十郎をおつとめになり、人一倍不器量な私が、世にも美しい姫君に扮する氣遲れ。

それがどんなに舞臺の私を惱ませ苦ませましたことでございましたか。思ふやうに演技をすることも叶はなかつた程でございました。けれども此の私のいくらかの餘財がありましたので、表面は無事にいつて居りました、此興行から舊派の市川小太夫君が加入しましたが、結果は失敗でした。そして澤田在世のまゝの大世帶ではとてもやりきれないといふので、打上げと同時に大分人員の陶汰が行はれました。七月は本郷座を開けましたが、早慶戰時代などといふ際物で、見事に外れ、第一に豫期してゐた經營難に打突かりました。下級の者に厚くといふ方針で、私なぞは一文の給金も取らずに八月の帝劇に出ました、傾きかけた新國劇がともかくも帝劇に出られたのは偏へに專務山本氏の好意からでした、併し興行は散々の失敗で、小太夫君も此時に去りました。その他に中堅の幹部が五人ばかり、配役の問題で袂を連ねて去つたのは、世間でもよく承知してゐる事で、いよ〳〵落寞の感が深く內部から解散說が出る位でしたが、私は極力反對しました、去つた人達にも充分理解も同情も持つてゐましたが、そのためにこちらが解散するなぞとは飛んでもないことだと思ひました。

で、去るものは去り、留るものは留つて、以前に比べて小さいながら座は固まりました。苦鬪を續けるには寧ろこの方がよかつたのです、併しこの動搖のあつたゝめに九月には開けるべき小屋も開けられませんでした、僅かに四日間

ぢけ切つた千種姫を對手になすつた、先生の白野辨十郎は大層な御評判を頂いたのでございます。

さすがに澤田だ、さすがに新國劇だ……と劇文壇の先生方からも、御見物の皆樣からも心からのお褒めのお言葉を連日身に背負い切れぬ程に頂いたのでございます。

幕になりますと私は先生のお顏をぢつと凝視したものです。

先生のお顏にはいつも滿足と云ふやうな色は浮んで居りませんでした。

遂に千秋樂のその日までも。——悲しい氣が致しました。

□

二度目の上演は帝劇でございました。その時の私はすつかりからだをこはして居りまして、半月餘り流動物だけで生命をつないでゐたからだでございました。けれども倒れるまで、倒れて後やむ、と云ふ覺悟で、思ひ切つて千種姫をつとめたのでございました。そして幕になりますといつも先生のお顏を見つめてゐました。先生のお顏にはいつも和やかなほゝ笑が漂はされてゐたのでございます。そして各新聞、各雜誌では、再演の白野辨十郎が、初演の時に較べて遙かによい出來榮えであると激賞して下すつたのでございます。不思議に思ひました。私はある日先生に

「こんなからだで、いつ倒れるか判らないやうな私の芝居が、先生のお芝居のお邪魔になつてはゐませんでせうか、それを私大變に心配してゐるのでございますが」と申上げますと、先生は快く笑ひながら

「君、それだからいゝんだよ、邦樂座の時は君の千種姫がいぢけ切つてゐて、僕はずいぶんやりにくかつた、けれども今度は君がからだを投げ出して思ひ切ばかり、大隈會館でやるといふ始末でした、當然來るべき受難で、覺悟はしてゐました。この間、親身のやうにして下すつた少數の後援者に對しては御禮の言葉もない樣に思つてゐます。

やつと話が出來て十月から松竹の援助の下に市村座を開けることになりました、出物は大佛次郎氏の赤穗浪士、近生と銘を打つたのは此時からです、十一月は本郷座へ轉じて中村吉藏氏の日蓮、どちらも相當の成績をあげましたが、十二月がまた散々の御難。われ〳〵上に立つ二三のものは、半歲近く、無給同然といふ有樣でした。今年の正月から御當地へまゐるまで四ケ月間は市村座に籠城して居りました、三月は澤田氏の一年祭になるので、追善興行を營む筈でしたが、劇場の都合がつかず、お流れになつてしまつたのは唯今でも殘念に思つて居ります。

さて今後の新國劇を何うして行けば一番よく活かすことが出來るかとは人からもよくいはれ自分も絕えず考へてゐることですが、これは容易な問題ではありません。

出し物は出來るだけ新作を撰びたいと思ひます、これはよく批評家からいはれた事ですが、澤田氏の時代とは異なつた方面を拓くといふことには全く同感です、時代も動いて來てゐますし、劇團の內容も變つてゐますから、澤田氏の

つてやつてるだけに、僕は以前より樂に芝居をやれるのだ、思い切つてやるといふことはいゝことなのだよ」とおつしやつたのでございます。

私は涙ぐましいやうな氣にさへなつて、先生のこのお言葉を有難く感じたのでございます。

□

今度一年振りで懷しの大阪に、此の白野辨十郎を飜譯のまゝ「シラノ」と題しまして島田正吾が演ずることになりました。千種姫の役はロクサーヌと申しまして、相變らず私が演じます。

島田は既に東京で大隈講堂と、つい先月の市村座とで此の役を演じまして、幸ひ皆樣から好評を頂きましたものゝ、本人ははじめ「こんな大役を私に振つて、私の俳優としての將來を葬つてしまふのかしら」とまで心配をして私の所へ敎へを乞ひに參りました時にも

「僕、こんな大役をやり樣がありませぬ、どうしたらいゝでせう」と困り切つてゐたのでございました。そこで私は島田に「勉强をしなさい、そして思ひ切つておやりなさい」とこれだけを云ひ聞かせまして、一と通りの順序を敎へたのでございます。島田も此の思ひ切つてやるといふことが、よく判りましたものと見へまして、大隈講堂の初演の時もかなり好評を頂いたのでございますが更に二度目の先月の市村座では一層御見物の御喝采を博しまして、本人も「思ひ切つて出來るだけやる」といふことの價値强さを、しみじみ感得したと申して居りました。どうぞ皆樣もそのお積りで今度の「シラノ」を御見物下さいませ。そこには澤田先生の殘して往かれました根强い新國劇魂が、隨所に勇躍して居りますのをお見出しになることゝ存じます。

あとをそのまゝ踏襲するといふことは意味がありません、或ひは興行價値といふことを考慮して一般に知れ渡つた澤田氏のものをやつても見ましたが、餘程の適任者でない限り、單なる物眞似に終つて、やはり澤田は偉かつたと思はせるに過ぎません。澤田が生きてゐても、いつまでも古い澤田息に止まつてはゐないで、時代と共に動いて行つたにちがひありません。

經濟的にも喘ぎ拔いてゐます。先般澤田家の遺族に會つた節には、一年間犧牲になつて働いて戴いたのですから、此上苦しんで貰ふのは氣の毒である、これからは自分の家庭の事を考へてくれなぞといはれました程ですが、一寸然うい氣にもなれません。併し出來ることなら此劇團を興行師の手に移して、生活の安定を得て舞臺を專心になりたいと思ひます、そしてこの劇團を堅固にしてをく一方いろ〳〵の人と舞臺で顏を合せて、しんけんに勵みたいと思ひます今のまゝでは變な殼が出來て、小さくかたまつて了ふ怖れがあります。

常に大業を目ざして進みたいと思つてゐます興味中心のものへ、一つ二つ藝術的なものを配した並べ方で大體はやつてゐます、時代の波に乘つて進むためには日夜苦心してゐます、微力な私共がよき成長を遂げるために、大方諸賢の御指導を仰ぎたいと存じてゐます。

久々の京都

中村吉右衛門

お約束はしたもの、人一倍筆不精の私は芝居と後の稽古に追はれてゐては思つた通りの事もよう申上られません。

京都でも大阪でも父からの關係があつて私としては想出多いなつかしい土地です。それ故狂言なども よく選定して出しませんと失敗しますので今度も白井さんに大變我儘を申ました。

一番目の「一條大藏卿」私の大好きの狂言で……芝居を好き嫌ひ云ふのは勿體ない話ですが……子供芝居時代から賣込んだ役で、今正月帝劇が大谷さんの手に入つて初めての興行にも梅幸兄さんに附合つていたゞいて出して大當りをとりました。

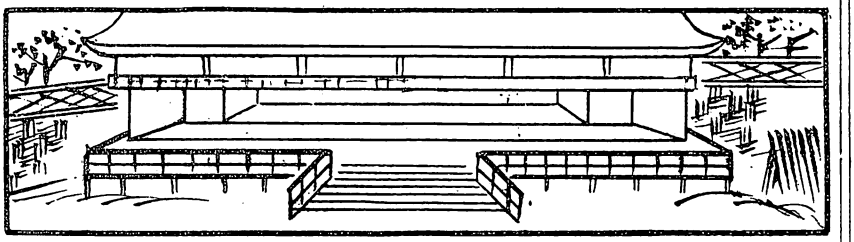
演どころは奥殿の本性を明かしての物語りですが、演難いのは序幕の「檜垣」です。人によると鬼治郎と顔を見合せての幕切れに一寸本性を見せますが私はどこ迄も阿呆でやつてゐます。公卿ですからどこ迄も品位をつけて、廣盛にやる丸藥も大昔は鼻くそをやつたものですが、あゝした事に直してあります。

赤垣は三河やさん……九藏の父の團藏の當り役で久しく出なかつた狂言でしたが岡先生と御相談して一昨年の一月本郷座で演じました。まだ〳〵研究する個所の澤山ある役ゆへ御覽になつて叱して下さいまし。半助は團藏以來やつてゐた紅若がつとめます 與左衛門は九藏が致します。父の當り役の一ッゆへ當人も一生懸命です。

縮屋新助は有名な默阿彌さんの傑作で、書下しに

は是に切られ與三郎が入つてゐるので赤間源左衛門などの敵役が出るので先年大阪でやらしていたゞいた「籠つるべ」などは此の緒屋から大分取つてある樣です。八月十五日の深川八幡の大祭を盛込んだもので江戸の祭りが春景になつてゐるもので、書下しの小團次もよかつたし、父歌六も好評であつたと聞いていましたがとても足元にも及びません。殺しは他の役と違つた凄味が要るので下座でも總て研究してやつて居ります。今度は弟の米吉をもしほと父の前名をつがせました改名を御被露いたします。大和やさんの蓑助も改名して初めてゆへ打連れて二人して坪内さんの「お七吉三」を中幕に出さしていたゞきます。二人ともまだ未來のある役者故御引立下さいます樣、隔から隔まで——と舞臺なら申上るところです。

當節私自分の健康上弓をやつています。大分それが爲先年大病以來よくなりましたが、今度有名な武德殿に全國の弓の會があるので是非出席しろと千葉先生からおすゝめをいたゞきましたが、名人方の出る場所へ役者風情の私がとても……とお斷りを申上たのですが其臆病が武術には禁物なのだから、おこがましくも一日出場致します。舞臺に障らない樣せい〳〵早く其名譽の大會に出るのを樂んで居ります。まだ申上る事も澤山ありますが、是から七段目の由良之助の拵へですから御許し下さい。（帝劇の樂屋より）



【五月の南座】

一條大藏譚

奥殿物語の場

〳〵人も子の刻早過ぎて、四方の光る月代の足元くらき丑滿時、常盤御前のおわします、一ト間の内にはともし火の晝かと照らすまどのほし、當ればかつちり松蟲の聲かあらぬか秋草の、つゆも置きそふ計りなり、こなたに伺ふ鬼次郎夫婦下手より兩人出で來り、こなしあつて。

鬼次郎　アレ〳〵簾の内には揚弓の矢は直ぐなれど、いがんだ性根の常盤御前恥かしめくれん女房來れ。

〳〵射る矢の先に突ッ立ったり、常盤御前は一心不亂、ねらひ程よく放つ矢は、はつしと響き切穴へ、はぶくら込んでとゞまるにぞ。

此の上るりの内御簾を卷上る、二重よき所に常盤御前十二單衣緋の袴、しとねの上に住まひ、揚弓を引き居る、矢は的の切穴へ通り居る、常盤こなしあつて

常盤　嬉しや通り矢忝けなや。

〳〵したり顔なる御氣色、鬼次郎さしもこらへかね、弓矢片手に引たくれば鬼次郎二重へ上り常盤の弓を引たくり思ひ入れ。

ヤ、そなたは

鬼次郎　吉岡鬼次郎幸胤、よも見忘れは御座るまいの、お京といふは則ち身が女房、夫婦の者が心をくだく甲斐もなく、いはふやうなき人でなしぢやな。

〳〵怒れる聲に顔ふりあげ。

常盤　ヤア珍らしや鬼次郎、揚弓に心をうつし居て、いつの間におじやつたやら。

〳〵云はせもはてずお京は詰めより。

お京　おつしやりますな常盤様、其揚弓をなさるゝ手間で、なぜ誠の弓を張り心の突き矢引しめて、源氏の恨みを晴らさふと思ふ心はつきませぬか。大事の〳〵の義朝様のお情を忘れ、二度三度の嫁入り成さるゝ心では、その筈乍ら天道様は怖ふはないかいなア、恐ろしふは御座りませぬか、人のむくひは遠からぬ、七間半の揚弓より當りは近い天の罰、神や佛に憎まれても、あなたは何共ないかいなア。

〳〵なみだ交りに云ひならぶる、心の直矢ぞ誠なる。

常盤　尤もの恨み事、悪ふは聞かぬ、去り乍ら世の中の人の心の竹ならば割つてや君に見せまじと云ひけんも外ならず、主を大事と思ひつめし誠の道は道乍ら、家來は家來の程々にて深きに至らぬ小笹の茂り、主人は主人の心にて千尋の竹の大藪も、外から知れぬはことわり〳〵。

鬼次郎　ヲ、面白い、心の竹の此鬼次郎が、今爰でぶつて〳〵ぶち据へて、ゆがんだ竹のしくれ見せてくれん。

〳〵云ふもあらせぢもつたる弓ふりあげて丁〳〵〳〵。

常盤　推參な、家來の身として主を打つたる慮外者め。

鬼次郎　ヲ、主人でも家來でも、心ゆがんだ常盤御前のむさい心の竹をはい吹き竹にしてくれん。

〳〵壁かけて打つ腕を、とめるお京をつきのけて、又立寄つて丁〳〵〳〵、腹立いきに揚弓のとつかも折れて飛散つたり。

鬼次郎又散々に打ち、お京、二重へ上り留めるをつきのけ、又打つ事、三人弓に手をかけしまゝ二重より下へおりよろしく引つばりにて弓三ツに仕かけにて折る、三人の手に殘る、キツとこなし。

常盤　ホヲ遁れ忠臣吉岡鬼次郎、ヲ、出かしたナ。

鬼次郎　何を。

常盤兩人を上下へ飛ばせキツとなつて眞ン中にて笛入りになる

常盤　時世につゝる人心、裏の裏なる恐ろしさ、木にもかやにも心置かれ、深き疑ひ晴らしてたべ、我れを憎しと思ふより、なぐり情もあら弓に叩きふしたる主思ひ、誠が顯はれ嬉しいぞや、今まで包む常盤が胸。

〳〵語り明かすもはづかしく。

二度三度の嫁入りと、姫ごぜにさげしまるゝ、面目なさ、武士の身の上に臆病者よ、腰拔けよと指さゝるゝにもおとらぬつらさ忘れぬ昔語り、義朝樣に判れてより、忘れがたみの三人りの若、兄は六ツ中は四ツ、弟はいまだ乳呑子の。

〳〵泣く音を忍ぶ伏見の里。

雪の下折れ消へやらで、終には　ながし出されて。

うとましや清盛がわらわにむたいの戀墓の闇。

〳〵我は子ゆえにやみ〳〵と、拾ひし我子の命ぞや。

現在敵の清盛に枕並ぶるさゞめ事虎狼のさけびより、耳に答へて物凄く、錦のしとねも我爲には。

〳〵毒蛇の鱗にふす心地。

いかなる地獄の責なりとも、此のづらさには增さるまじと、思ひくらせし此の年月、かくし包む心の底、今といふ今打明けかたる夫婦の衆、思ひやつてたもひのふ。

〳〵今まで胸にたもちたる、思ひはなみだぞやるせなき、鬼次郎も哀れに伏し、しほるゝ心を取直し。

鬼次郎　其お物語りは去ること乍ら、清盛の手を退かれ此の館へましますは、時節の至りと申す物、それに何ぞやうか〳〵と、明しくらして遊興わざ、朱に交はれば赤しと

やら、長袖の家になれ、武家の宵ちを御失念なされしかチエ、淺猿しいお心じやナ。

〽淺猿しきよと恨むにぞ。

常盤　愚かな事を云ふ人かや、女でこそあれ義朝樣のお胤をも生み落したる自ら、平家に怨みの一念は、心に込めし此の揚弓、なぐさみに事をよせ眞事は平家調伏の。

〽弓矢ぞや。

とつかを白き絹にてまき、源氏の白旗おしたてゝ、本はづ裏はづはと頭。

〽正八幡を頭べに項き。

弓の丈は二尺八寸、二十八宿の星と敬ひ九曜をかたどる九寸の矢は。

〽矢たけ心を張りつめて。

一ト矢は今若乙矢は乙若、牛若の名に事をよせ、丑の常盤が時詣で、三ツの鐵輪はあらねども、しんいの灯照らせる揚弓、念力通つて我が願ひ、矢數は一ツ百五十一、女に二挺の弓を引かせし名は清盛の清からで百四十九の骨々もくだけよ折れよと怨りのほむらあかき朱がきの九十九折、ねらいの矢先は切穴へ、清盛調伏是れを見よ。

〽とつかを取つてはつしとうつぼの黑皮とり給へば、生きる如き清盛の姿を繪がきし胸板、小矢筈は通りし女の一念鬼次郎夫婦飛びしさり。

常盤　弓の折れを揚弓の的に打ち付る、これにて黑の切れ落ちて内に清盛の繪姿をかきこれへ矢が立つてゐる兩人是れを見て悔り。

鬼次郎　そのお心とは露知らずして、出る儘の悪口雜言。

お京　打ちてふちやくの勿體なさ、冥加の程が恐ろしい。

兩人　眞平ごめん下さいませふ。

〽涙の數矢はら〳〵と、的に亂るゝ計りなり、歎きの聲のひまよりも、とくより伺ふ八劔勘解由、件の繪姿引はづし。

奥より勘解由伺ひ出で清盛の繪姿を取つて。

勘解由　聞いた〳〵常盤が心底きくからは此の通り清盛公へ注進する待つて居れ。

〽云ひ捨て驅け出す、かせに鳴瀨は甲斐〳〵しく。

鳴瀨驅け出で勘解由をとめ。

鳴瀨　コレうろたへてか勘解由どの、常盤樣が科人なりや大内藏樣も同じ科、善にもせよ悪にもせよ、主人の難儀訴人して、家來の道が立ちますか、モシ勘解由殿。

勘解由　ヤア、だまり居ろふ、あの大馬鹿が何の主人、兼て廣盛と心を合せ、此一條の家は身共がのつとる邪魔しおるナ。

〽驅け出す向ふへ鬼次郎つゝ立ち。

鬼次郎　ヤア愚か〳〵、鬼次郎爰になくんばイザ知らず、行かるゝなら、行つて見よ。

勘解由　何をこしやくな。

〽放さずやらじとねぢ合ふ内覺悟なせよと八劔勘解由、斬つてかゝるを鬼次郎が、心得たりと身を交す、思ひがけなき後より勘解由が肩先斬りつけられ、ウント計りに倒れ伏す、人々これはと驚く。

内、御簾の内に聲高く。

大藏　ヤア、方々さわぐ事なかれ、一條大藏長成が、不忠の家來ちうばつせり。

〽呼ばはつて、御簾を上ぐれば大藏卿日頃に變る御氣色、目の内すゞしく

長刀かい込み、突ツ立ち給ふ御粧ひ
實にも威あつて猛からぬ、仁義の勇
士名將と始めて知らるゝ計りなり、
人々敬ひ恐れ入る。
御簾の内に大藏卿、御鎧下大口
の拵へ附け、左手にて長刀を持
ち立身。
皆々ハッと敬ふこなし、大藏卿
思入れあつて。
吉岡鬼次郎とは汝よな、心たらせぬ長成が
何の辨へあらずして勘解由を成敗なしたる
事、鳴瀬が悔やみもうたてさに、今迄包む
我が本心。
〽此一大事を承はれと御座をしめ。
是れより床のメリヤスにおつこ
入りの鳴り物になり。
元來まろは源氏の類葉六孫王經基が末葉た
りしが、仔細あつて長袖に交はり一條大藏
長成と呼ばれ、歌道は元より文武の道にも
やわか人にもおとらじと思へど、表へ出ず
して幼少よりの造り阿呆。
〽うつけとなつて世をくらせど、源氏
にも愛せられず、又平家にも憎まれ
ず世をへつらせぬ我儘ぐらし。
それと知らざる八劔勘解由主人をうつけと
見あなどり、廣盛と心を合せ、此一條の家
を押領せんとの企らみ、憎いやつ手討にせ
んとは思へ共、ア、儘よ、云はゞ飼ひ子の
鶏同然、何時しめふと儘な事と、知らず
顔に打捨てしが、もふのがされぬ今宵の仕
義。
〽二十年來長成が作りこんだるこしら
へ阿呆。
顯はしたる源氏の爲、我が詞を守り牛若と
やらんに傳へてくれよ、コレ鬼次郎。
〽人間の盛衰は只天運による所。
六條判官爲義はおのが智謀にからまれて。
〽秋の木の葉とちりて行く、又もや嫡
子左馬頭待賢門の夜軍より、源氏の
勇士も皆ちり〳〵に、清盛に追まく
られ、東國さして遠近の、ちまたに
さまよふ義朝が、終に其身は尾張の
國長田が館へやみ〳〵と。
此物語りにて皆々無念のこなし
無念にあらふ道理〳〵。親といひ子といふ
何れも智恵自慢に、あたら身を今更おしむ
にかひなけれど、それに引替へ出かされた
るは常盤御前、唐土を尋ねるに操を立てゝ
名を殘す女は數多けれど、夫のため子の爲
に不義ものゝ名を取つて女の道の背きしは
これぞ背からぬ貞女のかゞみ、異國の人も
傳へ聞かば、などか是れを賞せざらん、斯
かる稀代の女をば、大藏が宿の妻にせしと
は身の果報、あほうと名のつく長成、元よ
り源氏の類葉なれば、義朝どのへ心のけつ
ぱく祝言のその日より百ばい增したる阿呆
の上ぬり、是れまで下夜の枕交はさず、浮
世を夢とくらす内心得難きは此の程より深
夜に及んで弓矢のなぐさみ、的をはづさぬ
清盛調伏の弓矢とは、さすがは義朝の北の
方、ホオ。
〽出かしたり健氣なり。
蛭子ケ小島の頼朝と牛若へ、大藏卿が心を
こめし送りもの届けてくれい、ゆるす、近
ふ〳〵。
短冊を出す。
鬼次郎　ハア。
短冊を受取つて。
子の日さす野邊に小松のなかりせば、千代

のためしに何をひかまじ。此の古歌を公達へたまま物とは。

大藏　サア夫れこそは君を祝せし新古今祝詞の歌、當時平家のてつする古歌、清盛に智惠はなけれど、重盛といふ小松ある上は、平家めつぼふ思ひもよらず、小松さへなくなれば、三年持たぬ平家の運命、それを待たず一戰に及ぶ時は、蟷螂が斧却て其身を失ふ道理、爲義、義朝がよき手本、傳へてくれよ、それも小松の枯るゝを待て。

〽重盛だになくならば、絶へて久しき白旗をきら一天に輝かさん。

源氏の爲には平家は怨敵、汝がためには思入れ鬼次郎に首取れといふことなし。

鬼次郎　ハ、ア。

大藏　コリや。

〽彼唐土の會稽山恥をそゝぎし越王のためしを見よと、勇ましき仰せ、賴母しかりける有樣なり、鳴瀨は夫の差添へを、取るより早く咽喉へぐツとさし通し、苦しき息をほつとつき鳴瀨勘解由の差添をぬき咽喉へつき通す、皆々驚くこなしあつて。

鳴瀨　其お物語りを聞いて成佛いたしまする惡事に組みせし我が夫一日でも長らへて外へもれては一大事、夫の後をしとふて死出の旅、未來で異見を加へ、善心にひるがへさせ、草葉のかげより。

〽御恩をほうずる御奉公させたいための此の自害。

只、何事も御ゆるされて下さりませ。

〽此の世の名殘り夫の死骸を枕にて、ねむれる如く息絶へたり、手負の勘解由は這ひ寄つて。

勘解由　エヽ口惜しい、大藏卿が作り馬鹿とは露知らず、源氏へ心を合せし事を清盛公へ注進して此の一條の家を身共がのッとり褒美の金と思ひしに、やみ〳〵死するが口惜しい、たとへ此の儘死する共、死んでも褒美の金がほしい。

〽あくまで我強き強惡とや、耳にもかけず長成公。

大藏　強惡非道の夫に引かへ連れ添ふ鳴瀨が健氣の最則、惜しい哉〳〵と云ふて返らぬ死出の旅、此上は長成は元の阿呆に立かへり、時めく平家の無理我儘、よけて通すけつこふ者、鼻の下の長成と、笑はゞ笑へ云はゞ云へ、命長成り氣も長成り只樂みは狂言舞。

〽あか月の明星が西へちらり、東へちとり、ちらり〳〵とする時は。

此時時の鐘になる。

アレ〳〵夜の明けるに間もあるまい、人の見ぬ間に早ふ行け。

〽往かふとも戻らふ共、何ともそなたのおはからひと、云ふては小腰に取付いて。

お京　今の別れがお名殘りおしい。

常盤の方へ行かふとするを。

大藏　アコレ。

〽きり、こん〳〵きりこんや、きりこんか切るがないと小舞に事よせ暇御諚。

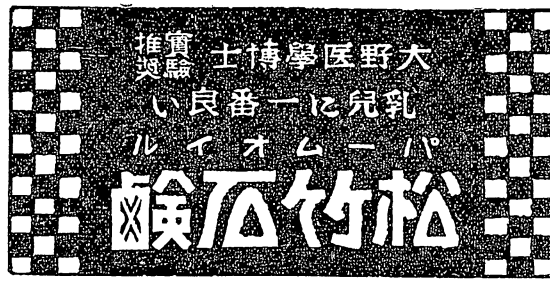
鬼次郎　重ね〳〵のお情、お禮は詞に。

大藏　禮には及ばぬとつと、行かしやいませ

鬼次郎　ハヽ。

兩人行きかける。

大藏　ヤレ待て兩人、はなむけせん。
うつぼの中より太刀を出し。
是れこそ源氏の重寶友切丸、清盛深く賞味する折から、九ケ年以前宗盛奇病に冒され此太刀を以て三日三夜加持する折を幸ひ、密かに奪ひ取りしゆえ、草を分かつて詮義すれども、我仕業とは心付かぬが阿呆の一徳、是れ源氏へ戻さんため、此の名劔の友切を以て清盛が頭べをつらぬけと大内藏が心を込めし贈り物、牛若へ渡してくれい。
〽鬼次郎ハツとおし頂き。
鬼次郎　大藏より劔を受取つて有難し忝けなし。御劔再び手に入る上は、君の御運の開くる時節、聽て源氏の白旗をかしこの山手にこなたの峰。
〽風にまかせてひるがへし、平家の一門逆まく波に押寄せ〳〵、陸へ登れば備へを立て、君がよせ手に隨ひて熊野育ちの手並を見せん。
我君の旗下にひるがへさんはまたゝく內、ちつとも氣遣ひ御無用〳〵。
〽勇み立たる其有樣、實にも吉岡鬼次郎と、世にも名高き武士なり。
此時、勘解由よろぼい乍ら起き上り。
勘解由　其御劔。
〽をつかみ掛るを大藏卿長刀にてぐつと引よせ。
大藏　主を討たんと計りし大罪。
常盤　强惡非道の報ひは目前。
お京　その罪科もめぐり來て。
鬼次郎　おごる平家を打亡ぼし。
お京　やがて源氏の。
大藏　コリヤ。
勘解由の首を切り刀のきつ先につらぬき。
平相國清盛を、此名劔のきつ先にかふして見せよ。
さし出すを常盤一ト目見て檜扇にて顏をかくす。
目出たいのふ。
大藏、段へ腰をおろすを。
木のかしら。
フフヽハハ……。
笑ふ、上、下の合方にてよろしくキザミ拍子。
——幕——



大藏卿の愚昧

中井浩水

大藏卿の話が出るといつも私の子供の頃のなつかしい夢を思ひ出す、大阪の古い家だつたら私の家に限つた話ではないが錦繪の貼込み帖の幾册かゞ土藏の棚の隅に紙魚の住家になりかゝつてゐるのがおきまりである、そのおきまり通り、殊に代々芝居好きが多かつた私の家にはこの種の帖が澤山あつた、私は折々土藏へ入つて南向きの高い窓の下で芝居繪を見るのが一つの樂みだつた、東土產の畵も多かつたし、又大阪役者の似顔畵も少くなかつた、大藏卿と勘解由と廣盛とがゐる『靱猿』の舞臺面の三枚つゞきがその中にあつた、役者は誰れ〴〵であつたか記憶がない、今からその遠い夢を顧みると全く春の朧である。

◇

吉右衞門の大藏卿は見たことがない、古い大阪役者の大藏卿は幾度か道頓堀の舞臺で見たのだが誰れがどうしたとかいつたやうな記憶は綺麗に失てゐる、唯、近年中座で見た鴈治郎の大藏卿だけが眼底にはつきりとクローズアップされてゐる、鴈治郎の大藏卿はうまいとか舞臺が大きいとかいふ沙汰よりも私は此人の生地がよく出てゐると思つた、世間では鴈治郎をとても利口者の如くいふ人もあり、喰へない男のやうに、甚だしきは口蜜腹劍の徒のやうに見るものもある、これは大きな間違ひである鴈治郎はそんな代物ではない、ボウとして現代放れのした味がある、無論大阪辯でチヤラもいふ、調子の好いこともいふそれをもつて人の惡い男とするのはこちらの力負けである、混沌たる點に鴈治郎の昔の役者らしさがある。

◇

玉屋町の本宅を十二時すぎに訪ふべし、奥の次の間で長い机を隔てゝ蒲鉾型に反つた是眞の幅に對して客を迎へて語る鴈治郎は面白い老人である、この人の口から何が明治演劇資料を聞き出さうといふ野心深い訪問客はきつと失敗する、何故といつたら雁の談話の速記錄のみをあてにして書くと屹度間違ひがある、放焉たるわが名優には過去もない、未來もないのである、

新町の妾宅、愛妾おあさの方の濃化粧、愛兒のよつちやんの頭を撫で乍らウダ〳〵いつてゐる鴈治郎を見よ、全く氣の若い粹老爺である。

◇

鴈の大藏卿の前半には技巧以外の生地の混沌たる味が不思議に役と一致してゐる、他人にはどう見えるか知らぬが私一人だけはさう思つてゐる、中座でそれを見た時も例の『靱猿』のくだりが省かれてゐた、あすこが見たかつた、次ぎに鴈治郎のあの大きな身體がヌウと立つてゐる、そこに愚かしいお公卿さまらしい長閑さがよく現はれてゐると思つた、恐らく舊幕時代の京都にはあゝいつた長閑なお公卿さんが隨分ゐたものらしい、その中には光廣のやうなハイカラさんもあり通村のやうな生眞面目な人もあつたであらうが——

◇

檜垣の場でお京が『おちやめのと』を舞ふ、ボウとしたお公卿さんがボウと眺めてゐる前で寛々たる古風な舞をまつてゐるまことに天下泰平の兆である、寛々たる山村流のさす手引く手を眺めてゐるうちにこの公卿さんがグタ〳〵と前へ倒れる、口をポカンとあけてゐる、セチ辛いコセ〳〵した今の世にこんな暢氣な羨ましい世界があらうか、『一條大藏譚』は產業の合理化やら思想善導やらインテリやら何とか細胞やら雜然騷然たるうき世に對する皮肉なペカンコウである、後段、急に賢くなつて薙刀で惡人を斬つたり、チヨボに乘つて引きぬいたりするに至つてはわが贔屓の大藏卿にも少々幻滅を感ぜざるを得ないけれど——。

◇

吉岡鬼次郎といふ男も融通の利かぬワロである、主人の常盤を折檻するとはあまりに阿呆すぎる、こんな男は大嫌ひである主人を毆つて置いて後からあやまつてゐる、そこへ行くと女房お京はまだ怨すべき點がある、あの甲斐々々しい拵への女振りも憎くはない、今度の南座では時藏がするだらう、魁車のお京は殘念ながら眼が近いので淋しかつたが時藏なら色つぽい眼もとが中年增のすて難い匂ひを發散させることだらう、鬼次郎の如き亭主を持たせるのは惜しい、美人鐵夫に嫁すか、コチ〳〵した亭主をもつて年中鬱陶敷く暮らしたことであらうと法界悋氣をして見ても始まらない。

物の本によると清盛は決して茹蛸のやうな坊主ではなかつたさうで入道は入道だが美男であつたらしい、嵯峨野に祀つた木像を見ても可愛いボン〳〵型の男である、その寵を得た常盤御前も滿更、厭で〳〵堪らなかつたものでもあるまい。そこは女といふ代物に慳忍に出來上つてゐる、別れて見ればもとの仇敵忽ち小弓引きの遊びに托して清盛の畵像を鏃でつんざいて平家調伏をやつてゐる、古人大江丸句あり

春の夜をゆめ〳〵油斷すべからず

（五月の南座）

赤垣源藏

第一　盤山邸玄關の場

●降りしきる雪の中、源藏、木綿紋附の着付大小下駄がけ饅頭笠赤合羽を着て風呂敷に包みし一升徳利を提げ、酔歩を運ぶ。

源藏　降るは〳〵、雪は鷺毛に似て飛んで散亂し、人は紙合羽を着て酔つてはいかいする本所から爰まで來る内さめるとは呑〳〵いくら呑んだか知らねえが、酔つたおかげに寒くねえ。

〳〵直ぐなしの字の道さへも、くの字に歩く千鳥足、玄關前に佇みて。

源藏　頼もう〳〵。

半助　これは源藏樣よういでなされました

源藏　半助どうだ、雪が降つて寒いな。

半助　ヘイ、寒うございます。

源藏　寒くば一呑杯まそうか。

半助　酒は眞平でございます。

源藏　なぜ呑まねえか。

半助　布子羽織が大事でございます。

源藏　今日はぬがせねえから一杯のめ、そりやそうと御兄い樣は御在宅か。

半助　イエ、お留子でございます。

源藏　エ、逢はせめえと思つて手前迄が嘘をつくな。

半助　左樣ではムりませぬ、御前樣の碁の御相手に今朝からお上りなされて先刻お歸りなされますと、又御前樣からちに打來いとの御召でたつた今お上りなされました。

源藏　敵討ちにお出でなされた、ム、敵討ちとは面白い。

半助　折角おいでなされましたが、今日はお留守でムりますから、御用なら明日お出でなされませ。

源藏　イヤ、あした來てはゐられねえ、御兄い樣が御留守なら、お嫂上樣にお目に與りたい。

半助　御新造樣も御風邪でお休みなされて御出で故、あしたおいでなされずば、あさつてお出でなされませ。

源藏　何故そんなに歸したがるのだ、是非ともお目にかゝらねばならぬ。

半助　それぢやと申して御風邪でムりますから。

源藏　是れ身共も鹽山與太夫が二男と云はゞ主も同然、詞を返すは無禮だぞ、ト、さア理屈ばつて云ふものゝ、實は一杯呑みに來たのだ、半助手前もやれ。

半助　有難うはございまするが、布子羽織はぬぎませぬぞ。

源藏　また羽織の事をいふか、いめいましい奴だ。

奥よりお梅出て來て手をつき。

お梅　ハツ、源藏樣へ御新造樣が、失禮ではムりますが、風邪にて引こむり居ります故奥へお通り下さるやうにと左樣おつしやり

ましてムりまする。

源蔵　イヨ、口上、御苦勞〳〵、只今奥へ罷り通るでムらふ。

合羽を脱ぎすて徳利をさげて上へあがる。半助足を見て。

半助　ア、もし源蔵樣、お足に泥がついて、居ります。

源蔵　何に泥がついてゐる。

半助　一寸ふいて上げませう。

源蔵　イヤ、ふくには及ばぬ、こすりつけておこう。

〳〵疊へ泥をすりつけて奥の一と間へ入りにける。

半助　イヤぢゞおさいお人だナ、徳利をさげてムつたから、又例の長酒にぐづ〳〵と呑んでゐて、めつたに歸ることぢやあるまい

お梅　早くお歸りなさる樣に、箒を臺所へ立てようかね。

半助　箒位ぢやなか〳〵きかねえ、あゝいゝまじないがある。

お梅にさゝやく。

お梅　そりや下駄へお灸を。

半助　ア、これ。

兩人奥を伺ふ——舞臺廻る。

第二座　敷別場

源蔵を眞中に、下手に與之助手をつかへ、傍に元服曾我の謡本をのせし見臺、正面に二枚折の屏風へ黑の小袖がかけてある。

源蔵　是は〳〵、與之助には、何時の間にか元服致したのう。

與之助　ハイ、當月朔日に御前樣よりお指圖にて、急に元服いたしました。

源蔵　目出度い〳〵是でお兄い樣も御安心だ

下手の襖よりおさみ出て下手へ住ふ。

おさみ　是は〳〵源蔵樣には、この大雪にようこそ御出でなされました、折惡しく風邪にて失禮御免下きりませ。

源蔵　お姉上樣、それでは御挨拶が出來ませぬ、その後は御無沙汰、さて兄上樣お留守と承はり甚だ殘念、お歸りはおそうムりませうな。

おさみ　外の事と違ひまして、碁の御相手のその時は、のう與之助。

與之助　左樣でムります、何時にお下りがムりませうや、何時も限りはムりませぬ。

源蔵　此の雪中に參つたが、それではお目にかゝれぬか、あゝ殘念な事でムる。

おさみ　御用の筋を私に仰有つて下すつてもよろしいではムりませぬか、今日に限つて私へ仰有りませぬは源蔵樣、チトお恨みでムりまする。

源蔵　左樣仰せられては恐れ入る、別儀でもムらぬが、涙々以來お世話に預りましたが此度仕官致してムる、去る大家の殿でムるが、殊の外なる御酒豪にて、身共が大酒を御所望にて此度三百石にてお抱へに相成つてムる。

何時の程にか控へて居た半助。

半助　物好きな殿樣でムりまするな。

源蔵　爰が泰平の有難さ、酒道にかけての豪傑と御賞美あつてお抱えに相成り、主命によつてお國元へ、明日お供で出立致す、それ故今日お暇乞ひに參つた處、御留守にてお目にかゝれず、至極殘念にムります。

〳〵殘り惜氣に夕暮を今日の限りと定め

源蔵、嫂はかくとも知らざれば。

おさみ　それは結構な事でムりまする、シテ御仕官なされしお屋敷は、どなた樣でムり

まする。

源藏　仔細あつて御家名は、追つてお知らせ致しますが、源藏が仕官致すははるかに遠き西國でムる。

半助　源藏樣なら北國でありさうなものだ。

源藏　そりや、なぜに。

半助　ぼうだらは、松前樣の名物だ。

おさみ　又口出しをしやるか。

源藏　然し、是は秀逸だ、感心〳〵。

おさみ　何に致せ今宵はお泊りなされましては如何でムりまする。

源藏　明朝未明の出立故、一宿致す譯にも參らず、お兄イ樣お歸りあらば御吹聽下されい。

〳〵云ひつゝ破れし風呂敷に包みし德利を取出し。

源藏　是は粗末ながら源藏が魂をこめたる酒どうぞおよりしなに召上つて下さいませ御在宿であつたら御暇乞ひに御酒一獻汲みかはさうと存じたが、御留守にて殘念千萬是非に及ばぬ御暇致さう。

おさみ　申さば目出度い御出立、酒一つお上りなされて下さりませ。

源藏　酒と聞いては目のなき源藏、一献頂戴いたして參らう。

おさみ　その内には又夫も歸られませう。下女に酒の支度を命じる、源藏屏風にかけし小袖を見て。

源藏　お嫂上樣、向ふの屏風にかけてあるのは御兄イ樣の御袖でムりませぬか。

おさみ　あれは、おとう樣の御かたみとて、旦那樣の御祕藏の御小袖。

源藏　此のお小袖が思ひがけなく、爰にかゝりてありしは幸い、親爺樣や、御兄い樣にお目にかゝるも同じ事、コレ、與之助一寸是へ。

〳〵手を取つて與之助を小袖の前に座らすれば。

與之助　イエ〳〵是では高上り。

源藏　はて名代ぢや、苦しうない。

この時奥より、梅、銚子、盃酒肴をのせて出でる。

〳〵諸禮亂さず與之助が、盃うけて、源藏が、前に直して手をつかえ。

與之助　憚りながら伯父樣へ。

源藏　頂戴致す。

〳〵呑む盃の酒よりも胸一杯にこぼるゝ涙、源藏ぐつと呑干して。

源藏　さて兄上是までは、永々お世話になり御禮の申しやうもござらぬ、然るに此度、仕官致し主命によつて明日西國へ出立致せば御暇乞いの此盃、御返盃致します。

と與之助へさす。

與之助　左樣なればもう一献。

〳〵盃うけとる與之助が、顏つれ〴〵と打守り。

源藏　ハテ親子とて爭そはれぬ、御兄い樣には生寫し、目元と云ひ口許と云ひ、かうもよく似てゐるものか、是にてお目にかゝつたも同然、姉上樣只今迄は兄上になり代つて御世話下さる御親切に甘へまして、度々の御無心、併しそれも今日限りお暇乞ひ此盃お受けなされて下さいませ。

おさみ　他人がましい事を仰有りますな（と呑んで）憚りながら御返盃致しまする。

源藏　何杯でも頂戴致す、イヤ盃では旨くない茶碗で一杯頂かう。

と、源藏茶碗でぐつと呑み。

源藏　半助、その方も大ぶ年を取つたな。

半助　へイ有難く頂戴いたします。

半助嬉しそうに酒を呑む、源藏

不圖、そばの見蠻を見て。

源藏　これ、興之助そちは謠を稽古いたすか何よりよい事だ、謠は第一身體の藥、シテ何を習つてゐる。

興之助　元服曾我を習ひます。

源藏　それは一段とよいものぢや、本を見せやれ（と本を開き見て）一樹の影に舍るも是、生さの契りなり、同性の流れを汲むも皆、前生のかたらひの宿緣ぞかし、實に文句にある如く、同性の流れを汲み、かく兄弟のかたらひなすも。

おさみ　エ。

興之助　エ。

源藏　コレ興之助、そちもお父樣へ孝行忘れるな、半助もその如く曾我兄弟諸共に、艱難なせし鬼王國玉は此上もない主人忠義、そちも大事に奉公致し必ず忠義を忘るゝな

――なぞとまぢめくさつた事は云へど、親の日にも御主の日も精進さへせぬ此の源藏忠も孝もあらうかい、やはり是がくだでござる、最早やお納め下されい。

〽折柄つぐる鐘の音に。

源藏　ヤ、あの鐘は何時でござる。

おさみ　大方七つでございませう。

源藏　七つとあれば明日の支度もあれば御いとま仕らん。

おさみ　スリヤ、どうあつても。

源藏　主命故に是非がござらぬ、主命に依つて出立致せば、一年たつて歸られますか、二年三年たつて歸られますか、お兄樣もお前樣も暑さ寒さをおいとひなされ、おあがり物にも氣をつけて、持藥をおこたりなさるゝな、是が今生の……ム、ハハ……つまらぬ愚痴をこぼし、今死ぬか何ぞの樣に……ムハ……明朝目出度う出立に何で泣いたか、譯がわからぬム……ハ……。

〽笑ひにまぎらして。

源藏　お姉上樣おいとま申す、興之助孝行を忘るゝな。

興之助　ハツ。

源藏　半助そちも奉公忘るゝな。

半助　ハツ。

源藏　どりや、おいとま致さうか。

おさみ　左樣なれば玄關口まで。

源藏　アイヤ御風邪なれば其儘〳〵。

源藏下手へ來り、辭儀をなす。

第三　元の玄關

源藏　おれを早く歸さうと、誰か下駄へ灸をすえたな、半助手めえか。

半助　エ、イエ、私ではございませぬ。

源藏　あゝ、身持放埒と云ひ乍ら、現在生れし實家へ參り、かく下女小者にうとまるゝも是もやつぱり……あゝ、是もやつぱり酒故だ。

半助手拭で下駄を拂ひ直す源藏下駄をはき。

源藏　ア、醉ふた〳〵雪が顏に當るのが、醉ざめの水を呑むやうだ、もつと降れ〳〵下戸の知らねえ心持た。

〽合羽と笠を肩にかけ、吹雪いとはず悠々と。

源藏、熊野の謠をうたいながら、ふり返り見て。

源藏　是が最早や見納めなるか。

〽長の年月住なれし、我が親里の玄關口名殘り惜しげに見返り〳〵、是非なくも立歸る。

吉右衛門禮讃

——京都南座に迎へて——

森　ほのほ

梅若万三郎翁は、申すまでもなく當代能樂界の第一人者で、氏ぐらゐ藝術に沒頭し、精進してゐる人は澤山ありますまい。氏の如きこそ藝術と生活と一致してゐると言ふべきでせう。圓熟の境に達せられた六十三の今日でも、朝早くから舞臺に立つのを何よりの樂としてゐられると聞いてゐます。ですから娯樂と言へば、それが娯樂なのでせうが、それを措いては、芝居見物だらうと思ひます。全く芝居は酒以上に氏の好物らしいのです。餘程以前のことですが、私が「先生は誰の芝居が一番お好きですか」と訊ねると、翁は直に「播磨家です」と答へられました。「どうして一番お好きなのです」と重ねて訊ねると、「あの人の藝には腹がある、力がある、臺詞にも、科介にもはちきつた力があります」と言はれました。流石に能樂家らしい見方であると、私は敬服しました。たしか其折は、「橋供養」の方の文覺で、袈裟の後影をのび上り〳〵、だん〳〵後退つて、孤を描いた橋上から執ねく見送る吉右衛門の盛遠の好さを切に讃へてゐられました。

能は「力」の藝術です。「力」の運用です。外に大きく現はすも力、内に深く藏すのも力、驀地に進むのも、弱々と退くのも、默すも、留まるも唯「力」です。能の「氣合」も、つまりは力の現はれに過ぎません。かやうに「力」一つで行く「能」の藝術と、吉右衛門の藝格とに、相通ずるものがあることは、この万三郎翁の觀察にも知られるのであります。

今日の芝居で、充實した力、緊張した力を演技の上に見せてくれる優には、左團次があり、中車があります。併し、それが何時も、如何なる場合にも充分であるとは、殘念ながら言へません。例へば左團次の青山播磨の、お菊が取出した皿を割るまでの氣組、中車が大判事の臺詞「死したる者と高聲に閻魔の廳を名宣つて通れ」などに不滿足は殘つてゐます。たゞ吉右衛門だけには、力の充實、力の緊張が何時、如何なる場合にも忘られることはありません。それは丁度、能にあつて、いついかなる場合にも「力」が失はれることが無いと同じやうにです。若し非難があるとすれば、それは息苦しい程に緊張したところの緊張があるといふ點にでありませう。

當代エロキウションに巧な優を求めれば、左團次、猿之助、勘彌、吉右衛門でせう。猿之助も勘彌も平素、話術の巧い優です。何時も多感的な、昂奮し切つてゐる猿之助の語調も、キビキビして痛快ですが、勘彌のあの憎い程落着いた、淀みのない抑揚の多い話しぶりには、講談師や落語家の話を聞く感じがあります。『名和長年』の堯心で見物を總泣きに泣かせた彼の臺詞廻しの巧さも、寔に尤と思はせられます。この二人と反對に、左團次、吉右衛門は隨分話の拙い人です。殊に吉右衛門は、自分でもよく言ふやうに、實に口の重い人です。全然話が言葉になつて現はれないのかと思はれる場合もあります。口を開くのが面倒なのではないかとさへ思はれる時があります。ですから成る可く話をしようとしないのかも知れません。而も舞臺の上に於いての雄辯では、この二人に上越す優はありません。實に世にも不思議な存在ではありませんか。

併し、吉右衛門に一度、端唄なり流行唄なりを唄はせて御覽なさい。その緩急、抑揚、節廻しの面白さ、あなたは必ず魅せられて了ふでせう。而して舞臺の上で、名調子と呼ばれる、あの巧な臺詞廻しから受けるのと同じ感激を、しみ〴〵覺えることでせう。前年、木村富子女史が狂言の『寐音曲』を吉右衛門の爲の所作事として脚色したのも、こゝを覗つたからで、作者は謠、狂言小唄等を存分に唄はせて、豫想通りの成功を收めることが出來たのでした。

吉右衛門の表情に富んだ、フレクシブルな聲は天賦のものではありませうが、あれまでに操り、こなすまでには決して生易しい修練ではありますまい。左團次も、勘彌も、猿之助も巧なエロキウションを聞かせてはくれますが、吉右衛門には更に一層、潤ひがあり、滋味があります。全く眼を瞑つてあの臺詞廻しを聞いてゐるだけでも興味は少くありません。例へば「檀特山」の熊谷の「おーい〴〵」と敦盛を呼び返す臺詞、「かーちどーき」の叫び、万三郎翁程に豐富でない音量をもつて、いかにも大音聲らしく聞かせてゐます。「いづれを見ても蒼の花、都の春より知らぬ身の、今魂はあまざかる、鄙に下りて亡き跡を訪ふ人もなき須磨の浦、なみ〴〵ならぬ人々の成り果つる身の痛はしやなあ」の如き述懷には、ロマンチックな情趣が漂つて、涙を催さずには居られません。

或人はかう言ひます。「吉右衛門の好さは、あの優のオシバキの巧さだ」と。要を得た評語ではありませんか。彼は彼の扮する人物の思想、感情を適切に表現する方法を能く知つてゐます能く研究してゐます。而もその表現法には、眞面目な自慰的な「樂しみ」とか、「遊び」とか呼ばるべきものが背景に匿されてゐます。これが謂ふ所の「おしばゐ」の巧さなのです。

例へば兩手を袖の中に組むとします。その組むまでの行程が、つまり「おしばゐ」の巧さなのです。其處に、彼の臺詞廻しと同樣な、抑揚も滋味もあるのであります。前に引用した熊谷が「曇りし聲を張上げて」で敦盛の首を兩手に捧げるまでの運び『天下茶屋』の元右衛門が東寺の引ッ込みの段取りの如きも、その適例にならうと考へます。この「おしばゐ」の巧さの底にしッかりした魂を摑んでゐるのは言ふまでもありますまい。と今更ながら禮讃の盃を擧げて、秀山子の健康を祝します。

（洛西の草廬にて）

五月の南座上演

八幡祭小望月賑

四幕

序幕　仲町尾花屋の場

年に一度の祭禮に、粧ひ凝らした野花屋の店先、山鹿毛平馬と道具屋の利七が、野花屋の娘分にからかつてゐる、利七は兼て赤間源左衛門が手放さうといふ、村正の脇差を今日買取らうと、金を用意して赤間の來るのを待つてゐるのである、赤間もお富がなくなつてからお富によく似た新わらのおみよに通ひ詰つてゐるものゝ、おみよには同藩の穗積新三郎といふ二世までと云ひかはした男があるので無駄骨と云つても聞き入れず、大切な村正を手放すといふのは金づくでおみよを手に入れる心だらう、無駄なことだといはぬばかりに平馬は心の中で笑つてゐるらしい。

急に向ふが騷々しくなつて、大聲にわめき立てながら、赤間源左衛門、海松杭の松、子分大勢が、縮屋新助を引ずりながら出て來る荷持の作助も子分の者に引ずられて、おど〳〵と來る、祭の雜踏の中で荷持の作助が、天秤棒の尖を赤間に突け當て、詫びやうが惡いので氣早の海松杭が腹を立て、此處まで引ずつて來たのである。新助は言葉をつくして詫びるのであるが、田舍者の正直な作助は、こつちから當つたのでない、人ごみの中だから氣をつけてゐるのに向ふから突當つたのだ詫びることはない、と反つて向ふを餘計に怒らやうなものだ、利七始め、娘分もいろ〳〵と口添えをしたが、赤間の方では聞入れられなくなつた、二人を叩きのめすとまで、皆の氣持を荒だゝしてしまつた。

「赤間さんまあ〳〵待つて下さんせいなあ」木やりくづしの端唄へ鳴物を冠せ、花道からおみよ手古舞姿祭禮の練子、若い衆大ぜい附添ひ出て來る。

おみよの口添えで、如何な赤間も我を折らねばならなかつた、魚心あれば水心などゝ、交換條件が、おみよなればこそ赤間の口から洩れるのである、がこれでいざざは納まつて赤間は氣を替へやうと皆を連れて奥座敷で酒になる。

新助はしみ〴〵とおみよに禮を述べる、新助も氣強う云ふたものゝ、心の内では國の親に暇乞ひをしてゐた位だと、おみよの親切が身にしみたらしい、野花屋のおつゆも奥から出て來ておみよによく詫びをして上げてくれたと喜び新助には、祭のことだから一口上げやうと、おみよを殘して奥へ入る。

おみよは新三郎の來るのを、待ち佗びてゐるので、此家の娘分お鈴が新三郎が粂村のかるこ衆と矢倉下で話をしてゐたの、岡惚れが多いの、新三郎の立聞いてゐるとも知らず、嘘をする、新三郎が二人の前へずつと出たの

で、お鈴の吃驚したやうな素振り、おみよもお鈴にからかはれてゐたのだと分つて、氣も落ついた、お鈴はそゝくさと奥へ去つた、殘つた二人は、兩方から同じやうに氣がもめてならぬの云ひ合で、水も洩らさぬ二人の仲である、奥に仕度が出來たとお鈴は二人を迎ひに來るので、二人は奥へ行く、と入れ違ひに海松杭の松を先きに平馬、船頭長次、娘分等が赤間と利七の込み入つた話を避けて出て來る、そして直ぐ酒になる。

利七との内談を濟まして出て來た赤間は、野郎ばかりの酒盛りぢや浮かない、おみよを呼べと怒鳴り立てるのである、おみよは如何にもうるささうに出て來て皆の中へ坐る、おみよが願酒だといふのに、皆は祭のことだからと酒をすゝめるので、おみよの肝に障るのである、赤間はおみよに噂に聞きや情夫があるといふが、どんな男か名も聞きたいと、責め立てた。

「あい情夫が御座んす、可愛い男がござんすわいなあ」

おみよはかうきつぱり云ひ放つた、赤間は何ッとばかり氣色ばんだ。

「さあさう知らしやんしたら、かくしても言はさずにはおかしやんすまい、二世と三世と言ひかわした男が外にござんすほどに、お氣の毒ではござんすが、お前の言葉には從はれぬ故、此の廣い仲ノ町に外にいくらもあるこども、誰なと呼んで下さんせ、あんまり愛想がないやうだが、これも私の生れつきでござんすわいなあ」

おみよはかうまで云つたが、男の名は赤間の前では云へなかつた、海松杭の松がつか〳〵とおみよの傍へ寄つて、行きなりおみよの左の腕をまくり上げて、腕に彫つたこの新の字とわめき立てるのである、平馬は赤間の氣込むのを制して自分朋輩穂積新三郎の新の字か香爐詮議の大切な身でありながら役目も忘れ遊里の女に魂奪はれ、殿の意を輕しめる不所存者の新三郎、縄打つて屋敷へ引かうか、と責め立てるが、かう云はれてはおみよは、おめ〳〵と新三郎の名は出せない、新助がつか〳〵と出て來て、おみよと言ひ替はした男は私だと、名乘り出たのである、皆は呆氣に取られた、おみよは合點が行かないが、おつゆが目引き袖引きするので、おつゆの才覺で新助が先刻の禮心にした事と呑込めた、赤間は直ぐ利七を呼んで村正の代を受とつておみよを身請しやうとしたが、之も新助が先約といふことになつた、赤間にしてはこのまゝ手を引いてもゐられないので、新助におみよを自分が貰ひたいと云つたが、新助はきつぱりと斷つた、赤間は話の種は知れてあつても、今はどうにも仕樣がないので、自分の顔の立つやう、今仲ノ町で裁き人と噂の高いこの家の女房おつゆに話は預けたといつて、初めて逢つた綿屋新助、顔を忘れぬ目印にと煙管で新助の額を割つて皆をつれて去る、おつゆもおみよも今更に新助に氣の毒な目に逢はしたことが苦しかつた、奥て此樣守を見聞きしてゐた作助も出るに出られず、くやしがつてゐた、新三郎は新助の前へ出て手を突かんばかりに禮をいふのである、おみよは今のもや〳〵でのぼせたのか、しやくがさし込みさうだといふので、座敷で休むがいゝとおつゆの心づかひ二人は一間へ去る、おつゆは奥から呼ばれたので去つたが、新助は一間から聞えたおみよの聲に我知らずハッとしてじつと聞き耳を立てた、作助に脊中叩かれてくづれるや

うにべつたりと坐つたのである。

返し　佃沖猪牙船の場

藝者のおみよが橋から大川へ落ちたが、最寄りには船頭も居ずあれでは命も危ないことだらうと二三の人が話しながら通つた。道具幕が落ちると川へ落ちたと云ふおみよは折よく橋の際でもやいしてゐた新助の船の上へ落ちたのであつた、新助は驚いていろ／＼と介抱した、幸ひにもおみよは怪我もなく助かつた、新助は四邊には人もなし思ふ女とたゞ二人、思ひ切つて自分の心を打明けておみよにせまつたのである、おみよはは、、、と困つたのである、新助の頼みを聞かねば今の親切も恩も仇になることではあるし、萬一どんな手固めにも逢ふか分らないので、新三郎がかねて詮議の香爐が手に入れば本地へ御蹄參の叶ふ人であるから、賤しい藝者風情の自分にはとても傍にゐることは叶ふまい、その時は譯をはなして二人は添ふと約束をしたのであつた新助は正直一方おみよの言葉に天にも登る心地がしたのであつた。

二幕目　尾花屋座敷の場

娘分の女子どもが、辻占で待人ごとをしてゐる、お鈴と船頭長次の中がどうの、縮屋の新助もふみ臺客だのと、口さがない、奥からおみよが出て來て、新助さんが來る約束だが早く來てくれゝばいゝがと獨り言のやうにつぶやくので、女子どもは今お出になると船頭衆がいつてゞざんしたと云ふので、話があるので下座敷でも片附けてくれと女子どもを奥へ去らす。

「ほんに待たるゝより待つ身とやらで、新三さんの身の上になくては叶はぬ香爐の金、せつば詰まつて新助さんに無心をしたら今日都合して來なさんす約束故、さつきから待つてゐれど、首尾よく金が調ふて新三さんの望みが叶ひ、香爐が手に入るその時は新助さんにかねての約束、一つよければ又一つ苦勞のたえぬ浮世ぢやな」

おみよはじつと思案にくれてゐる。

新三郎浮かぬ顔で出て來たが、野花屋の内へはすぐと入りかねた。

「正治殿の厚恩に測らず寶が手に入りて本地へ歸るこの新三、それにつけ許嫁のおきしが尼となつたる故、おみよと緣を切らざれば正治どのへ義理たゝず、兎やせん角やと來る道も思案にくれてうか／＼といつの間にやらもう野花屋、義理ある譯を打明けて話した上でと思ふたが、さうしたならば未練が殘り別れかねようと存じた故、愛想のつきた體になし、心を鬼に緣切らん」

新三郎の心はやつとかう極まつたので、家の中をのぞいて見た、おみよ一人なので思ひ切つて家の中へは入つた、おみよの顔を見ぬやうにと後向きなのである、おみよは待つてゐたばかり新三郎に縋りつくが、手あらくつきのけられて案に相違、おみよには新三郎の今日の仕打が解らなかつた、二人の仲は三年越し互にかくすことのない仲だのに、今日に限つて當られる譯を聞かしてくれと、かき口説いたが、新三郎は苦しい胸の中から心にもない愛想づかしを云ふのである、涙々の自分からやがては分限者にならうとする、縮屋新助の襟につくのが遊里の慣ひなどゝ、奥にゐるおつゆ、お鈴等も聞き捨てにならないので新三郎に取りなすが、新三郎は顔を反向けて

ゐるばかりである、そして切れる證據は起請の守袋去り狀かはりにくれるとおみよに打つけた、おみよはどうして受取らう、おつゆは自分が預るといつて懷にしたが、お鈴は人事ながら腹が立つた、とう〳〵新三郎を門口へ突出してしまつたのである、新三郎は手を合はしながらおみよに佗びてしほ〳〵と去つた。おみよは有合う茶碗で、とう〳〵頭酒を破つた。

新助が同じ縮屋仲間の七郎兵衛、九郎介と共に出て來た、新助はおみよに賴まれてゐる金を渡しに來る序に、同業の人達に自分とおみよの間を見せびらかさうとしてゐるらしい新助の姿を見て、惡い處へ來たといふ氣がしたのはおつゆであつた、新助は賴まれたものを持つて來たと云つても、おみよはお前故に新三郎に切られたのだと、恨みがましい面持ちでつんとした、新助は合點が行かない、丁度奥から船頭の長次も出て來たので、他のものは酒宴となつたが、新助はじつとしてはゐられない、おみよの機嫌の惡いのは氣合が惡いからとおつゆも云ふので反魂丹を出したがおみよに拂ひのけられてばら〳〵とこぼされた、新助が五十兩の金を持つて來たと財布を見せたが、おみよにはもう用のない金、新助には氣の毒ではあるが、新三郎に切られた胸の惱みは納まらない、又茶碗で酒を呷つた、新助は新三郎と切れたならいつぞやの約束通り自分の女房にと云ひ出したが、おみよはあの時は船の中で唯二人、たゞ氣休めに云ふたゞけでみんな僞りと、新助は初めて遊里の手練手管を聞かされたのである、七郎兵衛、九郎介の同業者は新助が自慢たら〳〵言つてゐながら今日のざまはどうしたと、果ては長次お鈴も交つてさん〳〵に新助をあざ笑つた。

「あこれ〳〵なにも世間へ見得らしくふれ歩きはいたしませぬ、今お前方のいふ通り野暮な生れの此新助、誰が目で見てもまことゝは思はれまいが、然し又形のないことは言ひませぬ、新三どのが香爐を詮議し出して歸參したなら斷りいふて、隨ふと言ふた言葉を僞りと知らぬは私が正直故、耻かしながら其時より神や佛に願かけなし待ちにまつたる甲斐もなく、折もあろうにこのやうに二人の衆と一緒に來た今日に限つて愛想づかし、何故こう云ふことなれば內緒で云ふては下されぬ、いかにうそをつくのが慣ひとてそりや情ない、胴慾だ、また神樣も佛樣もなぜ知らせては下さりませぬ」

新助は泣かねばゐられなかつた、おつゆを捉へては今日の金も仲間から借荷して實入の身の詰まつた金、かうして二人の衆の耳にも入れば顏むけもならず國へも歸られず、明日から路頭に迷はねばならぬかと思ふと口惜しいと、かき口說いた、おつゆは新助をなだめすかして何事も自分の胸にあると新助を送り出した。

しほ〳〵と歩いてゐたが口惜しで胸一つばい、決心の樣子で涙を拭いて逸散に駈けて行つた。

座に殘つた人達は、新助を氣の毒に思ふのはおつゆばかりだ、七郎兵衛や九郎介等は座を替へて呑直そうと奥へ行つてしまつた、おつゆは何科もない新助さんへの愛想づかしは濟むまいとおみよを責めるが、くやし紛れにあとや先きの考へなく、これと云ふのも新三さんが起請まで返す心になつたかと思ふと、悔やしうてならぬと泣いてゐるばかりである

おつゆは起請と聞いてさつき新三郎が置いた

守袋の中は手紙であつたと思ひ出して、おみよに見せた。

「おみよどのへ新三郎」樣子は之れで知れようとおみよは急き込んで見てくれとおつゆにせがんだ、おつゆは燭臺を引寄せて手紙の封を切つてさら〳〵と文を擴げた。

三幕目　石町縮宿の場

越後から上る絹商人の定宿である――。座敷では荷拵へをしてゐるものや、帳合に首をかしげてゐる者など、氣さくい旅商人らしい奥から作助が出て來たが又しても新助の噂で耳が痛い、今日はなんだか案じられてならぬかして迎ひに行くと出たが、ばつたり途中で新助と行き逢つたので作助はやつと安心した他の人々は新助の顏色を見て、どうかしたかと氣遣つたが、持病の疝えで肩が張ると云ふので作助は新助の肩を揉んでやる、商人たちは今日見た二丁目市村座の狂言ばなしを初めたのであるお妻八郎兵衛の心中狂言、緣切りから殺しまでをじつと聞いてゐた新助は我身にひしと當るので、思はず八郎兵衛に同情したのである。商人たちは新道の寄席に靱太夫が掛かつて饅谷だが聞きに行かうと新助も誘ふのだが、氣分が悪いので御免蒙るが、作助に一緒に行けと云つても、作助は新助と一緒ならと、どうしても行かない、跡を頼んで商人たちは出かけたが、作助には新助の樣子が氣づかはれてならなかつた。此家の亭主六兵衛、珠數をかけた好々爺である、六兵衛にも新助の顏色の悪いことに氣がついた、疝えが起つたときくので、六兵衛は作助に奥に藥湯があるから煎じて上げてくれと云ふので作助は奥へ入つた、六兵衛は新助にいつ頃立つのかと聞いたが、新助は今宵の中に荷物をこしらへ四五日の中に出立しませふと、云ふものゝ新助は明日をも知れぬ人の身の上、もうこれ切り逢はれぬかも知れぬと緣喜の悪い言葉つき、六兵衛は打消しながら、今日仲ノ町へお出なされたか、さつき野花屋の前でお目にかゝつた人があると、此間中からの新助の放埒に六兵衛は默つてゐられない、若い人には珍らしく親の命日は云ふに及ばず、幼い時に別れた妹の行方を案じ、國を出た日を命日に手を内をやつたり、感心な人だ、堅い〳〵と自慢したが今日は面目ない、うそで固めた遊里の慣ひ、取るだけ取れば突出して振り向いても見ぬ不人情、それ故果ては切つたりはつつたり得て騷動の出來るもの、さうならぬうちに切りあげてよいかげんになされませと涙をしぼたゝいての意見である、新助もその親切は添けなかつた。

「二十年來馴染ととてよう意見して下さりました、なるほど一二度友達に連れられ行つたけれど根が野暮者の私故に惚れられよう筈はなし、惚れられさへせにやはまりもせず振られて蹄る果報者と近々國へ蹄りますればば、必ず案じて下さりますな」

六兵衛は之を聞いて安堵はしたものゝ、荷物にする代物は只の一反もない有樣で、いよ〳〵新助のことが案じられてならない、ふところから出したのは、此宿で亡くなつた新助の親の位牌、親の意見と思つて心を入れかへてくれと懇々とさとすのである、奥で聞いてゐた作助は泣いて六兵衛の親切を喜んだ、新助の思ひ切つた誓言に六兵衛は、お前の魂も本當に安心したか藥の養えるのを見に奥へ入る、新助は父の位牌を抱きしめて、不孝を脇差を預るといつて奥へ持つて入つた、作助

詫びるのである、向ふから道具屋の利七が小田原提燈を持つて出て來た、村正を百兩に賣つて五十兩儲けたが、後で聞くとこの双物で腹を切つたとか、無氣味な代物早く賣りたいと獨り言云ひつゝ、行かうとして爪づいて提燈の灯を消してしまつたので、灯を借りに入つたのが顔見知りの新助であつたので早速村正を賣り付てしまつた、新助は白刃をきつと見てその形相は忽ち變つて、利七に一刀切つけて既に狂氣の體である、血刀を提げたまゝ道行く按摩も傍杖を喰つた、新助はにつたり氣味の惡い笑をのこして向ふへ入つた。作助は藥を盆にのせて出て來たが新助の姿の見えないのを審かつた。丁度此時駕を急がして來たのは野花屋のおつゆで、おみよに文を書かせ詫びに來たと、文を出したのが封の切れ目から不動の像か現はれた、おみよの親の筐管谷の不動樣、肌身はなさぬ品でうそいつはりでない誓ひと、聞かされて作助は吃驚した、美代吉さんは新助さんの尋ねてゐる妹であつたのである、一時も早く新助に届けやうとしたが、駕屋の知らせでは新助とかいふ人が村正の刀を買ひ、それで切つたと刀を賣つた道具屋の話であると、二人は氣も轉倒した、六兵衛も出て來てまさしく的は化粧坂だ、文持つて行けと云はれるまゝに作助は一散に飛んで行つた、おつゆも家が案じられるので駕に乘つた、六兵衛は珠數をつまぐつて是非もないことだと、念佛を唱へるよりほかになかつた。

四幕目　中木場材木河岸の場

人通りの少い化粧坂裏の川岸である、繩をかけた四つ手かごを圍んで赤間の子分五六人立かゝつて話をしてゐる、親分のいひつけで美代吉を引拂ふて、夜船で木更津へ引越女房に連れて行かうと、宵から近所へつけてゐたが折よく美代吉がこの川岸を通つたので、かごへぶち込んで夜通しにやるつもりだが、こんな間のいゝことはないと苦勞の少かつたことに助かつた樣子だ、一人の子分があわたゞしく走つて來て、縮屋の新助が今日美代吉に突出された遺恨から、親分が賣つた脇差が廻り廻つて手に入つたので、人の見かいなくむやみやたらに切つて、十六七人斬つたそうだと知らすので、新助の來ないうちに洲崎までやらうと、駕をかついで急いだ、燗酒やが來て荷を下ろしながらおでん〳〵と呼んでゐたが、新助は村正を提げておでんやの荷の前へ立つた。呑みものが欲しさうな思入れである、おでんやはふと血刀を見て人殺しと叫んだ、新助は斬りつけたがおでんやは逃てしまつた、新助は荷の傍へ來て桶の水をひしやくでがぶ〳〵と呑み干した、縮屋仲間の七郎兵衛、九郎介、お鈴、長次の連中が心持よく醉ひながら出て來たが、物凄い形相で新助が皆の前へ立つたので逃げ出したが、九郎介は一番に斬り倒された、之を見た三人はたゞもうう〳〵するばかりで、追ひつめられては斬られ、四人が四人とも新助の恨みの刃に倒れてしまつた。新助は會心の笑を浮べてほつとした。

同（二）　洲崎土手仕返しの場

先刻の駕は此處まで運ばれて、船の來るのを待つばかりである、新助に追はれて子分どもが逃げて來る、多數を賴みに新助と渡り合つたが、双物には敵はないので子分どもはほう〳〵の體で逃げてしまつた、新助駕の繩を

切つて刃の先で垂を上げて中をのぞくと思ひがけないおみよである、おみよも意外であつた、おみよの詫を待つ間もなく新助は斬りつけた、おみよは彼方へ逃げ、こちらへ逃はしたがとう〳〵新助にたぶさを捉へられて、新助の恨みの刃に伏さねばならなかつた、新助はおみよの首を切り放して如何にも無念さうに見入るのである。

息も切れ〳〵作助が駈けつけて、先刻のおみよの文と不動の像を見せた、新助は文の仔細を作助に讀まさした。

「心急ぎ候まゝ申譯のみ書送りまゐらせ候今日はお前樣へ新三郎樣の事につき心にもなきこと申御腹立てさせ申譯なく存じまゐらせ候、後にて承はれば新三郎樣の御許嫁なされ候おきし樣私事よりして尼におなりなされ候故おきし樣への義理に新三郎樣も餘儀なく私と緣をお切りなされ候まゝ又私事も今となつては新三郎樣への義理にお前樣へも從ひがたく頼りなき身とまゐらせ候殊に又私事は五つの年に親に別れ力と頼むものもなく候まゝあまへましたる事ながらこれまでの御緣によりお前樣の妹とも思召し行末長くお目をかけ下され候やう願上まゐらせ候、この事僞りならぬ印に生みの親のかたみなる越後の國菅谷の不動樣の尊像相添え差上申まゐらせ候」

新助には初めて知つた妹のおみよであつた面目なさに新助は行成り村正を我腹へ突立てた、驚く作助を制しながら、妹と知らずして迷ひし煩惱。

「寢てもさめても忘られず、いつぞや船での約束をまことゝ思つてそれからは附けつ廻しつした俺が、今となつては面目ない義理にせまつてこの俺に汝の肌をふれたならこの世からなる二人は畜生、これ妹堪忍してくれ、おりや汝の兄ちやぞよ、その兄の身でこのやうに慘く殺すも互ひの因果、汝ばかりは殺しはせぬ」

新助と作助は今更のやうに浮世の約束ごとを嘆じ合つた、捕方大勢が人殺しの罪人そこ動くなと取卷いてよろしく幕となる。

美禰子さんの遭難

◇——代役は決る——◇

中座五月興行に出演中の村田美禰子さんは三日樂屋より宿への歸途街上で暴漢三名に襲はれ鋭利なる短刀で兩脚下腿部を斬りつけられ、治療五週間の傷を受け目下大野病院に入院手當中、經過は良好にて全治後は舞臺にも立てると、因にその代役は左の如く決定した「夕だち」の女給百合子は東日出子「飾間宅兵衛」の下女おりんは橘薫「天國地獄」の女工ときは西條靜子、同芳本女史は飯田蝶子。

私が經驗した

月經閉止の最良手當法

京都祇園甲部　石田桃也

私の身体は發育が余程好かつたので丁度十五才の夏頃から來潮しまして、他の人の樣に滯つたことは只の一度もなく、今は二十二才になりますが必ず二十八日目か三十日目には決つて有つたのです。それがふとしたことから十二月の二日から三日間有つたきりで一月には待てど暮せど有ませんでした。それでも今にあるか今にもと心待に待てゐる内に早や二月の五日も過ぎましたが有ません。友達や親姉妹に話すことも出來ず一人で煩悶してゐました。そして新聞や雜誌の廣告にツラレてアレヨ之よと殆ど有とあらゆる通經劑を服用し、座藥から注射藥迄で大抵の方法は講じて見ましたが何の効果もなく、唯だ恐るべき恥かしい日の來るのを待つのみと諦めて居りました。

然るに一寸した風の便りでサンガーが非常によく効くと聞かされましたので、又だまされるとは知りながらも自分の身の上を思ふと又のむ氣になり、發賣元から説明書を頂きました所、四ケ月目の閉止にはサンガーの白箱で必ず流經すると有ましたので、だまされるのは承知の上白箱を注文して三月末から服藥いたしました。藥は錠劑で服藥量も少くのみ易い藥でしたが他の藥の樣に下痢もせず腹痛もなく、三日四日と服藥するのに何のことも有ませぬからア、又だまされたのだと怒りながら服藥を續けて居りますと、丁度六日目に嬉しくも十二月以來見なかつた月のものが有る樣になりました。こんな嬉しいことは又と有ません。私の心配は之で完全に解決されましたので有ます。月經不順や月經困難や月經閉止で人知ず煩悶して居られる世の多くの婦人方に私の經驗からして之の良藥サンガーを御知せ致します。

サンガーは産兒制限と婦人病とで世界に名高いサンガー婦人が苦心の發明藥で有まして發賣元の主人が米國の大學に御留學中にサンガー夫人と御親交があり、之の貴重な處方を得られたのであります日本では斯界の第一人者と言れる醫學博士溝上先生や**ドクトル**宍戸先生が非常によく効く又と得がたい最良藥で有と保証して居られるのでも解ります。サンガーの説明書は京都市山内の眞生園樣へ申込めば直ぐ御送りになりますし、御急でしたら貴女樣の月やく閉止の月數や御容態を書いて切手を三十錢そへて御送りになりますとそれは親切に貴女樣に最も適した藥を新しく作つて代金引換便で直ぐ送つて下さいます。

巳之吉殺しの實說

◇西尾福三郎◇

吉右衞門が三年振りで京都へ來る事になつた。

昭和二年の時も五月だつたし、そのもう一つ前の時も確か五月の頃だつたと覺えてゐる。

さう云へばこの一座の演し物はいつも季節の味を巧みに調理して見物の嗜味を喜ばせる點で仲々冴へた腕前を見せてゐる。例へば先年の法界坊にしても、山吹、蜆汁、荵賣り、夕立等と初夏の景物をそれからそれへと竝べ立てる事によつて、時代を超越した季節的連想の中に夢と現實の調和を忘れさせない用意をしてゐるし、又その前の小野道風をみても、其處に滲み出る豐醇な季題感を多分に感受する事ができる。

さて今度の八幡祭だが、これは大正八年に延若が池田大伍氏の作品「名月八幡祭」を南座でやつた事がある。古い所では近松の「忠孝染分綱」や、その他の「お妻八郎兵衞」の中に同趣向の筋が出てくる、それで私も實話時代の流行に倣つて巳之吉殺しの本筋をざつと書いてみやう。

事の起りは文政年間、江戸城表小坊主下谷入尙村伊坂長齋の娘が深川仲町尾花屋へ身賣してみの吉と稱してゐた。茲に本郷四丁目の呉服商吉田屋甚兵衞の倅甚之助なる者があつた。お乳母日傘の我まゝ育ち、二十歳前からお定りの放蕩三昧、父は早逝して母一人、それに姉娘に手代を養子に迎へてそれが商賣を一手にやつてゐると云ふのだから誰一人甚之助の頭を押へる者がゐない。甚之助は吉原扇屋の花扇、深川尾花屋のみの吉と云ふ、花魁と藝者とを兩手の花に眺めてヤニ下つてゐた所が、由來粹と鐵火を生命とする奔放な辰巳の里の羽織藝者が、何で甚之助如き世間知らずの馬鹿旦那一人を後生大事に守つてゐやう巳之吉には淺蜊河岸船宿の鈴木熊次郎と云ふ歷とした色男が控えてゐたのだ。廓の金は詰るが習ひとは誰やらの名言。通ふ程に詰る程に、甚之助には熊次郎と云ふ戀敵の存在が癪々と胸にこたえてきた。この時分には既に甚之助は勘當の身の上になつてゐた。併し遂に最後の思案を決めて母と姉に面會し、泣き落しの奥の手でまんまと二十兩の軍資金を引つ張り出し、それから巳之吉を連れて木挽町の河原崎座を見物に行つた。折悪しく芝居の棧敷には戀敵の熊次郎も見にきてゐた。それと見ると巳之吉はそつと立つて行つて熊次郎に何か耳語してゐる樣子を甚之助はチラと見てしまつた。もう居ても立つても居られなかつた、で愈々最後の決心を堅く定めて芝居のはねるのを待つた、歸りは神田から船を雇ひ、巳之吉と女中と三人晴れやらぬ心に月を見乍ら佃の海を漕がせて行つた。

時に文政二年四月十八日夜四ッ刻（十時）表題にある小望月とはこの十八夜の月を云つたものであらう。初夏の海面に耀く月影、屋形船の簀垂を吹き捲くる爽かな風の音づれ、觀劇の疲れと酒の醉とにぐつたりとなつた巳之吉は舷に出てうつとりと海の景色に見入つてゐる、さい前からの痴話にむしやくしやしてゐた甚之助はかねて用意の懷刀を取出すや否やキラリと一閃その場に巳之吉を刺し殺してしまつた、續く刀で女中に斬りつけた時分には、これを見て驚いた船頭はもう船の中には居なかつた。續いて甚之助も身を躍らせて海へ飛込んだ。彼は逃げた船頭を追ふつもりか、それとも巳之吉と心中するつもりであつたのか、その邊の所ははつきりしない、後になつて甚之助の屍體は洲崎の濱へ、女中の屍體は大森の海岸へ上つた、船頭の訴へで檢視が濟んで巳之吉は川端の本壽寺へ、甚之助は谷中團子坂下の道生院へそれ〴〵葬つた。時に男は二十二歳、女は十九歳。今より百十年昔の出來事である。

以上が正眞正銘の巳之吉殺しの記錄である。

木の芽時の憂鬱焦燥煩悶、それが犯罪と如何なる關係があるか。そんな事はロンブロゾオやフロイドを持出す迄もない。

（第五十九頁へ）

所作事＝お七と吉三＝（南座）

師宣又は春信の筆意

正面に七尺の六曲屏風、これに師宣又は春信筆の浮世繪に擬して、寺院の一室より庭を見たる景、上部に紅葉の枝、障子、緣側及び廂等をも畵心に書き、緣先きには秋草。幕のあくとシンミリした長唄。本堂の方に葬式ある心にて、折々鉦、鐃鉢の音など聞ゆ。

お七　跳への黑羽二重への小袖を抱いて後向きに立身、唄につれて徐かに振りになる。

〽けふぞ知る、世のうきことをうばたまの黑羽二重や並べ紋、うき世を思ひ桐銀杏いづこいかなる上臈の、肌振袖の紅うら

を、繼の山ぶみ山道の、裾わけらしき仕立ばえ

ト、小袖を使ひてよろしくある

〽そらだきの、殘る形見のいとゞなほ、つらしとてしも此の寺に、あがりものかと年頃の、身につまさるゝ秋の風。

ト、お七、無常を感じたる思ひ入れにてションボリとなる

〽げにも思へば一睡の、夢の間なれや花の貌、只後世こそは眞實なれ。南無阿彌陀佛阿彌陀佛、我れをも救はせたびたまへ。

お七懷中より珠數を取り出し、文句の通りよろしくある。此の間にも本堂の鉦、鐃鉢など聞ゆ。奥にて吉〳〵なう〳〵、それなるお娘御慮外ながらにお頼みあり。

七〳〵えゝ。

吉三、銀の鏑子を持ちて出る。お七見とれたる振。

七〳〵目の鹽の、其の底知らぬわだつみに、われはおぼろの月の君。

吉〳〵花こそ君が振袖を、吹く春風のなまめかし。

二人なまめきたる振りありて吉三鏑子をお七に渡し、指先きのトゲを拔いてくれと頼むこなし。

トゞ、お七寄り添ひてトゲを拔くこと。

文樂五月の襲名三つ

竹本南部太夫

さきに越路太夫の秘藏弟子で今は土佐太夫の高弟として嘖々たる盛名を馳せ著るしき躍進振りを見せてゐる越路太夫が師匠土佐太夫並に松竹白井社長の推奬で由緒深き摂津大掾の前名竹本南部太夫の四代目を襲名。時期は青葉薫る五月の四ッ橋文樂座で華々しく披露する。新しい四代目南部太夫は名古屋の產で本名樋口廣太郎當年三十六歳の人氣者であるが斯道に入つたのは大正四年八月で恰度二十一歳の時、鶴澤寛治郎の門を叩き本格的に五行本に親しんだのが始めで同六年には越路太夫の拔擢によつて同門の一人となり同七年一月より御靈文樂の床に上り三月三百年來の由緒ある番附面へ名を連ねるに至つた。研磨の功は燦然と光り九年には越路師匠内室の養子となつたが越路太夫沒後は竹本土佐太夫に私淑し預り弟子となつて入門するに至つた。爾來土佐太夫系の世話物に志し酒屋、新口村は既に定評ある藝域にあり先代秋御殿、十種香、尼ヶ崎と大ものを得意として語つてゐるが此度南部太夫となつたからにはさきの南部太夫を彷彿さす艶物語として活躍すると。

鶴澤重造

文樂座三味線の中堅として近來頻に技倆を上げたる鶴澤淺造が五月の文樂座晴舞臺で申緣の深い四代目重造を襲名する。淺造の重造は幼年學校に入り軍人になる一歩前で廻れ右をして鐵砲の代りに三味線を持つた男だけに風丰といひ性格といひそれらしからぬ男性美に富んでゐる。祖父は名人の初代重造で對馬太夫の糸を勤めた人でその息子が名匠二代目呂太夫である。重造君はこうした名人の祖父を持ち名匠を父としてゐる丈けに藝道の發達も目醒ましく十四歳にして三代目清六に就いてから大正二年十五歳にして文樂座の初舞臺に伊達(土佐太夫)、猿二郎(仙糸)の床で廿四孝の琴を勤めるまでの進域は常人の及ばぬ敏捷であつた。其後絃阿彌翁の直門となり昭和五年駒太夫の合三味線として一本立ちになつたわけで、此度其技倆を認められ四代目を襲ふた。趣味は飛行機、ラヂオに興味を持ち、甲子園へも試合度に見物に出かける、本名は堀作太郎本年三十一歳。

竹本長尾太夫

兵庫縣戸原在出身にして本名は前田房太郎、明治三十七年三代目南部太夫に入門し其間寛次郎より白石噺の田植の段をみつちり仕込まれ名古屋の興行に十一日間田植を語つた處から田植太夫と呼ばれた逸話がある。當時は南勢太夫と稱し端場にあつて研精してゐたが、同四十二年四月三代目鶴尾太夫を襲い、師南部の沒後は越路太夫へ師事してゐた。本來ならば越名の繼ぐ南部の名跡はこの鶴尾が襲ふものであるが、それを越名へ讓り自分は師南部の恩師たりし長尾太夫の高名を亨け繼いで三代目長尾太夫として活躍することになつた。この改名に當つては紋下津太夫、友次郎兩氏が專ら推薦に當つたと。

（第五十七頁より）デカダン第一の化政爛熟期、五月の夜の海に耀く惱しき月、生温く肌を撫でる蠱惑の風、さうした情景の中に、辰巳藝者の粹な素足に羅物の肌、遣瀬ない佃節の遠囃、これだけでも初夏の季題滿點である。が作者は更に夏祭の魁八幡祭禮と通り雨とを添加して一層効果を强めてゐる。呉服屋の野良息子と辰巳藝者では餘りに月並だと云ふならば、これを實直な箱入息子か或は朴吶な田舍商人に更へてみると、一層悲劇的効果が多くなつてくる、そして吉右衛門にはそれが一層よくはまると云ふ結果になるのである。

所作事＝お七と吉三＝南座（一）

七〻何となる、末しろがねの鏑子こそ、ふたりが緣のはしとなし、別れてゐても、つい末に、逢ふとは嬉し戀の謎。

このクドキ模樣の間、吉三は始終坐つたまゝ、此の振りの末近くなりて頭をうなだれ思案にくるゝ思ひ入れ。

お七もどかしがる思ひ入れありて次ぎの唄につれて逝ツ樂に踊る。

七〻時を待てとは、そりや氣が長い、人の心もしらがの媼と、みともないまでこちや生きるより、盛り一時眞夏の晝を、燃ゆる緋罌粟と散ろずもの

この中吉三だん〳〵心の動く思ひ入れ、とゞ、お七に引出されて共に浮かれて踊る、手踊り模樣になる

〻我れを君とも君われぞとも、分かぬ今すぐ死なりよなら。

〻天も地もとなきや、親はらからも、なんで涙が落ちるやら。

踊りをはると二人抱きあふて泣く風の音。

紅葉がはら〳〵と二人の脊中へ散りかゝる、二人驚きて離れて起つ、

〻寢ねくもる、間あらしだつ明け方や、風に谷中の鐘ちか〳〵と。

此間、長く間をおきて二度ほど本鐘。又紅葉が散りかゝる。

〻あかぬ別れに餘る戀、さりとては狹き世の中、常夜の國もがな。

宜しくありて師宣（又は春信）の畵面におさまると——幕——

劇界にも合理化を

——松竹ビルディング竣成に際して——

松竹常務　福井福三郎

「産業の合理化」といふテクニカルタームが敎壇から飛びだして、一般の人口に流行的普遍をみるやうになつたのは、ついこの間のことでまだ一年も經つてゐまい。生産能率の向上、企畫の標準化、科學的經營法、これこそ生産の基礎をなす經濟のユートピアである。

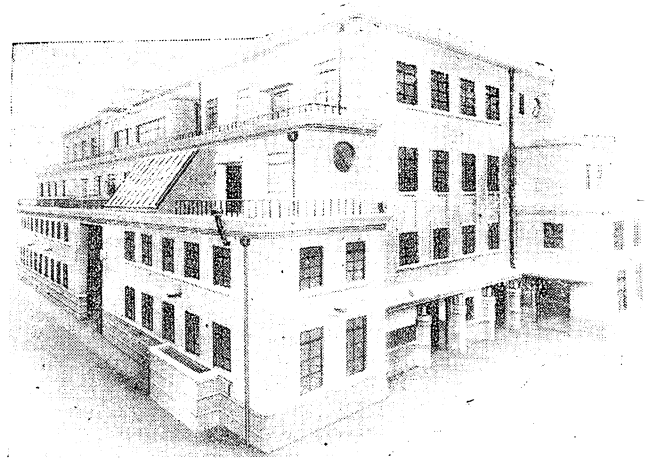
然したんなるユートピアではない。その實現化は高速度的であつて著しいスピードをみせてゐる。産業の理想境とする、合理化運動を、獨り二十世紀の産業革命として、私共興業界のものが他所視をしてゐる事は出來ない。

◇

演劇經營が他の資本團體と比肩して、なんの視劣りをも感じない立派なビジネスとなつた今日、これを小さく考へれば、合名社から株式會社になつた松竹の經營法と制度も、自ら一層の

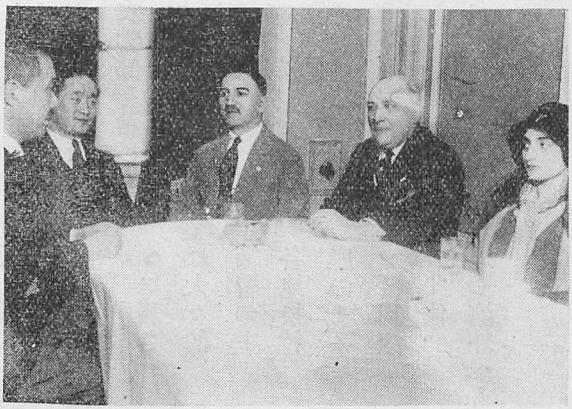
進展を試みてゐるが、なほ突きすゝんだ科學的經營法、合理化運動は目下の急務である。この點から考へて松竹ビルの存在は「興行の合理化」を劃すべくうまれたもので、その第一歩をスタートするものとも言へる。

この松竹ビルディングは浪速區南坂町に昨年六月から工事を起したもので地階とも五階建である。このビルディングへは松竹衣裳部を初め道頓堀松竹座の樂劇部、松竹各劇場の大道具制作部、電氣部が、移轉合一して所謂「幕内の仕事」は全部こゝから送り出される事になる。これによつて今まで一週間の準備を要したものが二日の休演にて初日が出せる時間的經濟と、使用物品の融通的經濟の二方面に著しき効果をあげ得る事と信ずる。尚ほこのビルディングが持つ唯一の誇は二百十坪からなる舞踏練習場と、理想的バルコン體操場を有すことで近く東京のガクゲキ部もこゝに移され大々的練習の上各地松竹座のチエンへ出演さす他、近く海外へも進出するプランを持つてゐる。



醫學大會の文樂總見

第八回日本醫學大會は世界の權威を網羅して去る四月一日から大阪に會を開いたが五日のプログラムは文樂座の觀賞とあつて外賓には憧憬の人形淨瑠璃にて頗る滿悅の體があつた。觀劇者千名にて、津、土佐、古靱、鑛の巨頭連の總掛合い「山の段」には一面の櫻と日本固有の御殿造りの舞臺裝置は破るゝばかりの拍手で迎へられた。



松竹座へ來たカーピ氏夫妻

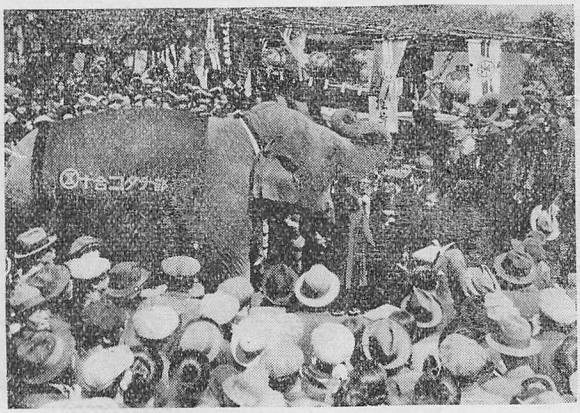
「春のおどり」を開演中だつた道頓堀松竹座へ四月九日は歌劇の本場、伊太利歌劇團の主宰者カーピ氏とその夫人が本國領事のガスコー氏を同伴してこれを觀賞和洋のよくコンデンスされた舞踊と櫻の舞臺に一層の祝辭をおくり、休憩室では白井松竹社長とも種々懇談する處があつた。

殷汝耕夫人と東山千榮子

第一劇場が四月興行を開演中だつた浪花座へ中華民國陸海空軍參議殷汝耕氏が夫人同伴で去る十一日その第一劇場を觀劇した。尙ほ夫人は「色氣ばかりは別物だ」のメンバーから舊知東山千榮子の名を發見し、壽三郎の樂屋を訪ふと同時に東山の樂屋にも訪れて友情をこめた花輪を贈つたと。

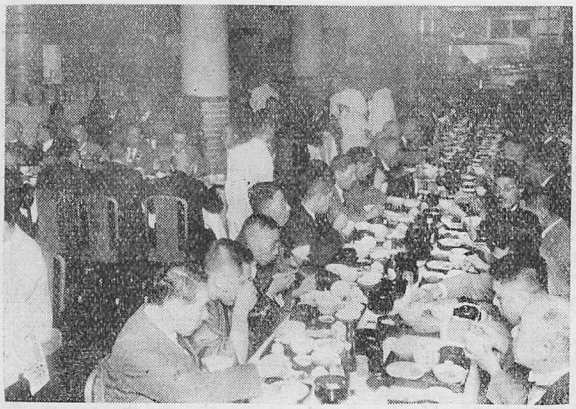
淡海の園遊會

志賀廼家淡海一派が一年ぶりで歸阪した。歸つて來た淡海も、これを迎へるファンと共に、一年ぶりとて異常の喜びだ。これを賑はす意味で夕刊大阪新聞社が主催して淡海歸阪歡迎園遊會を十六日晝から天王寺動物園で開催したが、なかでも一座の紛裝競技は非常な人氣を呈した。



全國の府縣會議長が文樂へ

文樂座四月興行開演中の四月二十六日は、全日本の府縣會議長連の大懇親會があつた。硬ばつた議場と打つて變はる國粹藝術の殿堂におさまつた議長連の顏には、微笑さへ溢れて靄々たる氣分が漲つてゐた。尙ほ食堂は時ならぬ議場と早替りしたが、けだしサルン氣分は滿點……



東都女優連の船乘込み

中座五月興行は關西大歌舞伎連と元帝劇女優、蒲田のスター、新派の精鋭といふ賑やかな大合同劇だが男優より女優の連名の方が多いといふのではないが、去る五月二日は夕刊大阪新聞社が主催して東都女優連歡迎の船乘込みを開催した。夕方からは前日來の長雨もすつかり晴れて河岸はいたる處黑山、午後十時盛大裡に解散した。

劇壇往來

皐月興行

——中座——

五月三日初日
毎日午後三時開幕

【狂言】第一、大島多慶夫作「夕だち」一幕。第二、食滿南北作「心中かつら川」三場。第三「道行初音の旅路」竹本連中、常磐津連中。第四「飾間宅兵衞」一幕。第五北村小松作「天國地獄」三幕十三場

【配役】妹娘千代香、腰元おかる、室長セツ(村田嘉久子)姉娘おせい、女房お辰、靜御前、後室顎世(初瀬浪子)娘お雪、信濃屋娘お半、妻お石、令嬢ミネ子(河村菊江)姉おきぬ、女工チヨ(東日出子)女給百合子、下女おりん、女工トキ(村田美禰子)藝妓桃子、腰元若葉、女工アイ、青田夫人(橘薫)腰元、社長夫人(明石久子)腰元、女工、戸田夫人(堀富美子)雛妓君丸、女工、タイピスト滋野、淑女(小村京子)腰元、女工(中島初子)藝妓菊葉、女工カネ(草間錦絲)腰元、女工(喜多島貞子)女工トシ、芳本女史(西條靜子)女工、淑女(木村紅子)女工(梅野粹子)女工、淑女(酒井惠美子)女工(三島加代子)友人ユリ子、淑女(谷崎龍子)内箱おみね、小間使(飯田蝶子)弟恒次、社長秘書遠山(清水一郎)重役D、運轉手遠山(本郷道夫)父親伊八、工場長富永(梅田重朝)佛檀屋才次郎、狐忠信(林長三郎)工藤鐵藏、皷藤太、青年岡村(嵐吉三郎)會社重役B(實川八百藏)會社重役C(市川升藏)新聞記者(實川芦鴈)左官實は小林平内、骨董屋中村(實川延郎)蜜豆屋、仲間角助、技師山野三郎、紳士青田(實川美鴈)讀賣吉兵衞、會社重役A(市川右左次)講釋師伯聲、法印傳法、主任(實川鴈正)羽室の幸次、某紡績會社々長(嵐橘三郎)帶屋長右衞門、針の宗兵衞、上使飾間宅兵衞實ハ寺岡平右衞門(實川延若)

志賀廼家淡海一派

(二の替り狂言)

——浪花座——

五月一日初日
正午、五時半、二回開演

【狂言】第一、中禪寺晃「娘の行方」壹幕。第二、紅白堂源平作舊喜劇「馬子唄」貳場。第三、惠川重作「航海日記」貳場。第四、惠川重作「車夫から運轉手へ」十一景

【配役】傳九郎妻時江、女房お民(龜鶴)老紳商中川(辨慶)家老佐治、家令村田、車夫萬吉(樂太)主人松野、大西博士(白石)娘時子、本多佐渡守、藝妓君香(かもめ)紳士島山、青年牧馬歸帆)家臣市野、船醫稻垣(伊吹)近侍上原、運轉士南出(浪緑)實業家佐々木、近侍山口(樂祐)青年瀨川、家臣深澤(樂三)妻百合子、山中志摩守(富士野)店員政吉、侍上郎太(銀波)大江土佐守、從者塚田(紫雪)番頭木下、家臣笠井(紅葉)藝妓梅吉、小姓竹彌(浪子)妹光子、娘お今(靜子)藝妓花吉、小姓銀之助(千代子)娘喜代

子、小姓吉彌（友子）音樂家高根園子、舞妓靜男（春江）一子九郎、長男文一（小文樂）大井信濃守、島山妻滋子、藝妓駒勇（辨天）妻おせん、妻百合子、女將とも子（多景島）店員金作 源五郎）庄屋勘右衞門、藝術家廣瀨豪商鈴木（十太郎）松平大和守、船長淺沼（太郎）松永傳九郎、濱田文吉、運轉手野中（淡海）

新國劇

更生一年記念公演

——角座——

五月一日初日
正午、五時半、二回開演

【狂言】第一、瀨戸英一作「異變白龍組」四幕七場・第二、Aロドモンロスタン作、楠山正雄譯「シラノ」修道院の場・B長谷川伸作「掃部と新兵衞」壹幕・第三、竹田敏彥作「早慶決勝の日」二幕三場

【配役】新見左典、浪人青木新兵衞（中井）監督西岡幸吉（野村）青柳勇美太郎、阿閑掃部（金井）ラグノッ、狆伊勢、演說する紳士（南）シラノ、魚屋の清吉（島田 松菊の抱えお蔦、荒物屋の小僧（丸茂 ドギッシュ、西岡の父周造（畑中）生駒織之助、アナウンサー（秋月）左平の紋四郎、松ケ崎久六、校友稻本（小川）捕手頭、安河多久造、伊丹主將（伊藤）平野屋喜右衞門、轟豐前、野球ファン（雄島）尾形宗憲、大野總務（辰巳）ルブレー、演說するファン（高木）平野屋手代藤造上遠野和助、校友鶴見（鈴木）松菊のお燈、ロクサーヌ（久松）お滝の母お龜、敎母マルヂリット、西岡の妻民子（山路）平野屋娘お房、金本のお花、敎妹マルト 新兵衞娘お梅（二葉）玉岡のお光、新見の娘鈴江、敎妹クレール、新兵衞娘お梅（永島）妾お卷、勇美太郎妹美津江、敎妹（初瀨）

近代座

五の替り狂言

——樂天地——

四月三十日初日
正午、五時半、二回開演

【狂言】第一、モーリス、ルブラン原作、服部秀雄案脚色「アルセーヌルパン」三場第二、瀨川春郎作、新進鎭劇「花井お梅」三幕七場

【配役】花井お梅（五月）檢査官、田嶋豐吉（原）男衆峯吉（大倉）給仕アルマン、豐吉の兄富藏（玉川）探偵ケーシャル、銀行家山村（中村）カメリア公爵、澤村銀之助（山田）シャーレイロイ、槙半女將お菊（滿喜）富豪クルメイマルタン、幇間濱孝（井田）ロイの長男、學生佐田、巡査高野（戸田）自動車運轉手ジャン、車夫芳公（龍田）警官甲、筋屋金助（南條）ロイの三男、芝居茶屋の若者新造刑事井上（麻布）プルザンの部下、學生高木巡査大木（有馬）コーベルの友人E、藝妓染次（村田）半玉櫻子（日浦）マーベルの友人B藝妓小ふじ（鴨川 マーベルの友人F、仲居おみつ（森）女中お辰（大月）マーベルの友人C、藝妓美代子、女中お吉（月路）ロイの妻ビクトアル、女中お千代、煙草屋の女房お仙（山口）令孃マーベル、女中おかよ（秋田）藝妓千代龍（平井 藝妓花橘（丘、半玉蝶々（月）マーベルの友人D、藝妓千代香（月橋）マーベルの友人A銀水女將お瀧、女中おやな（富士川 小間使フジニヤ、師匠波崎須賀（小松）お梅の父仙藏（高橋）

關西花形大歌舞伎

——天滿八千代座——

五月七日初日
毎日正午五時半三部興行

【狂言】（畫の部）壹番目通し狂言、中井奉孝改訂「敵討崇禪寺馬場」四幕・貳番目「近江源氏先陣館」盛綱館（夜の部）壹番目、片岡十二集の內「大和橋」一幕、中幕「增補忠臣藏」本藏下邸の場、貳番目「隅田川續俤」三幕・道行「雙面寫姿繪」竹本連中、長唄連中

【配役】遠城治左衞門、佐々木盛綱、三七郎信孝、野分姫の靈、法界坊、おくみの靈（片岡我童）生田傳八郎、北條時政、小池彈左衞門、道具屋甚三（嵐德三郎）酒井若狹之助、舟子半介、馬淵茂助、垂井藤太、花房仙之助、道具屋市兵衞（中村駒之助）蔦の者柏藏、仲居おみつ、野分姫（片岡我久之助）米屋おせき、蔦の才藏、古郡新左衞門、松本忠哉（片岡我久三郎）市原伊平太、庄林宇右衞門、德田定之進、安達彌九郎（片岡松壽）苫作娘おとも（實川小鳩）遠城宗右衞門、渡守苫作、和田兵衞秀盛、庄屋太郎助、加古川本藏、うどんや仁八（片岡長太夫）一子小四郎、舞子小すみ（市川蔦雄）品川幸十郎仲間三助、盛綱妻早瀨、薪屋仁助、高木平馬、尼妙心（淺尾與山）川崎源五郎、松川新吾、若黨小文吾（市川右文次）蔦の者太平、竹の下孫八、仲居おとみ、でつち太郎作（市川右若）安藤正右衞門、醫者李庵、須川長左衞門、石橋武平、井浪番左衞門、山崎屋勘十郎、市川右田三郎、老僕逸平、家主太兵衞、母微妙、馬士駄々八、番頭庄八（淺尾大吉）本多信濃守、女房おふね、高綱妻篝火、佐藤市之進、娘おくみ（中村霞仙）藝者おふみ、渡守おかん（實川延太郎）藝者お里、妹三千歲姫（片岡ひとし）安藤喜八郎、女房おきた、信樂太郎、桃の井若狹之助、手代要助實は松若丸（中村扇雀）

五月の文樂座

三日初日
毎日午後三時開幕

孃景淸八嶋日記

花菱屋より日向島まで

花菱屋の段＝鍛太夫、糸・新左衞門、人形・花菱屋女房、小兵吉、花菱屋長（玉七）肝入佐治太夫（政龜）娘糸瀧（文五郎）女房浦衣（絞太郎）女郎八ッ橋（玉德）花菱屋下男（傳之助）花菱屋下女（萬二郎）

日向島の段＝（中）町太夫貴鳳太夫・糸、芳之助、友之助、友造、友平（切）津太夫、糸、友次郎・人形、惡七兵衞景淸（榮三）肝入佐治太夫（政龜）娘糸瀧（文五郎）尼野四郎（玉幸）土屋軍內（門造）

戀女房染分手綱

道中双六の段＝（ツレ）大隅太夫、島太夫尾久太夫、糸道八（ツレ）團六、勝三郎、團伊三、團二郎福太郎、小庄、淸若、金彌、道次郎

重の井子別れの段＝（切）土佐太夫、糸、吉兵衞、人形、娘（絞司）乳母重の井（文五郎）本田彌三右衞門（玉松）馬方三吉（市松）腰元お福（文作）おどり子（兵次）おどり子（榮三郎）宰頭（玉市）宰領（光の助）

近頃河原の達引

堀川猿廻しの段＝（切）古靱太夫、糸、淸

六(ツレ)猿太郎、友衛門、人形・與治郎母(玉七)おつる(文之助)猿廻し與治郎(榮三)傾城おしゆん(文五郎)井筒屋傳兵衛(扇太郎)

平假名盛衰記

神崎揚屋の段＝(切)駒太夫、糸、淺造改メ重造(ツレ)叶、仙糸、猿糸、綱右衛門、勝市、人形・傾城梅ヶ枝(榮三)姉おふで(綾十郎)揚屋亭主(市松)梶原源太(政龜)源太母圓壽(小兵吉)仲居(寛三郎)仲居(文之助)

嫗山姥

廓物語の段＝八重桐(越名太夫改メ南部太夫)源七(鶴尾太夫改メ長尾太夫)澤潟姫(和泉太夫、つばめ太夫)腰元(相生太夫)局藤浪(鏡太夫、源路太夫)若侍(綾太夫、富太夫、文太夫、辰太夫、さの太夫)若侍(浪花太夫、干駒太夫、長子太夫、楷路太夫、播路太夫)腰元(文字太夫)糸・吉彌(ツレ)歌助、勝平、八助、廣太郎、猿二郎友若、寛平、清二郎、叶太郎、人形・澤潟姫(綾太郎)腰元(文作)腰元(光之助)傾城八重桐(綾十郎)たばこ屋源七實は坂田藏人(玉松)太田大郎(門造)岩淵藤馬(玉市)組子(大ゼイ)

東京大歌舞伎

中村吉右衛門一座

——京都南座——

五月一日初日
午後二時半開幕

【狂言】壹番目「一條大藏譚」二幕・淨瑠璃上の卷「三ツ面子守」中の卷、坪内逍遙作、杵屋榮藏作曲「お七と吉三」下の卷「鳥羽繪」常磐津連中、清元連中、長唄連中・中幕、河竹默阿彌作「赤垣源藏」一幕二番目、河竹默阿彌作「八幡祭小望月賑」四幕・大喜利「業平東下り」長唄連中

【配役】一條大藏卿、赤垣源藏、縮屋新助(中村吉右衛門)吉岡鬼次郎、子守おやま、下男桝八、荷持作助(坂東三津五郎)吉岡女房お京、鹽山女房おさみ、藝者おみよ(中村時藏)常磐御前、積穂新三郎、在原業平(澤村田之助)大椽廣盛、鹽山與左衛門、赤間源左衛門(市川九藏)配役詳細は別册番附を參照。

「ギブス」固煉磨齒

本品を使用すれば、幼時より老年に至るまで齒牙を完全に保つ事が出來ます。何故なれば、**ギブス**煉齒磨は刷子がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのでありますから毎日二回必ず**ギブス**煉齒磨を御用ひ遊ばせ、すれば氣分は爽快になられます。

本品は美しきアルミニューム罐入りで桃色の固煉製であります、有名な百貨店藥店及化粧品店に賣つて居ります。

大形 壹個 金七拾錢
小形 壹個 金四拾五錢
大形中味 壹個 金六拾錢

ロンドン パリス
デイ・エンド・ダブリュー 株式會社
日本代理店 **ギブス**株式會社 **横山商店**
東區豐後町三番地

編輯後記

松本泰三

×

五月の關西梨園は青葉若葉の候にふさはしい清新と潑溂たる活氣に滿ちてゐる。

中座は延若、長三郎等の關西大歌舞伎連に元帝劇女優だつた村田、河村、初瀬等が松竹入りをして初めての大阪出演、それに蒲田の花形飯田蝶子、新派からも二三これに加はつた賑かな顔ぶれ――これに對して京都の南座は吉右衛門一座の大歌舞伎がかゝつてゐる。どちらも觀劇慾をそゝる。

×

淡海劇が一年ぶりで歸つて來た。人氣はすこぶる旺盛だ。淡海氏に會つて何か大阪土産を聞かせていたゞかうと思つてゐたが本號には間にあはせ得なかつた。

×

角座は新國劇が更生一週年記念で、同劇團には思出多い劇場に歸つて來てゐる。一座には熱がある。總理事の俵藤氏、文藝部の竹田氏いづれも一騎當千の勇躍ぶりを見ては新國劇の將來は決して憂ふるに足らないと思つた。

久松喜世子さんから「澤田を語る」中井哲氏からも稿をいただいた。久松さんの記事には興味を持つて讀んでいたゞけると思ふ。

×

「巳之吉殺し」の筆者西尾福太郎氏は幕内部の高橋元太郎氏の紹介である。稿は目下南座上演の狂言「八幡祭小望月賑」の實説である。

×

本號より別册附錄として「歌舞伎番附」を發行する。勿論これは非賣品で、道頓堀讀者のみへ添頒するもので、各劇場で發賣してゐる番附を縮めたものだから内容は同一、縮刷版だけに記錄用保存には便利だらう。この縮刷版の名稱を「歌舞伎番附」とした、別に深い理由はないが、これには關西に上演される歌舞伎の番附は全部こゝに輯錄する考へからでたものである。

×

昨年の五月から表紙をオフセットにかへ、口繪を十六頁に增刷した。それからも種々内容の刷新をはかつて來たが、歌舞伎番附の添頒も五月からだ。考へる程の因緣でもあるまいが、五月は本誌の刷新と深い關係があると思はれる。

×

村田美禰子さんの遭難はまことにお氣の毒な限りである。早く全治されん事を祈る。

昭和五年五月一日發行
雜誌『道頓堀』第五年第四十四輯

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價 金參拾錢（郵稅壹錢五厘）

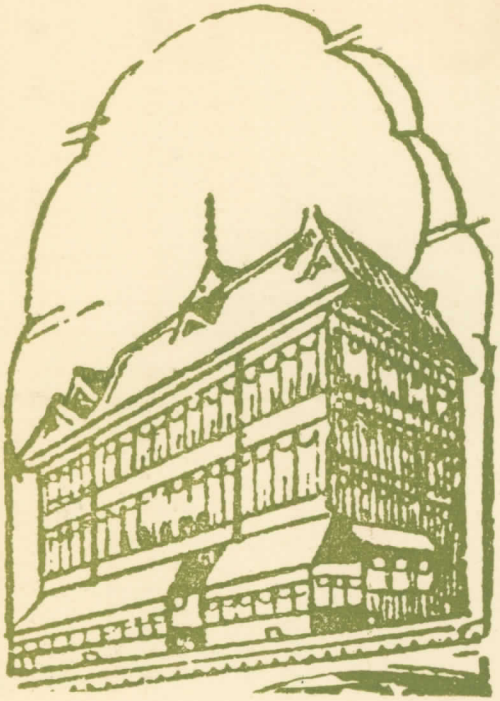
昭和五年四月廿八日 印刷
昭和五年五月一日 發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹土地建物興業株式會社
編輯兼發行者 鳥江銕也
大阪市東成區鶴橋南之町一丁目
印刷者 松本米藏
大阪市東成區鶴橋南之町一丁目
印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹土地建物興業株式會社
道頓堀編輯部
電南（一二四〇番）（六六八五番）

南一温泉料理

文樂座南一



大阪四つ橋
宮河計之助
電話南 七〇一一番 七一一五二九番 長一三二一番
西 六三〇番

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和五年五月一日發行（毎月一回一日發行）
「道頓堀」第五年第四十四輯五月號

道頓堀第五年五月號

第四十四輯

金參拾錢（郵税一錢五厘）